

911.3

八

1

增補
改訂

俳諧歲時記聚草

一

増補改正

俳社



茶時記

茶州

全五冊

法花

三書堂梓

俳諧歳時記茶草序

俳諧茶草序より志て活

法の巻しこころの心守

茶草序より曲亭主人

茶編る茶時記は神祭佛

事をそのをけふもやいふ

注したれきうひまの俳

材とふりあふとたにふい

社くこのをけきふてふ

左よりふそとれとそふ本島
穀まゝ其餘の註釋全
うらわゆるもの多くして
時ふ陰みまゝくるるもあ
里ねーとおのれいふに
おく其是らぬを補い
志者さきをはふ言誤り
をいふー所生詞の類字
をとりて部をわくら歳

時記禁草と名残に
せり坐右最愛物
とーそておむる志
者後世の何るーいつ
見をきていくはむい
そいとめやそふれ
師のようや博識
志者をは穰とそも
本ふちりも免れむ

むつ田に院乃あこく
 ぶのさそを中るあふこ
 あらそに良井やと志
 貴人にひくやひき
 波いれ手の羅ひあへ
 夫つひふを何きく
 中く小山井乃心るま
 る媒ならそし

嘉永三年
 戌柔月

藍亭

青藍

凡例

○世小俳諧詞寄の書ありしとを註釋全うらざる
 故小初学の人時小脇で惑ふ事あり故小曲亭
 馬琴翁先づ何れも俳諧歳時記小あふ
 増補となりてそれ見安めらんあふ四季の詞の
 頭字といふは四十七字小部とわち註釈と
 くらへて席上の便りとす

○あう かう せう せふ せう へう
 あう てう へう へう へう へう
 うを正し悉く部とくつ時ハ却て初学の惑
 ひとあふへうあふをぶく其声の素めやせうへ部
 小併せ出せあふをせうかうの類ハこの部
 あせせせうハ志の部てうてうハちの部へうハ
 の部へうハこの部又ちハ志の部おハづの
 部小併せ出せ余ハ准へてあふへ

○漢文と倭語小書ふあせもハ専ら初学の人め
 たりやあふへんが為あふへをゆへて本文の語

ろく、世説の本文は侯白好俳諧と云き、開表
一笑七之卷に引くところも、俳諧とありて、俳と
俳の誤であること徴し、支考が十論に芭蕉
家の書法やと、人偏の俳諧と用ふべしとい
へるを據あり

俳諧之連歌權輿

詩家ハ俳諧体ハあるハ倣ひて、和歌ハ俳諧体
と云ふこと、倣ひてと云ふ倣ひて連歌ハ俳諧体
といふこと、俳諧連歌の云ふこと、いふことハ、
菟玖波

集

雜体連歌之部
俳諧といふ条

奥山ハ船江音やきとあり

といふハ、貫之と云ふ續て、あるハ木の實やと
いふハ、又あやうと膝より上のとあるハ、
といふハ、實方朝臣と云ふ越のよりハ、雪やふ
るらんと附らまうと云ふ當時多かり、俳諧
登句のちよめといふハ、同上

戸句連歌
といふ条

黒男黒

戸のくハ音もあり、

堀川院云
御製

俳諧十論文明の

頃、山寄宗鑑法師ハ、其世ハ俳諧の名あるよ
リ、守武望一と云ふと學びて、百韻と云ふ千句
と云ふハ、貞徳貞室ハ宗匠の名あり、唯俳諧の言
語をつとへられ、貞室ハや、芳野山の花と詠じ
られ、山貞室、隅田川の鳥ハ吟じて、
都鳥、其句ハ和歌の姿情ふれ、今ハ俳諧の根
さ、其のち難波の宗因ハ、武城ハ、
の額ハ、俳諧の涅槃ハ、破と云ふ、耳ハ言
語のよりとを得て、眼ハ姿情のよりとを得
む云

青藍按、あるハ貞風の涅槃と云ふ、

五畿内ハあるハ、雪や川の、飯、五畿と

いふより、雪と飯と云ふことあり、又檀林

風の眼ハ姿のよりと云ふことあり、又、指

子木ハ紅葉と云ふ、唐と云ふ、

例の輕口をさうしてつるもの

葛の松原

元禄五年印
本文考撰

芭蕉庵の叟、一日嗒焉

うてうてうて、曰風雅の世小行もせしむる、もて
ハ斤雲の風、臨めるがごとく、一回ハ皂狗
とあり、一回ハ白衣となりて、そのふとある
處をちくちく、うたひらむ中間の一理あるべしとて
春を武江の北ふ閑とあつて、雨静なり、鳩の
声のく、風やしらゆ、花の落る夏を
、弥生をあざりて、きこるやあり、蛙
の水ふ落る音あむ、あらめ、言外の風情こ
の筋よりひて、蛙飛む水の音とつる七五を
得たり、晋子、傍り侍り、山吹といふ
五文字を、かゝり、もんもんや、かよを
侍る、唯古池とまゝ、まゝなりぬ、云此句、
自己の眼とひらき、まゝ、正風の一派ひら
まり、るものとて、

俳諧の大意

俳諧の名ハ、史記の滑稽傳より古今集より
をいまり、連哥よりつりてより、宗鑑を
といひ、守武と学び、俳諧の詞ハ、ひろまり、
ど一座の興のいひ捨りて、今の俳諧の姿
情あり、且俳諧の心と傳へる人あり、
故、芭蕉の翁俳諧、古人あり、といふや
と、いふ門人あり、やきて、家訓の秘文とい
あせり、るものとて、その俳諧の心といふ、虚実の自
在より、世間の理窟とをわきて、風雅の趣を
をいふあり、とて、俳諧より三条あり、世情
の人和ハ、五倫の常法ありて、いふ、きこる俳諧
此名とあるべし、いふ、風雅の体あり、
べし、人より此三つをある、といふ、身ハ、千重の
羅綾とつとる、とて、萬一枚のさびとて、

を口ハ珍の菓有とつりぬるも、一瓢の飲
 の樂とわひふ心、世上の變とありて、笑言
 ふ耳と遊ぢむる、俳諧自在の人といつべし。
 こゝらのことわりをよきまじへ、俳諧
 ふ遊ふ時ハ産と破と業と怠るこゝろ、放
 逸のうき名とあへ、くわく世法の一助も
 るべし。

俳諧の大意

増補 俳諧歳時記 草稿

春之部 曲亭主人纂輔
 藍亭青藍増補

春

漢書律曆志 少陽者東方、東動也、陽
 氣動物於時為春、春蠢也、物蠢生也。

動運、日行東

陸謂之春

太皞

帝禮月令 註太皞
 伏羲木德之君、勾

芒少皞氏子曰重、木官、之聖神、繼天立極

生有功、德於民、故後王於春祀之、四時之

帝與神皆此

義下效之

勾芒

神月令其帝太皞
 其神勾芒、去女

蒼蒼天

春の天と云、釈名氣

始発色蒼々也

東君

郊祀

記晉巫

青陽

爾雅春

為青陽

韶光

漢律曆志

祠東君

景曰媚景韶景、云韶美也

春の景色のうらみきと云あり

正月

夏ハ寅と以正月とす、ことと人正と云、商ハ丑
 と以正月とす、ことと地正と云、周ハ子と以正

春

惜月 同上 扱ありぬ月とともなりとむる

正月 院拜禮 元日 大府記 延文五年正月一日辛巳院拜禮

刻諸卿以下參集次無畫御座庇御簾次御出直御装次関白前太政大臣右大臣并大納言

中納言參議以上一列庭中次殿上四位以下別當判官代等一列拜舞了之後從上薦次第

退 嚴島祭 下支地の御前公藝列安藝郡より参る最島と団体し毎年正月下の亥日

小神祭あり近国より衆船より参諸すこの祭正月下の亥日

漂齋寺 国府の奉幣使社家ホ未日嚴島へ渡海す夜半に至る七度半の使あり道芝記 居龍 九

東祭 十日 攝州西の宮太神宮の祭に村民九日の朝より夜小至り戸を開て出すと居龍とい説

神前より男八家子居るとり 雍州府志より居龍祭正月初の申日より四日の間之柵の森より申日より亥日に

神事畢る傳を以問惡鬼遊行す 故より女及六畜と他村より男子家より門を開

國の音と禁声と揚す民向居龍と云亥日旅の神事あり社司正帛と以て口鼻を覆入氣と云神典小解

手神と持て徒行す又五穀の雜種と各一器盛り又農具と村民お携り供奉す神典旅所小迂りて後諸民大いこ

と云と云呼ぶ是居龍の義歟 振陽群談より毎年正月

九日 蛭兒尊廣田の社に臨幸あり神の容相異なるとい人倫の見

とと耻す子の諺とありて村民戸を開て外へ出ず門松と

連ふさして居龍と云明且諸家各戸を開て参詣す世俗十

日 夷のこの諺を十日ふ参詣する十日夷とい以神八龍小

花袋蜈蚣小判おとまぐめと物と賣る下向の人と云とか

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

寝積 寝舉 寝と稻と和訓同トを故小祝詞とす

くの部画鶏ふ帖

羊がらと頭と
唱ふ例の祝

語く玄蕃頭木工頭

かゝるべしと用ゐる多子の義に取らる

磯米摘

垣
磯
辺
の

疑いかへる

字彙云凝冰堅也。のしけり氷
の再び結ぶる意。て互に

とつふ同

飯イ 鮓ゴ

和漢三才圖會 云 狀九五六すなり
其頭鳥の卵のごとく、頭中ふ白肉なり

煮て食ふ其肉粒む

飯いんのおおしし故ゆゑに飯いん麴もくと名なく、

正二月さくらふ上、播州高砂の産飯多

兼三春物遊糸

莊子逍遙篇云野馬塵埃也出
物以息吹者也希逸註去野馬

遊系也水氣也○杜詩落花遊系白日靜

加 14

系遊けいゆう一物いっぶつ系遊けいゆう異名いみな契けい推すい記き 氏

文鳥

紙老鴟風巾ととも同ト、漢高祖陳豨と征す
る時未央宮の遠近と量る為小韓信造るとし

續博物志云今紙爲糸と引て上る小兒とて口と

と張る^{はり}を仰^{もち}ぎ視^みせめり。小児の内熱をうつさせん^{うつさせん}

為之本邦ふちつて亦小児さん子弄ふ小児ふちつて益々

俳諧歲時記之烏賊と名づける

ふ後のちのるるや其形そのかたちの鳥賊いかりふ似にててのの名なままふふ

江戸の俗章魚と云ふ鳥賊に對しての名を伊豆なり

河^{かわ}追^おの間ハ五月上^{ごげつじやう}る、

二月 虎杖

蘇頌經虎杖三月生苗

莖クキ如竹タケノコ笋カサネ狀上有赤斑點、初生分枝子葉似小

杏葉七月開花九月結實○時珍曰枚言其並

虎言其班和名枕虎杖止伊里太枕草子ひこくろハと

らつとせむと云ふ○又これを

其をとりてあはれむ年浪草小羊たる説とておどろく

新
後拾遺集
三月廿一日
の草とよみ侍る

藤原義孝卿と云はるゝの月のまゝるやぐまゝる

らるるさるるてづやうに
童蒙抄
八雲御抄
なし、ふはさん

たつちハ春の若草と云ふを
大和本草 樹彼岸

六 木 櫻と同じ枝長く

春

歐陽修
詩二月

三田

鎮守三十八所
神明
境内
新宮大明神
寺
近津尾八幡宮

明神の拜殿より、古式ハ朝日より三日に至る、朝日三十八所

出仕三日新宮より仁王八講と修す三十八所より神典ふ
 賤と供す晩景ばんけい及て能獲のうかくあり長命太夫と事とすむ師子

舞曾無^{アツク}狂言^{アツク}と云、衆徒各公文^{アツク}所^{アツク}出仕す、三日神輿渡御
 龍藏^{アツク}権現^{アツク}と云、獅子舞^{アツク}献供^{アツク}あり、其間馬場^{アツク}と云、競^{アツク}

馬と催す駿馬并に御者を貫首より出寸其兩側ふ遼法師
立す各花笠をいづる太刀を佩大口とて五人或八十人

元右ニ執綱しつこう、競馬の勝負と決す。勝方かたは白布と給ひ、又獅舞しうぶふと禄一計と賜ふ。今ハ古来の祭式退廃す。朔日しやくにちは新

八幡の西神輿新宮の拜殿より出御神樂あり、三日西神輿

渡御、三十八所の拜殿をむくゝ衆徒法樂の奉幣
のち、次、神酒を供し、舞く還幸を云云。
一 乘寺

祭
五日 八大天王の社、洛北一乗寺の東に在、祭も祇園三
社の中、八王子と土人産土くまがきの神とす、祭も神三座、共ふ

今日祭礼と紀事云一聚寺の村人烏帽子素袍と着て各禪と
けく高声ふ有幸ととて呼ぶ神幸とすむ○一説ふ宵宮

競馬七番せうばんを、宵よに六馬場ろくばにおいて走馬し、
當日ハ旅所りょじょにおいて村民りんみんを小衆せうしゆと、神鋒しんぽう出づ
石清水

臨時祭
又南祭ト云中午日○山城国男山八幡宮、天祿三
年三月八日臨時祭、其後毎年祭之、今も此祭平

將門乱逆の報祭賽のため天慶五年四月廿七日より始まる。江家次第より。公事根源先辰日試樂を舞人竹井室の

近衛の召人求子といふ音楽を合せていふ。當日ハ大

臣以下むぎの花を使舞人の冠おさし、三献五献の後おさゆゝの
事あり

一條院の御位の御時、実方中将、祭の試樂^{シガク}に逢^あふて、^{ちやうど}花と竹の

春

枝と折て... 稲荷

の御出 雍州府志云斎場野稲荷の御旅所ハ油小路七条の

す、... 氏子供奉す御旅の間四月第二の卯日... 池上千部... 伊勢櫻

家櫻 李吟曰人

大櫻 小白花

一歳桃 実と種く當年花

正月六の餅六入 三月燼塞

正月 腹赤奏 元日金事根源

其後四十五... 聖武天皇の御時

腹赤とハ鰯 **初夢** 紀事云九初夢ハ大晦日の夜より元日の魚の夢

ハ思寐 **初鶏** 鶏旦 御傘 元日朝鶏の鳴

ハ夜を勿論元日 **初曆** 曆開 純訖 九曆

初見或ハ春と春と冬より用 **齒固** 齒鏡

春の用と余する為 **世諺問答** 故雨の字と云ハ訓と齒固ハ云ハ

朝食鑑 **鏡** 鏡の形と擬す故ニ餅と云ハ鏡と稱す云ハ思の鏡ハ

擬す云ハ正月朔旦必ず餅と云ハ諸神ハ供ト及一家の長

幼團栗 **春駒** 故事要言云年の始ニ馬と作ヌ頭ハ

岷江楚 **詭前賣** 白馬と御見の云ハ是と云ハけり云ハ

三才圖會 **海羸身** 螺 色形田螺ハ似ル堅ク田螺より大

云ハ昔ハ正朔ニ家内ニ是と撒 **破魔弓** 破魔

蓬萊臺 **矢** 故弓射るの的ハ三重と画ハ中の瞳と除

祭小 **羽子板** 胡鬼板

の供ナ **破魔弓** 破魔

除夜及ハ歳の始ニ心用の酒有 **破魔弓** 破魔

のハ十倍万倍貨殖 **破魔弓** 破魔

矢 **破魔弓** 破魔

雜談 **破魔弓** 破魔

春 **破魔弓** 破魔

蚕飼する家と掃初るころを、初寅
組事 正月初
寅の日 師々山

春は

かきや○大芥オホカイ
同秋律之部
大芥ハ、そのまゝのうたをいふこと

そゆでいもむかうへとてせはんさんこの木のゆくいのち
のおんむしめらのさくせんくのさくやくといふものやうえ
かきあけりともなりはらるゑみんと立六十一の二六

のうたや四三のさいや
年浪草云各踏哥フミカの夜のうたといふこと我
皇延祚億仙齡オウエンソクエキセンレイ万春樂マンシュンラク元正慶序年光麗ゲンセイケイジョネンコウレイ
万春樂マンシュンラクわぐのどく八句の詩のうた毎小万春樂と唱ふト云

初天
神カムヤマト初不動ハツフドウ
廿五日、廿八日ハ、天神、不動の會日に今
年初めの會日おきてバ俗候りに初ト称ス

北

正月、廿日、團子だんご 和漢三才會 京師の俗、正月九

事 今日地下の諸人ものく遊び、日月とらむく團子と食ふ。

是と先日 團子といひて 雀郎とす、
事文類聚
 江東俗号

正月廿日ネ為天穿ニ○今日又婦人鏡臺の鏡餅と祝ふニ

初顔はつがんを祝いはふの意いう
初芝居はつしげ
紀事正月二日、四条河原浄瑠璃歌舞妓

等々とうとうと始まりと初芝居はつしげといふ
武江ぶかう堀門くわもん大坂道頓堀おさかみちとんぼりも又ある
春永はるなが
初春はつしゅん小三春せうさんしゅんの季うき
長々となが々としてある

花はなの兄あふ
梅うめの異名いなりな之、二十四番花信風はなしんぷう小寒こかん一候いちこう
梅うめといふ始はじとす、故ゆゑに花はなの兄あふといふ
春告はるつげ

草くさ
梅と云い蔵玉ぞうぎと云いの春はるづけ草くさの花はなの
火田か打うち、火田か

田とすく
 和漢三才圖會 田と鋤くハ耒耜を用て
 土とく、田と鋤く、むすおとも同

本草 時珍曰、蓮花葉常偶生、偶生者、
二葉并生、故云藕、或云藕、泥と耕

寸故ふ字耦もろふもろふ耦もろハ耕うむ冬ふゆ月つき
春はるふもろ至いたる藕いもと堀ほりて食くふ
兼三春物
初鮓

早春よりあて漁入是とて、
市に賣ると云、子細あり

春宮 ハるのこ

礼記春宮太子東宮 とくしやう

也夫木 木 吳竹の園 その

うる春の宮ゆゑてと千代
 の色ハミエうと後京極
 春雨 はるさめ
 春の雨 鬼貫独言
 高月雨 春の雨ハとの

こもろ
てまび
春告鳥
鶯の異名之
古今
鶯の谷う止る声
かへば春くるよと
大江山

十 里
箱柳 白楊
時珍曰木高大葉圓くして梨の如く肥大し尖るを面青く

春は

ちて光て背甚白く、鋸の如き齒を木肌
細く白く、性堅く車一梁拱とて撓曲す 春のしじ

か部霞の 春ふあひや 春ふ逢んと云詞へ又来る 春
余ふ注す 春ふ逢んと云詞へ又来る 春

あふぬ 伊勢物語 月やあふぬ春や昔のまゝ 春ふ逢んと云詞へ又来る 春

ぬ 兼文が春ふ逢んと云詞へ又来る 春ふ逢んと云詞へ又来る 春

春ふ逢んと云詞へ又来る 春ふ逢んと云詞へ又来る 春

はく 万葉 春ふ逢んと云詞へ又来る 春ふ逢んと云詞へ又来る 春

花の時 二月 初午 二月上旬の日と云 神社啓蒙

京城と去ると東南一里あり、祭とてこの神三座下社大山
祇中社ハ倉稻魂上社ハ土祖神云、〇元正帝の御宇、當社影

向の日偶二月初午日故今ふ至て此日と用ふ 神祇拾遺 雍
州府志 當社の出現ハ和創四年二月九日、此觀より従て長曆と

以てこれを推すと云其日偶初午の日ふ當ふ然れども今日日
と用ひずとて初午と用ふ故俗初午詣と云又福祭と云 紀

事此日新御供社家毛利氏調進す、中の社ハ倉稻魂と祭り
田中の社ハ大己貴命と云、本朝衣食の祖神なり、蒼生

安逸の社、今日農民泰詣と云多し、門前の家、百穀の
種并雜菜の種と賣る又大小の陶器と賣る、その大なるもの

とハ博法と云其ころハ摂州博法の海濱より始めてこれを製
す故ハ博法焼と云是、其小なるものとつゞくと云此土器と云

の中に運轉させ、つゞく音を故ハ名とす、此と云く小
児と賺し又大人も塩と此内へ入く火中へ投下焼塩とす、

今日民家多く菜の葉を食ふ、凡泰詣の人神前へ投むる
処の錢と云、簾の間へおとし、そのおとし、その人福と云く

こと、請得て家珍とす、〇此神ハ七度詣と云ハ傳ふ拾
遺集ハ滝の水をくると云、ハいつと山七日の宿と云、と

思ひ〇武江とて此日王子妻恋三田真崎の社と始にし、
武家市中とて鎮守の稻荷と祀り、灯燭と云け鼓吹と云

舞ふ、近くハ雲間の霹靂如く、遠くハ蒼海の
波濤如く、江戸の賑ひ耳目と驚す、堪え 初雷

春は

初電

月令 仲春之月、雷乃發、始電。紀事 九春の中始て声を發す是に初雷と云。

蜂

同巢

蜂數品を蜜峰と云、大黃、小竹、赤翅、蟻、蜂、蜜ハ夏月蜂の脾の中貯る、已に冬蜜の食

物とせんが爲に、自然小脾と結び貯るると山蜜と云、熊野小ハ山蜜といひて上品とす、又大樹の洞中貯ると木蜜と云、家小養ふと家蜜と云、九蜜と醸す。所諸国にあり、紀州熊野と第一といひ

孕鹿

時珍曰、鹿の性

淫、一牡常小數の牝と交る、牝妊むる九月ありて、一子と産。○雜文曰、本草ハ九月ありて一子と産の説未詳、六、年歴るる鹿多子と産て往くこと

孕雀

雀の子、本朝

あり、ちうと三子と過ざる。雀の性淫、春三月、秋八月、孕く卵を生む、班ある瓦甕格間の虧隙、堂社の破竅、朽木の空穴、小巢とつくりて、卵と伏す、小さきものと黄雀と云、雛の口黄ありて未黒くぬ故名。そこ鳥、カ部顔鳥、初

花初櫻

花ハ端山より咲く、奥山に至り、紅葉ハ奥山より、漆く端山に至る、其冷暖みわいて

花と待

初学和哥式花咲をめてはうらむとむとを、余にきて散名残と云ふ、待花ハ思ひやうと

三月巴字盛

部曲水、半仙戲、カ部靴靴、の條に注ス

花鎮祭

晦日公事根源、是ハ大神狹井の二祭と云、神祇、今ハせく、春花の體、つるハ疫神を散

人ともやま守、故にうらむと云ふ、めん、爲、此祭ハ五と云、神祇官より行する、蛤あり、カ部、の浦の汐子

凡三日より七日迄、汐子見物の輩、泥中の蛤とせうと方言ふ、あると云、是より、踏或ハ棒のさけきて突て蛤、蛤のや、知

花

横川曰、櫻の我國にわたくし、さうと云ふ、花と云、芭蕉翁曰、我家の正花論ハ

花盛

花、吉野山の櫻も立春六、五日と云うとす、又年の寒

の袖、花の袂
 枝折萩花の袖、うき袖、花ハる足
 詞、御傘、紅袴、袴、袴

巴雅^{ヤハ}ち^チぶ^ブだ^ダれ^レど、只^{ただ}あ^あも^もと^とも^もて、春^{はる}の
 七^{なな}重^{かさね}、七^{なな}龍^{りゆう} 和

花ハナ正マサ花ハナ
補ホ不フ音イン

三才番會
竹器無係為筥有係為藍下略
和名抄 筥
加太美

御傘 正花之植物之春云。○花々々。花々共。花と云すか。

て、四時何の花とぞ守るものあり、只花と
色いろ血ち 佛家ぶつがにて

二、いふ専ら例春をあつたふはらるる春をはらるるるに
 不ふ立た供養くようの

花と盛る器
花舌、花入、花筒、花瓶、花
瓶、花風、花

ちう正花し
新治
不筒
不弄

皆花とて
花車、花見車
開元遺事 揚国忠

不豆 子弟春時名花と

移し木檻中へ植下し輪脚を設け挽糸繩と以て至

石所自ら移春檻と号す。○花見車ハ花ある処へ乗く

行く車
毛
差、
毛
襲、
毛の
盃
増山井

ともし
不立
不立
不の
不立
こゝろ
其

[illegible]

花空穗
花筏
說云筏了

年浪草大臣家の賜了そ召

花の隨身
具せしる隨身えわす花

身ミ造ゾウの美ミ々々、ちチ々々バ楊ヤウ
三さん二に一いち年浪草花肆

国忠が移春檻の類々可尋
 花造
 又造花肆ノ類

ニヤ○新古今集ニ新成櫻モクろ花ヲ題と云

おもに新成櫻花ハ古き抄ニ作花のそゝり

草木の花の名と探題くわんぎなどの如く聞きこえしうゝ哥かなど

又ハ男女の名ヲなづ准すテ縁えんむるべの戯あそびをうのこと、女子の

翫ハカ花ハナ酒サケ類聚國史リョウゴクシ弘仁二

シ
花宴
年二月、神泉苑に、行幸あり。花ともの

文人小令トク詩と賦と禄と賜と
先軍
天竺遺事長

花宴の節このころと始はじまり

と盛ふく、士女花と闘ふ、栽挿む、奇多と云ふと云ふ

勝とす、千金を用く名花に市ふ庭小植く、以て春時

毛茛 月令廣義 綠草鋪裯落花為禡

備ふく不_レ五
落花の上坐するといひ又花見の老

このふみへ又花見
の席ともしとて

花の繪

御傘 正花と持て
花

の都

釈名 国城と都とを國君の居る所人の都會する
所この花の都は只都に花を褒め又都の華美なる

花とふらん

法華經序品是時天曼多羅華摩訶曼多羅華曼珠沙華摩訶曼珠

御傘 法華經の四種の花とやん何と云ふれを春とて

花の

踊

御傘 花やとて盆の踊と云ふとて花見とてとて
と常の事さまでせんといふは正花とてとて春と

花の縁

一説は花の淵の誤り

花香

風靜花芳といふ題
あて世中ふたえ春

風ふくもがぬふくも花の
香はるもひけり 逍遙院

花じ

御傘 花やとてとて
三正花とてとて

花鳥

李吟日花とて鳥とて又花と鳥ととて
花と鳥と二つとてとて花鳥の字清く訓

花

散る

飛花

天水抄 花のまつる体ハ山里深山に倫し
落花 絶くもとて掃るも所花とてとて

花の主 花のあはし 花守

皆人

花とてとて花とてとて人倫
あはしとてとて是体用の差別なり

花園

花とてとて
花とてとて

花圃

花とてとて草と種と可と云故貞享式
秋季決せりといふ論なりといふ

花嫁 花婿

其女の夫ふ婿ハ男の
女とむとてとてとて月

花の幕

花の幕

花の山

花ある山ハ花山の文字
とてとてとてとてとてとて

花の

雨

花のあめ 支考

馬

馬

藤原前經 葉蓮
ふ似ハ長ハ等

三月紫碧の花とてと五月実と結び角子とてと麻の
とてと大とてと赤色稜あり根細く長く通黄色なり人取

春は

鼠麴草ハハコネサ、時珍曰、二月苗タネと生タネト
莖葉柔軟、寸許ハハコネサ、白茸ハハコネサ苗の

耳の如く小黄花を穂に細く結ぶ大和

本草 鼠麴草ムスコク又佛耳草フツナと云ふ已ミに用てもち料りょうとす。

近世多く
合去
救荒本草
山茶科ハナツチノキ條の高さ四五尺

莖葉之用
枝梗、灰白色、葉、皂莢の葉、似

又槐の葉ハナノハ似亦円ハナノハ四五葉一処ハナノハ攢アハり生ナすハナノハ

稠密久味苦。嫩葉を取。燂熟。水淘て洗ひ

油塩しお調てう食じき子こ亦また蒸じやう入い十八じふはち夜や立春りっしゅんの日ひか

晒乾茶湯煮之飲

當^{あたら}と^し志霜^{しじやう}の
春^{はる}の奏^{そう}
春^{はる}の^{うた}うた^{うた}と^し心^{こころ}く

糸と通り見へし
○くれぐり春のうもと

春の限、春と惜

おのり守江の要ナ氣違
やざりぬ
春

正月女叙位

日本紀
天皇五年春正月癸酉朔
易内見三王

是始之公事根源是ハ女房の口實と

卷之四

二宮大饗

年
月
日
以下二宮を奉りて

句草

紀事大戸と庭上るる台家席と浦で馬壺す。是

世間胸算用元禄五卷四云正月奈良中

家々々々庭々電々々金々々焼火々々庭々敷物

ありふらんか
其家内且那も下人カむとふ
樂居して不斷の居

明^{あき}をきて、
 所^{ところ}のあつとて論^{ろん}へ入^いる
 累^{かさね}と目^め時珍

餅と庭火を焼くふと名づくるは
虫を
其

蝸牛似其類多唯泥水之食春月人取之鍋中

置、身を蒸く、其肉をのみ、出づ酒、蒸糟、煮て、年を

魚三春物句入鳥鳥の異々名分類條目

雪もまじり消えぬ山並

二月二月堂行同水取

月日

三日月の行去、月望より二日、上七日に之。

春に

二月堂本尊觀音の像大小二体あり上七日大像觀音の前身ねの法事と修す八日と十四日に至る下七日とこき小觀音の法事あり七日の夜又十四日の夜とも水屋の井に牛王と貼するの水を九年中用ゐる處の水この両夜と水を汲く桶を畜ふ古へ実忠若狭國寄飯の明神の託宣あり水と枯井やう牛王と貼す七日十四日の夜水も干枯井も干時珍曰葉青く涌出まゝ今の井水の常満る如し

非 時珍曰葉青くつる子と以て種べし葉の高さ三寸剪る小口中を忌む一歳五つ過ぎる過す子と收るものハ只一び剪る八月花を種ふ八月種ふ春苗と食ふとある九月子と收む

示 夏薑と食ふ秋種と收む

和漢三才圖會接骨木人家の藩む接骨木花 蘿ふるを植る三月小白花

和名抄一名逐波佐 李吟曰山櫻も庭櫻もいれと横生しと作す年

逐波櫻 和名抄一名逐波佐 李吟曰山櫻も庭櫻もいれと横生しと作す年

和名抄一名逐波佐 李吟曰山櫻も庭櫻もいれと横生しと作す年

和名抄一名逐波佐 李吟曰山櫻も庭櫻もいれと横生しと作す年

蛭 時珍曰蝸蠃一名螺蛭師ハ衆多あり湖に故二名あり其大を指の頭のより売田螺より厚く泥水と食ふ春月人米鍋中置くと煮せば肉のつる出づ清明の後其中小虫あり用る堪む 和名抄河貝子 奈用螺字非也 古ハミカと云今専ら小と唱るやうて下部ニ附ス

鮎子取 和漢三才圖會南詔津輕蝦夷最多一九月と春に至ると取大なるものハ尺餘あり一網に数万と得る頭と尾と去る干魚と去るもの頭尾ハ田圃の培とある子即ち鮎の子

三月 仁和寺高

雄の女詣 三月廿一日御影供と修す故小女人登山するを許す

結縁の意あり

正月 星佛 和名抄一名逐波佐 李吟曰山櫻も庭櫻もいれと横生しと作す年

滑誓雜談當年星の九曜と云

と歳の初小祭ん爲ふ其星の形像と彫て禁裡院中へ佛工所へ調進す是と顯密の行者或ハ陰陽家不仰せし星供と行せし民家

みも亦星と祭るこの九曜の次第羅土水金日火計月
木と一歳と九歳とふつとふつと十歳と十八歳と
いくとふと九年目とふとふと
蓬萊飾

紀事倭俗新年三方堂と海老慰斗昆布推橙穂俵
ホと置先賀客ふ供と新年と祝ふ是と蓬萊臺と

云列子渤海東有山一日岱輿二曰員嶠三曰
方壺四曰瀛州五曰蓬萊華實皆有滋味食之

不老不死所居人皆仙聖
穂俵 莫鳴菜末 朝式奈と里

曾神馬藻漢語抄奈乃里曾和漢三才盡全西南の海

小多し冬と身と取乾し藁押と以て一握りさう抗
巻て束と米俵のかさうして

穂俵と名づ正月蓬萊臺の飾と
穂長 志部の 齒糸の

条ハ 宝引 福引 難談抄 餅の異名と福生果と云
出 故ハ餅と福と云古ハ福引と云

餅と二人と引あて侍と云
爆竹 志部の 長の糸と

骨正月 京大坂より新年の嘉祝ハ必ず 餅の肺と
用ハ其魚の骨ハ大豆酒の糟と合し煮熱

食ハ故ハ骨正月と云
堀入 根の糸と 兼三春

物 波蔭菜 時珍曰四月莖と起一尺つと云ハ
雌雄あり莖と就く 碎紅花と云ハ

雌ハ実と結ハ刺あり種の時研開きて
防風 和漢 三才

孟会 其嫩き時醋末醬小和く食ハ極めて
二月

本妙寺詣 初午日〇江州三上山の辺ハ旧跡あり
今と二月初午詣あり此本妙寺山門

亡滅の時江州辺の末寺と共ハ回祿す其身と又其寺
相傳ハ近江国野濱郡百足山本明寺本尊馬頭

観音今旧跡三上山中ハ堂宇僅ハ二間四面世俗の説
小本尊俵秀卿守り本尊と御長一尺なり毎年二

月初午開帳を鰯口の糸ハ百足山本明寺とも其麓の
春

三月

木瓜花

和漢三才圖世に木瓜と稱するもの、本草の註にあり。

是本桃^{もも}、木瓜^{もくけ}ふあず近頃唐木瓜^{からもくけ}と云もの、
人其花と愛す乃ち真の木瓜^{まもくけ}、
の如し、春の末花、
とむく深紅色、
二尺冬と歷く凋^{しお}、形短^{かたちみじか}、芒小似^{みぎこに}、厚くこはく
緑色、冬中^{ふゆなか}と発^あ、数籜^{かずとう}苞^{つつ}とす、紅白色、三

春蘭花

根叢生す、葉長と

二尺冬と歷しほく凋しぼるす、形短うしろみき芒すすき小似ひかふ、厚あつくこわく
緑色こゝろいろし冬中ふゆなか竹たけ筍たけのこと発あこし、数かず華はな苞つぼとみす、紅白色べにしろ三

月ふ至る幹の長さ數寸梢に當つて花苞中より出
くたゝ一花五出青黄色形建蘭花に似たりとある
や潤く香氣あり此
物蘭譜に出る独頭花也
郭公の巢杜鵑の巢
和漢草木名

二月

蛇蠍地虫の類元と

出いづる

月令仲春之月蟄蟲咸動始出
始出注謂始穿其穴而出也

月
歲德神

元方棚 **紀事** 陰陽家來年の支干
小因く四方の間吉兆と考

得方とくほうと称す、甬蓋内傳年徳神ハ
 頗利女はりめといふハ、将神の母とす、
 桃符、桃

板
桃
梗

仙木トナリ神茶トナリ淮南子トナリ界桃トナリ糖トナリ死トナリ詩トナリ
樽壘トナリ慎注トナリ云トナリ梧トナリ大杖トナリ桃トナリ之トナリ以トナリ

て、おれとつる、以て昇のぼとち親おす、おとちて、以て果はと

鬼と辟ふるの故に六帖元日桃符と造り戸

ふ着くこまを仙木と云百鬼の所畏に風信通東

海度朝山に桃樹を屈盤く三十里其卑枝東北ふ

むふ鬼門と云二神あり神荼鬱壘と云衆鬼出入執て

以て虎を飼ふと云わいて黄帝法に膏藥三日

主上へ千瘡膏と云膏藥と進るに後醍醐天皇御額并

耳の裏へ傳ふに江次第に主上取之右の無名指と云て

左の掌ふめりめりふと云注ふ右の才四の指と曲るは

是大師の印相と云一名千瘡万病膏と云わづくの

名と思て屠蘇供ずの条に出年男紀事云

汝むと年鳥追殖州府志云馬の元日より十

男といふ五日小至を笠と着白巾と云て

面と覆い手と云て祝語と云へ門戸ふりて米

錢と云ふ是と敵の与次郎と号す又鳥追と称す

と云民間田疇の鳥と追いといふ辟と云ふもの

今東都とてハ俗に女太夫と唱ふるもの編笠と着三

年王新年の賜と云東叡山

大黒の湯三日武江東叡山中護国院に大黒天あり正

月三日餅と湯ふりて泰詣の人ふ飲む

と云大黒湯といふと云ふもの必所願成就と云

と云此日諸人泰詣す或はお福の湯といふと云

と云部左義真言院御修泊山鳥付の条

長の条と云宿直人法の条と出す

に鳥さうる書苑典仲春殿民十のこの花

出部松の飛梅菅家筑紫へ左遷の時梅と詠ふ

花の条に出花の条に出歌小東風ふり匂ひにせし梅花あ

るにわくく春と云ふるふりてとめこの梅

梅最中にく謫所の庭ふ生と云と云

新古今とめこの梅さうさう我宿と

うと云ふ人ハさうふことと云西行

春と云葉頗る著黄ふ似く小白花と云て青き子と結三三梭

春と

あ其根老薑著黄の形ふ類す俗に野老と云と云

海老一其日

嘉祝の食物

兼三春物

轉鳥

水鳥嘍

古今 百千鳥 春物

1874-1875

الحمد لله

卷之四

Handwritten signature: [Illegible]

2 2 2 2 2
 2 2 2 2 2

和漢三才

紅梅の葉のつぼみ——花の

吳元孫

五

W 615 W 616

— sample series

4th number in the series

二月東福寺藏法

慈恩山東福寺、各の東東南は、月可の町道、小、高、を、地、を、一、の、橋、

上野の境、南と一ノ橋と名づく、印端奇の上、前へ

萬曆二年三月廿二日 林任 里我 市良

同里張氏

見有二三篇

禱年祭

像名持て情通又信す

周禮初年封豐年

七 和禮志 市年寄 禮三千二百三十一座之内 神極宮 祭

祭明寺道 九五 河内國

卷之三十三 五十五座

師村しむら一名土師寺と云中央佳持の尼光壽にこうじう、智承ちじやう打

あるが故に左遷の時、この寺へ来たのである。

抄 當寺の天神と人天總日命の宮に管霊の社と

一 上金^宗の二十五日小祭と道明寺祭と○世了

五雜俎 古巢 鳥 精 明寺

寺の比喩尾の字業より

東牢固甚於人

拔木而棄終不傾也雜木括枝縱橫重疊不

知得膠固無急此理之不可曉者凡鳥羽生如絲

雄瑩巢成而後遺卵伏子及長成飛去

則空其巢

不復用矣

唐德宗以上已鳥おとせ關紐かんじゆ六周

五、金、郭、規、花、節、提、之、手、知、矣、名、世、始、也。

紀事本末

運濟石殿南階の前より問難ある其難諸家の中重宝

仙納弥市此を預りてと生かす

勝負之決、是を以て行事と稱す。

春 乙

石取

雜談抄云、毛吹草、三月三日土法國の西寺の御
時の海底より、硯石と取出す事侍る其潮干の

時刻小及く、西寺の僧海上お出く、經を讀誦す、
侍る、今世多くハ国主領土の末地とあつて、振つふ

石とあつて、**鳥巢**、鳥の巢ハ樹上なる木の枝
と云ふ組合を巢と云ふ、**鳥**

帰、千載集花ハ振ふ鳥ハ古巢と云ふ、**虎尾櫻**
春のしやうとある人ぞかき、順徳院

此樹の類、うさぎの枝條屈蟠多く、花の莖みどなり、
枝上ふ花と葉と斑みく、虎ふの如し、故虎尾の名を

正月 朝賀、朝拜、奏賀、奏瑞、公
朝拜、事

振源、朝賀と云ふと朝拜と云ふ、元日辰の時、天皇大極
殿、行幸あり、行幸あり、群臣も礼服と着て、

さかき御即位の儀式も同じ、奏賀奏瑞とハ去年の目
録度嘉瑞と云ふのを、國と云ふとせ、ハ事と記さず

今日奏す、**小朝拜**、公臣下の元日とあれど、天子と
朝拜ハ事と記さず

朝廷の爲みと云ふ、ハ神事ハ事と云ふ、ハ事

ハ私の礼、居ハ私礼と云ふ、本礼と云ふ、ハ事

六十代延喜の御宇ハ勅あり、延喜五年、尤大臣時平公、仲
と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

石取

雜談抄云、毛吹草、三月三日土法國の西寺の御
時の海底より、硯石と取出す事侍る其潮干の

時刻小及く、西寺の僧海上お出く、經を讀誦す、
侍る、今世多くハ国主領土の末地とあつて、振つふ

石とあつて、**鳥巢**、鳥の巢ハ樹上なる木の枝
と云ふ組合を巢と云ふ、**鳥**

帰、千載集花ハ振ふ鳥ハ古巢と云ふ、**虎尾櫻**
春のしやうとある人ぞかき、順徳院

此樹の類、うさぎの枝條屈蟠多く、花の莖みどなり、
枝上ふ花と葉と斑みく、虎ふの如し、故虎尾の名を

正月 朝賀、朝拜、奏賀、奏瑞、公
朝拜、事

振源、朝賀と云ふと朝拜と云ふ、元日辰の時、天皇大極
殿、行幸あり、行幸あり、群臣も礼服と着て、

さかき御即位の儀式も同じ、奏賀奏瑞とハ去年の目
録度嘉瑞と云ふのを、國と云ふとせ、ハ事と記さず

今日奏す、**小朝拜**、公臣下の元日とあれど、天子と
朝拜ハ事と記さず

朝廷の爲みと云ふ、ハ神事ハ事と云ふ、ハ事

ハ私の礼、居ハ私礼と云ふ、本礼と云ふ、ハ事

六十代延喜の御宇ハ勅あり、延喜五年、尤大臣時平公、仲
と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

石取

雜談抄云、毛吹草、三月三日土法國の西寺の御
時の海底より、硯石と取出す事侍る其潮干の

時刻小及く、西寺の僧海上お出く、經を讀誦す、
侍る、今世多くハ国主領土の末地とあつて、振つふ

石とあつて、**鳥巢**、鳥の巢ハ樹上なる木の枝
と云ふ組合を巢と云ふ、**鳥**

帰、千載集花ハ振ふ鳥ハ古巢と云ふ、**虎尾櫻**
春のしやうとある人ぞかき、順徳院

此樹の類、うさぎの枝條屈蟠多く、花の莖みどなり、
枝上ふ花と葉と斑みく、虎ふの如し、故虎尾の名を

正月 朝賀、朝拜、奏賀、奏瑞、公
朝拜、事

振源、朝賀と云ふと朝拜と云ふ、元日辰の時、天皇大極
殿、行幸あり、行幸あり、群臣も礼服と着て、

さかき御即位の儀式も同じ、奏賀奏瑞とハ去年の目
録度嘉瑞と云ふのを、國と云ふとせ、ハ事と記さず

今日奏す、**小朝拜**、公臣下の元日とあれど、天子と
朝拜ハ事と記さず

朝廷の爲みと云ふ、ハ神事ハ事と云ふ、ハ事

ハ私の礼、居ハ私礼と云ふ、本礼と云ふ、ハ事

六十代延喜の御宇ハ勅あり、延喜五年、尤大臣時平公、仲
と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ、ハ事と云ふ

雜談抄云、毛吹草、三月三日土佐國の西寺の御
崎の海底より硯石と取出す事侍る。其潮干の

時刻ふ及く西寺の僧海上に出く經を讀誦する

石とてふ
あづき
六鳥
とてふす
果
さの栗ハ樹上より、木の枝
とてふ組合せ、果とてふ
鳥

帝ミカド
千載集センザイシュ花ハ振キふ鳥トリ古巢コサネ少シくも
虎尾櫻コノヘオウゴン

此樹の類うく、枝條屈蟠多く、花の莖みどおり、
枝上小花と葉と斑みく、虎ふの如し、故に虎尾の名を

正月 朝賀 朝拜 奏賀 奏瑞 公

朝賀あそと朝拜あそと元日あそ辰の時あそ天皇大極あそ

殿、行幸ありし、行幸多し、群臣も礼服と着て
 御即位の儀式も同じ、奉賀、奏瑞と、去年の目

國度嘉瑞とてのあらを國よりよめば、こころを記して

今日癸すん小朝拜^{ミツ}兵臣下の元日^{ミツ}すんあれを天子と
請^{コト}ふ行^{コト}ふ公事^{ミツ}すん

朝廷の爲もとす。神事・仏事をあはれむ。ハ是

ハ私の礼人君ハ私ハしと云本兵ありて
六丁代延喜の御宇ハ勅ありて延喜五年、老大臣時平公仰

抑^{おさへ}朝^{あさ}拜^を八^{はち}百^{ひゃく}官^{くわん}とぐく拜^をとく

ととも朝拜ハ殿上ノ方ニテ
まゐりあやちふ臣下ども
元正の日君ヲ拜奉る事

孝子にやせり久、同十九年に
 朝親行幸
 公事根源
 云是天子

年の始ニ上皇并母后の宮ニ行幸をなさりて、嵯峨天皇大同四

年八月、朝覲の儀あり。嘉祥二年正月、仁明帝の母后、朝覲の時、冷泉院へ行幸あり。時、南階を下り、父

とをいへる。跪きあひあひ侍る。周礼に春日

是朝親のころか
千代の春
百世万代も古也

帳閉帳書

まともな簿冊と裁補す、れと
兼三春物

帖綴とく
春はる

本朝食鑑二月彼岸種と下す、三四月苗と生ず、葉と
采る、中畧蔬と食ふ、足る、五月黄花と開く、初て綻る
野菊のこゝろ、**二月中和節** 李泌傳唐德宗上巳
一花子と結ぶ 九日と以て皆宴樂を

く寒食す、上巳同時二月と以て節と名づけむと欲す、泌
二月朔と以て中和節とせんことを請ふ、上巳と九日とと
加へて三令節とあり、**兒櫻** 山櫻の二種あり、又小櫻のちやうど
別種と云、按る、山櫻のちやうど、
紅色と合ふ、義くく愛りき、**蝶** 胡蝶、黃蝶、蝶々
花あり、故小兒櫻の称あるを、
時珍曰、蝶ハ鬚長あり、蛾ハ眉美あり、故小ハ胡蝶と名づ、
俗ハ鬚と胡とす、**格物論** 一種大ハ蝙蝠の如く、或ハ黒
或ハ赤、或ハ青、斑あるものを、鳳子と名づ、一名鳳車、又鬼子、
新撰字鏡 加波比良古 莊子齊物論 昔莊周夢ハ胡
蝶とあり、羽然として胡蝶あり、自喻で志ハ過ハ周ハ

周あり、ちハバ周ハ夢ハ胡蝶とあり、蝶の夢
小周ハちハ周ハ胡蝶とあり、分ありむ
三月

重三 野客叢書今五月五日と重五と云ハ九月九日と
重九と云ハ三月三日と云ハ亦重三と云ハ

長春 時珍曰、月季花ハ處々人家小多く栽て、こゝろと
挿む、亦薔薇の類、青と莖青と蔓硬と刺

あり、花ハ薔薇より小く、深紅十葉
厚辦あり、月と逐て開放し、実と結ぶ
丁子草 大和

本草 葉ハ柳の葉に似、中の堅筋
す、白く、花ハ丁子に似て浅葱色、
嫩葉を生ず、蒸焙て苦き水と去り、身を末し、飲べ
茶摘 蘇頌岳經三
茶ハ春中始て

本朝食鑑 九茶と採の候ハ十八夜あり、氣候の違
速ハ随ハ十八夜の前夜と宜し、宇治の茶師馬場氏
信俊が曰、始て茶と摘むを手始と云、九三月朔日、或ハ三日

正月履端 左傳 先王之正時也、履
端于始、肇正於中、歸餘
於終、
兩のもの 小土器ハ各義と云、詳あり、疑
元日と云、
雜煮の膳の左右を、此兩種と盛物と云の略語歟、
の物と云、此身ハ兩種と盛る料と云、
年浪草

春 りぬ

臨時客

年中行事哥合 正月二日、臨時客とも、攝政關白の家、春の始、大臣以下の上達部を招て遊ぶ

このころ、入る、公發ふもあつた、臨時客とて侍る、大が大臣の母屋の大饗、年とく、行侍る、鷹飼を渡して、履新之慶、李吟曰、履端端いふ、其興さうと、とふく、賀する、ハ領する、履新と同、改年の御慶、唐の時三月、鏤人、煎餅と云、鏤人、ハ此方、雛人形の、宋馬志開本、林檎樹、赤く、二月、粉紅花と、子、亦、差、毛衣、鴨、て、元日、降雪、大服、山、林、と、茗、碗、の内、清て、合家、又、賀客

三月

鏤人

唐の時三月、鏤人煎餅と云、鏤人ハ此方、雛人形の

流觴

きの部の曲水の糸出

林檎花

宋馬志開本、林檎樹、赤く、二月、粉紅花と、子、亦、差、毛衣、鴨、て、元日、降雪、大服、山、林、と、茗、碗、の内、清て、合家、又、賀客

ぬ

兼三春物

ぬく

正月

御降

元日、降雪、雨雪、大服、山、林、と、茗、碗、の内、清て、合家、又、賀客

大服

大服とハ、糸、紀事、其式、茶と、塩、梅、山、林、と、茗、碗、の内、清て、合家、又、賀客

献ず、大服と云、李吟曰、元日、大、茶と大福とい、用、江次第、元日、押鮎、一、坏、煮、塩、鮎、一、の、青、葉、の、白、い、防、川、押、鮎、坏、五、王、佐、日、記、と、元、日、用、ひ、る、是、箇、固、の、具、の、鮎、年、魚、と、其、年、長、す、故、新、年、嘉、祝、の、食、と、其、祿、法、人、別、の、絹、二、足、綿、六、屯、と、江、次、第、小、委、一、公、事、根、源、云、女、王、祿、と、字、ハ、書、と、身、た、王、祿、と、傳、と、女、の、字、と、略、す、と、口、傳、と、ハ、す、

公事根源 踏哥と云、正月十四日の男踏哥の、近頃、お、侍、る、ハ、女、踏、哥、と、云、ハ、十六、日、光、源、氏、物、語、と、云、多、く、男、踏、哥、の、こ、と、を、侍、る、や、岷、江、入、楚、天、武、天、皇、の、御、時、と、云、又、曰、融、院、天、元、六、年、正、月、十、四、日、有、男、踏、哥、以、後、中、絶、云、西、官、記、古、語、二、ラ、バ、リ、讀、云、曲、の、終、ハ、万、年、と、云、祝、言、と、必、す、ハ、納、む、故、ア、ラ、バ、リ、と、云、未、詳、是、鳥、余、情、男、踏、哥、十、四、日、を、殿、上、地、下、の、四、位、以、

男踏歌

女王祿

女踏歌

公事根源

近頃

武天皇の御時

後中絶云

春を

流批
マシマシ、○かマシマシハ
河海批
踏哥の人綿の造

花とぬき冠の客きやく あきあきしにがづけこゝろ、踊哥の人おどりうたあきこゝろ

十六日 公事振源 ちの正月十五、六、八月の

と 女 路 哥
頃 ころも まは ま京中の男女の ま高き ま物 ものう うと とぞ

ついで、年始の祝詞をほくらとく、舞^{ふみ}とやらをあらせしむ。

故不踏哥ハナハタ天武天皇三年正月ハナハタ太極殿ハナハタ渡御ハナハタ

あつて、男女さうして、間夜小踏哥のさうして、然

五月のこゝろにやうにも鳥羽王の關の夜もさうなりや。

○此外委しきことハ
江次第
十九日○吉田の

等^{ヒナリ}ふらふらと今^{イマ}と略^{リョク}ス 女^メ食^ク分^{ブン} 疫^{エキ}神^{カミ}諸^{モロ}ノ節^{フシ}分^{ブン}

の夜よりと疫神と祭る故、男ハ夜分といへも参詣す、女子

ハ夜分といふ時分の家事多くて、前にお詣つゝと云

ず、十九日と節分の代り、詣つ心よく、女郎をとら

大鏡
 鳥宿
 注小
 女し者
 善田の清枝の

條と互見十卷一 女不者 不及 驚不村

帝天管年中、清涼殿の梅樹枯萎む、勅あくる日を代り

卷之六

の梅とともひひんきて葵くそ、西の京何げの家に

梅あり、花開けを其色深く其香濃く、其色よく其香よく

應ずるまゝの女、枝小短冊を着て献ず。既而、其

庭に接す、主として見せる一首歌を、勅を以て

まけと 鶯の宿と問ふいづ
鶯の宿と問ふいづ

紀貫之女今此本相国寺中

拔 薺菜一名莪蒿和名於八木雀鳥食經狀芥草也

香あまのを 黒あまの美と ぬくことと 食ふ 夫木 ぐふく 雪ゆき

のちをばつとてやきて形ぶの若菜のむぎやきさ
大芥

えん 信実○よ部よめがをこの糸見合ふし

は部萬歳
集三
龍月
白樂

樂の条子云
兼三者也
肺
詩不

不暗朧々月 新古今 ともぞふ曇りも 今月

ささぬ春の夜のおづろ月夜ふちく物ふちく
大江 方古、重

和名抄 海中石上生ず、乱髪

青
 の如く青く青色、東海多し
 二月

萩葉はぎはのうゑ
大和本草
黄梅きうばいのうゑ
小樹せうじゅのうゑ

せ部て可見 黄松 ちんぷも本草ニ溼草

春
在

下り載て曰、高きとの二三尺、方る莖厚葉、初生の小
椒葉の如く、齒あり、面青く背淡く、言フ
ズイと同日、正月、黄花と開く、故に迎春花と名づ、
花のうしろ梅に似たり、故に国俗、黄梅と云ふ、
大

原野祭

乙卯日○山城国乙訓郡みち、春日と同神に、
公事根源この神ハ皇后の春をせめらんため、

踊念仏

本社遠きより、都近きところより、
奉らる、これハ大原野行啓とて、この侍りや、
毎年彼岸の申日に、摂州四天王寺念仏堂より、此より、
天筆の名号とも、北八菩薩の画像と掲ぎ、念仏修行を、
相傳ふ良志上人、洛北鞍馬の毘沙門天より、感得の御影
あり、今日平野大念寺来りて法事を修行す、法会も
大和河内の道心者来りて各十徳と着、鉦・紐と
付て、手も持、踊るふあり、一心不乱に念仏
あり、誠に感ふた、踊るがごとく、大和河内の者
とて、由緒正しき豪家の禪門あり、此法席に
入事を許さる、此寺の西門ハ極樂の東門あり、
故に昔より浄業と修するの人、此寺よりして西海の

落日と観する、弘法大師もこの西門あり、日想観と修
する法然上人も、此地西南の二字、
今世号ふ、
小浄土の觀とあり、由旧記と侍りや、今と諸人
弥陀の来迎と拜して、今宵彼岸の中、日群集すと
是、没日に向て、淨刹
の方と拜むの遺意や
萩の焼原
焼く跡の萩

原と云、年浪草、引説とて皆さう、
後撰集より、

とて、のちけつる、若菜とて誰とてさむ
兼盛王、この哥の詞あり、
続古今春部、順徳院御製、
野や霜枯の春風、青葉まゝ、
萩のやけつ、

萩の若葉

萩の初生若葉の如く
生、
生、
生、

三月 御身拭

十九日○山城国嵯峨
清凉寺の本尊

若葉とて、
釈迦如来、五尺二分の立像あり、天竺毘首羯大赤梅檀と以
て作る、
今日開帳を、寺僧白巾と以て、
御身拭とて、この起る、
此堂建立の人、七日未
簀の、
本尊告る、
汝が父今生を畜生、
薄、
此堂

の材木とむく牛とある、弥増の善とあり、仏母と得せしむ
 べし、急ぎこの牛と乞得く堂の側へ繫ぎ、父の思ひ
 とおし、養ひ、三月十九日、牛を果し得せしむ
 牛の衣を以て如来と称す、赤梅種の煮り、牛の着
 せ、其後年毎、今日如来の妙香、
 どうく、衆生煩悩の不淨と清むとあり
 勢州芋生の浦、梨花の名所、
 梨

梨

正月 若水

包井、井華水、公事根源あり
 若水桶、
 春の春立日は
 と奉ると若水とす、や、さ、さ、年中の邪氣と除くと云、本支
 る故、世諺問答、
 此日ハ井華水とて、あ、に
 水と飲事、
 御筆、若水立春、元日、あ
 らずと、意、今歳且、用ると、
 〇包井ハ御
 生氣の方の井、蓋と、
 若菜、
 初若菜、公事根源
 立春、開くと包井開と、
 内膳司より、正月上子日、是と奉る、寛平年中より、始
 る、延喜土年正月七日、後院より七種の若菜を

供ず。七種
 の条見合す。

若夷

夷廻

紀事、京師、街頭、
 馬毘沙門天の紙符、

若夷、夷廻、
 善惠美須、ホの福神の簡と賣る、四民、
 ハ、歲徳棚、供、元日は、拜、福と祈、祿と、
 都の市中、毎年、吉野より来、守り福神の札と賣、二日
 の曉、又毘沙門天と迎、
 三日の曉、又惠比須と迎、
 子若夷美須の札と賣、
 〇夷廻ハ、
 偶偶師と、津
 の国、西宮、跡、垂、
 三郎殿、歳の始、
 富貴と守、
 昔、
 の始、
 都と始、
 偶偶、
 勸、
 偶偶師と、
 夷、
 又、
 大黒舞
 の類、
 夷三郎殿の、
 鯛と釣、
 悲田寺、
 四、
 垣外、
 若餅、
 三日の、
 餅、
 一、
 餅、
 大小、
 是、
 小の、
 祝、
 唯、

若草

新草、○三種とも春初草、艸の初生と云

藁盒子

幸木の若

本草松三月糺と抽んで花と生す長四寸、是緑と云ふ、糺正月二

青黄の間色とりとる、其色の

兼三春物 若布

赤布小對、山葵

天和本草山葵加茂葵に似る、其根の形味生薑に似る、故に

山葵山姜の名あり、中夏の書にさす、漢名にバ和漢

三才圖會山中水近と石間ふ多く、人家ふと、是と

移し種る、二月種と下し、三四月苗と生す、葉略及

び葵の葉に似る、六七月穂と多し、二、三寸、細う、黄

白花と云ふ、二月 蔵 早蔵、糺蔵、本朝食鑑春

細う、子と結、初蔵、蔵手、の初先生す

と早蔵と早す、○時珍曰、三月芽と生す、拳曲とし

て、状ち小兒の拳の如し、○朗詠紫壁、爛蔵人拳手、○

仙人の基と指さす、蔵外乙由、○序、三、この朗詠の句

塵と爛との二字、ハ莖と嫩との誤り、下字集、辨、

若紫

本草藤恭曰、紫草ハ蘭香に似て、莖赤く、節青く、二月花とひらく、紫

白電、寒とむす、白色、秋熟す、○雜詠抄、連排ハ若紫と

春用ひ、花紫と秋用ふ、本草ホの説の、二、三月花と

ひらく、と云ふ、和あるもの、秋月花とむく、一種あるや

考ふ、ハ若紫ハ春月 三月 若蔣 本朝食鑑、菰

の嫩苗とりとる、池沢の中に生す、二三月白井と生ず、筍の如く、

是菰筍、莖白菰菜也、と云ふ、若菰とりとる、

忘霜

子、の余、云、八十八日の夜あり、必霜あり、諸木の

花房嫩芽、こもり、あ、一時、多く、枯る、故、此前後、葭、簾、を

以、是、を、蓋、ひ、霜、氣、と、り、こ、ま、し、を、侵、さ、し、め、ず、宇治の茶

園、殊、ふ、る、を、畏、る、八十八夜、を、く、時、ハ、霜、を、防、ぐ、の、葭、簾、を

撒、す、八十八夜の、後、さ、る、霜、

春 わか

か 正月 門の神棚

李吟曰、在家の妻戸小棚と構へて神と祭る、夜はうらけの
 灯と供へ侍るこそ。○其其義と詳るを、按ふ月令廣義
 云、除夜門神と祭る注ふ道家門神と謂て左と門丞と
 右と戸尉と云、蓋し門と司との神、其義桃符よ
 り本で、神荼鬱壘と以て、邪と辟る故の
 門松と千門ふ樹るは、本朝此意の據
 世説問答門の松立ると、昔よりあり
 飾松、飾竹
 竹は万代と契るものなり、
 年の始ふは、
 飾繩、飾藁
 注連飾
 同上、ちの繩とも、左繩よりて、繩のよりと云く、
 のし、左ハ清浄なるをいふ、と云く、
 ちり、浄不浄と云う故、神事の時ハ
 必引、正月の神と祝ひ祭るものなり、
 白炭除夜立之戸内亦
 辟邪惡、この義なり、
 飾海老
 紅蝦、俗ハ伊勢海
 老と云、或ハ鎌倉え
 びとも、
 賀祝のものと
 門の禮帳
 明世説新語排
 京師節日主人

明世說新語排
多シセツジツ
京師節日主人

同上 ちの縄とまゝを、左縄よりして、縄のまゝとまゝくぬき
のし、左へ清浄なるをいれ、いゝとまゝくぬき、するやうに
ちり、浄不浄とまゝ故に、神事の時へ
必引し、正月の神を祝い祭るまゝちり、
飾炭

細目	本草
----	----

本草
細目

辟邪惡サクニジャクク示シこの義カミありけり
白炭シラタ除夜ジョヤ立之タチ戸内ドノ亦モ
飾海老カザリエビ
紅蝦ベニエビ俗ソコ伊勢海イセウミ
老イロ或ハ鎌倉カマクラえ

紅蝦ベニエビ俗ノ伊勢海イセウミ
老イ或ハ鎌倉鎌倉

ひとと称して賀祝のしるし
 國俗春盤よこせと用ふ
 門の禮帳
 明世說新語排
 京師節日主人

明世說新語排
多シセツジツ
京師節日主人

皆出賀帷置白紙并筆硯于几賀客至記其名
これ本邦にて年始五節供ふ出す賀客帳と同
子 本草 鮒の子へ臘月歳始及び婚家以て
規祝の有より多子の義を取らる
擣栗 数の

搗栗

和漢三才圖會 搗の訓と勝の字小
 めと、諸勝負の利あるを悦んで用之
 めんと祝ふ
 部

祝ふ
部

雑煮の
 懸鯛
 紀事 元日小鯛魚一匹藁索を以て
 両喉と結び菰朶并由都里葉と挿

紀事 元日小鯛魚一匹藁索を以て
咽喉と結び齒朶并由都里葉と挿

く竈くわの上うへに懸かて、是こゝを掛鯛かだうと称なづす、六月朔日しつごくにちに至いたて、和あ美みしく食た之を、わくのこゝにすゑの時ときハ温疫えんえき痢病りやうびやう諸しよの

時ハ温疫痢病諸の

邪氣と 辟ろし
粥木、 粥杖
十五日 粥の木を、女の屍をう
て、バ、男子をうろ呪こと

粥の木と女の屍と
て、男子とを呪ふ

打とて、女ハなれどと防ぐ、枕草紙、袂衣物語、
あゝとて、あゝとてと本文、あゝとてとて
紀事 追加云信

紀事追加云信

濃、飛驒、三河の三國にて漆うるし膠かろうの木と一尺二寸ふたひしふたふた切り
上下うへした削くろぐ、さねの方に丸いんぎやう巻まきのくち或ハ柳やなぎ櫻花はなの

のくちや或ハ柳櫻花の

紙あき切^きり粘^ねり松煙^{しょうえん}あきこきと燵^かへ其
かちととり除^のけ白^{しろ}く其摸^も様^{よう}残^{のこ}る是^{こゝ}と名^なづけ御

残る是と名づくる御

祝棒と云新婦ある家毎々入る
新婦の腰より、兒童の戯ある
粥柱と云、七日の粥をい入るれど十
五日の粥を柱古より金来れりや
男踏哥の
糸止す、**鏡関**
開とある糸云
部具足の鏡
獺魚と祭る
部

粥柱と云、七日の粥をい入るれど十
五日の粥を柱古より金来れりや
男踏哥の
糸止す、**鏡関**
開とある糸云
部具足の鏡
獺魚と祭る
部

祭魚**埤雅**獺取鯉於水齋四方陳之
進而弗食也世謂之祭魚蓋祭其先
香散見
兼

草
梅の異名云〇山びとのちりふふけるむらさき
色と香とをたると見やさん、順徳院御製
和名抄唐韵云霞赤氣雲也 和名加須美
吾邦あり、かつみとまとのハ漢ニハ云霞
の字ハ **霞段の網**
御傘水辺あり、霞の網ハ似たりと云へ
あられ、
月とびくやふるとの
霞の海 簪物なり、
水辺ありす
霞の衣
御傘衣類あり、是も形容云古今春のさる霞の衣

三春物 **霞**
の字ハ **霞段の網**
あられ、
月とびくやふるとの
霞の海 簪物なり、
水辺ありす
霞の衣
御傘衣類あり、是も形容云古今春のさる霞の衣

子到天上仙人以流霞下孟飲
之書言故事 天仙酒名流霞
霞の袖 霞の袖
霞の衣
御傘衣類あり、是も形容云古今春のさる霞の衣

霞の波、霞の沖
霞の海の縁
鐘霞 春の
霞の洞
真活詩万里洞中朝
玉帝九光霞内宿仙
又院の御所とすなり
霞の命
て命とのがとの
多と云ふるハ重と号す、〇九つす、仙境と云ふ
〇一ト霞、横霞、さきも霞のふくむる風情と云
〇春の、契冲曰春のふくむる霞と云、奥風の奇、山を
の花の香と云ふるハ春の霞と云ふるなり

行平朝臣
霞汲
流る霞、と云、酒
と云、抱朴

あられ、
月とびくやふるとの
霞の海 簪物なり、
水辺ありす
霞の衣
御傘衣類あり、是も形容云古今春のさる霞の衣

子到天上仙人以流霞下孟飲
之書言故事 天仙酒名流霞
霞の袖 霞の袖
霞の衣
御傘衣類あり、是も形容云古今春のさる霞の衣

霞の波、霞の沖
霞の海の縁
鐘霞 春の
霞の洞
真活詩万里洞中朝
玉帝九光霞内宿仙
又院の御所とすなり
霞の命
て命とのがとの
多と云ふるハ重と号す、〇九つす、仙境と云ふ
〇一ト霞、横霞、さきも霞のふくむる風情と云
〇春の、契冲曰春のふくむる霞と云、奥風の奇、山を
の花の香と云ふるハ春の霞と云ふるなり

あられ、
月とびくやふるとの
霞の海 簪物なり、
水辺ありす
霞の衣
御傘衣類あり、是も形容云古今春のさる霞の衣

子到天上仙人以流霞下孟飲
之書言故事 天仙酒名流霞
霞の袖 霞の袖
霞の衣
御傘衣類あり、是も形容云古今春のさる霞の衣

霞の波、霞の沖
霞の海の縁
鐘霞 春の
霞の洞
真活詩万里洞中朝
玉帝九光霞内宿仙
又院の御所とすなり
霞の命
て命とのがとの
多と云ふるハ重と号す、〇九つす、仙境と云ふ
〇一ト霞、横霞、さきも霞のふくむる風情と云
〇春の、契冲曰春のふくむる霞と云、奥風の奇、山を
の花の香と云ふるハ春の霞と云ふるなり

あられ、
月とびくやふるとの
霞の海 簪物なり、
水辺ありす
霞の衣
御傘衣類あり、是も形容云古今春のさる霞の衣

子到天上仙人以流霞下孟飲
之書言故事 天仙酒名流霞
霞の袖 霞の袖
霞の衣
御傘衣類あり、是も形容云古今春のさる霞の衣

霞の波、霞の沖
霞の海の縁
鐘霞 春の
霞の洞
真活詩万里洞中朝
玉帝九光霞内宿仙
又院の御所とすなり
霞の命
て命とのがとの
多と云ふるハ重と号す、〇九つす、仙境と云ふ
〇一ト霞、横霞、さきも霞のふくむる風情と云
〇春の、契冲曰春のふくむる霞と云、奥風の奇、山を
の花の香と云ふるハ春の霞と云ふるなり

あられ、
月とびくやふるとの
霞の海 簪物なり、
水辺ありす
霞の衣
御傘衣類あり、是も形容云古今春のさる霞の衣

子到天上仙人以流霞下孟飲
之書言故事 天仙酒名流霞
霞の袖 霞の袖
霞の衣
御傘衣類あり、是も形容云古今春のさる霞の衣

陽炎

【箋】繩輪

陽炎或ハ陽火ホ遊同物二名ハ春気地より升り

又降るといふ

川柳

水揚其葉内よりて尖り枝短く硬く水辺に生ず又蒲柳と

ハ川その柳ハ尺

門柳

陶淵明宅の辺に手づし五株の柳と栽ふ五柳先生と

風見草

柳の異名ハ蔵王あづさ春の梢に風見草のしげきつらぬぐくじ

二月春日祭

上申日○大和国添上郡春日の御ふち大申納言の内藏あづさのえりて上

卿とす前後京と出て南都あづさむく夜は入て奉幣の義と勤る左右の馬の元神馬一疋とむ翌午尅歸京一此事と奏す上郷往還の間雨ふと吉人祭の前日春日の社家祭日の支干と南曹の弁告朔日と関白氏長者井諸家門外小僧元輕重服の輩不可入の礼と立

北五日江戸本所の末亀戸村より二月九日花踊の神事を祭礼ハ八月廿五日と本所牛御前と隔年とあ

亀戸天神花踊

貝寄

【箋】難語抄天王寺法花記も粗其音あそむくと未詳二月九日前後難波の浦に吹風

と云ふ仏縁感動とて竜城の魚鱗鱗今の種類あそむの浦に浮き出て此會に値遇一奉る謂と傳へ侍む

此沖津風濱へ吹くる貝と拾ひとりて聖霊会供養の造花をむ着て

髪蔓草

本名未詳九月二月生上宮太子の前へ献す

恰と麥の苗葉のごとく叢生すハ女兒春月是と採り髪に結び髪と組のよう結びとす故ハ髪蔓草

白鳥

かほよ鳥

果鳥ハ雲柳抄白鳥ハ春日山ふふふと恋するものと云ふ夜登と云ふ

恋するといふまゝあそむ春の歌と云ふ源氏物語若菜卷にもあそむ是其鳥と定る但定家不知之と

りてと推ふ只ふと云ふ鳥々未決之哥林良村が花ふつと花ハ白鳥同ト

仙覚抄此鳥のくく鳴声と名と云ふ湖月抄白鳥ハ深山より鳥ハ常陸国小杜若と云ふ花と云此花咲時鳴と云ふ○藤文曰ふ白鳥

かやう鳥とて鳥一物なく、何の鳥とも定めづ

○此外諸書よきもの読あふふなりあふべ

歸鴈かき
 今ハの鴈
 月令 孟春月 鴻雁來 淮南子 燕春
 分ニシテ而來キヨリ 雁ハ 春ニシテ 分ニシテ 而去サリ 今ハの鴈

分ミテ而來キリ、雁ハ春ニ分テ而去リ。○今ハの鴈、

今ハハ今ハカケんもど云心今ハカケんと思ひつゝを
亀うめ

さあどふあめり
猿蓑 立ちどく今や死の厂名の厂 澤雄

夫木集
川越のむら田中の文聞ふ
蛙
無声の蛙

何ぞと云ふは、龜のなしく、蛇を爲家

長明無名抄 井手の蛙とトモ、こゝろあるゆゑ侍世の

人おとしむるハ只むるハ皆くもづよりとぞ思ひ侍るあり

それもたがひまづべきとてわづらひて外へて

むづぶ、只この井手の川よも侍るゝ色くらきやうゆき

と大まかにあてず、その後のむづかしいところ、あつぱり

三つあつて二つをいへるをいふ水のみす

夜ふくく行ふ自々嘆ふくく心すておろけ

声こゑ_{えく}なる○無聲の蛙点江戸川石川無量山壽終尋
づえおそ_{ふさう}y_{いんぐ}

通院の開山了誓上人聖照未尚蓋世のまゝに傳へて

の典と圭

三月寒食

荆楚歲時記サキナ去冬サキナ至一百五日有疾風

甚雨謂之寒食周禮
烜氏仲春禁

火于國中注季春將出火琴操
今子綏五月五日

と以て死す文公を哀れ民をして大に挙ぐりむ今

の久冬至于一百五日を寒食とす其説已ふより異

五穀類 穀中記ふ奔州今子推が爲ふ火となつて三日

漢書周舉傳こ太原こ今子こ推お骸こと燒ことこ以こ每冬中こ月寒こ

食す 飢世帝の時太原上黨冬至後百有五日皆火を絶す
化とす 此と傳ふ事の時冬至後百有五日皆火を絶す

[illegible]

耳聞、みみをきこふ 論、をのたまふ 是、こゝに 可、べからず 行、なす 刑、を 法、を 國、を 用、を 大、を 禁、を

食を其の車を言ふ是を何の刑に會は國を朝せ禁め

杏ミヤズナの強ツヨク
杏ミヤズナ二ニを研ミぎて酪ラクと湯アブとて是

事文類聚寒食餅ハナヒ樣ヨウを

○ 粥
了、東とまゝつめて煮て、名けて東之鱈

と云、疑々ハ、粥
揚花
青精飯
潜確類書云、洛

六、東、饅まうまうの誤あまを飲のみ

粥かゆ、

青飢飯せいせいふ、陽やうの人象寒食

子萬花典グンギョと粧マシメひ楊花ヤウカ粥イロと煮ニる玉燭セキキョウ宝典ホウテン居イ入ニ寒食カンシキの過アハレ

○ 桃花粥 いちばながゆ
と粧ひ 桃花粥を煮る
○ 榆柳 うすろう
の火
礼 周

四時國の火と變る、春ハ榆柳の火と取、夏ハ東杏の火と取、
季夏ハ桑拓の火と取、秋ハ柞櫟の火と取、冬ハ槐檀の火と

取^る、輦^{ひん}下^げ歲^{さい}時^じ記^き 唐^{たう}掄^{りん}柳^{りう}の火^ひと取^て
以^て侍^し臣^{しん}ひた^もふ、陽^{やう}気^きふ煩^{わづ}あ^らふ、
か^いぞ 草^{くさ} 櫻^{おう}の
異^い名^なと

まゝの太官人はいちもあまの櫻をうて
 かくしゝつゝと古哥よも名づけり
 樺櫻 くわいさう
 本州 天和

加^カル^ル波^ハ今^{イマ}云^ク加^カ波^ハ佐^サ久^ク羅^ラ○
 擇^{タク}櫻^{ヱウ}ハ山^{サン}櫻^{ヱウ}毎^{マイ}六^{ロク}

多^タ識^シ篇^{ヘン}

の属とく古今ここんよりあつてとて是こゝなり、
 唐揚貴妃傳 明皇めいこう嘗かつて太真妃ふしんと召めす、妃酒と被ひて新あらた

起^{おこ}、帝^{みかど}曰^い此^{こゝ}乃^{すなは}ち海棠^{たいかう}の睡^ね未^{まだ}足^{たり}
耳^{みみ}、^の花^{はな}の名^なを^をこゝに^に出^でる
柳^{りゅう}莖^{このゝ}
雜^ざ談^{たん}抄^{しょう} 俗^{ぞく}
柳^{りゅう}の花^{はな}と^とう^うん

で柳の莖くきと称なづす、ニ按よふ柳の花三月未開、依よて宗瑞そうずいの柳の袂たもととくニ、柳の莖くき、京畿きやうきの俚語りごとく、柳の花と云

本艸の説も四月開花といひ元より四月の季なりといふと、未

吟うた増山井ふくやま子こ三月さんがつ小生せうせいす、是こゝ秧えいの説せつと云いうや、京畿きやうき
見童けんどう柳りゅうの花はなの蒂ち拔落はくおと拾ひろひあへり、藁わら摺すり貫ぬき

玩弄す、是と柳の莖と繋ぐと、いふ花が治定せ
かんぶろ秋の渡る時、いふ木とくく来る、是と海上に浮べ、其

又春その木とく久^久歸る^久残^久る^久木多くあるハ人捕^人られ又ハ死^人

一、その外に故に其水と拾ひ供養の爲に風呂と焚て諸人浴せしむるを蠶飼、蠶棚、先代旧事紀、蚕と養ふの法、養屋の

と曳て常とこに蚕神とこと祭まつる。預もくて桑の大葉と取とり、陰干布かげかりふす。

と、こゝと箆箱の中なに納め、これと祭棚の上うへに安やすス。繭まゆの
蝶ちょうを出す時ときに至いたりて、其その干葉かんえつを取り、莖くきの上うへに置おき、蚕さんは

と産うゑし、と産うゑ已まて、種子いしごと以もつて、篋けつ箱こ納いり、老蝶らうてつと以もつて、

ゆと作^{つく}んとする時、葭^や簾^{せん}を用^{もち}て棚^{たな}とす。云々。凡^{およ}蚕^さ已^や生^はず、
稍^{やや}長^{なが}ず、ものをこれと籠^{かご}あつて箱^{はこ}へ入^いきて、並^{なら}べ置^おく処^{ところ}こそ

春
と蚕棚こいも
カ
尔雅
嫁桑蔭也、
繅由樗蔭也、
蔸蔸棘、
栗

之輩皆各因所食之業イヌスガ、桑蚕ハ食桑の蟲故
子各々○飼屋ハまがら蚕とふ家、蚕家ともいふ、
蛙うゑのめかつ時じ 夫木はしめすととせとせで夜とある
俗小蛙のめかつ時とい、蛙の鳴ころ眠と催とととと○此め、
る蛙と目と借るとと心こ夜短く眠と催すと蛙の人の目と借は
うつ俗諺ことわざ西華集西華集如花と月夜と見ころ山鴉里ハ焙
炉の白ふ門といころ脇勺の評ひき支考曰其頃蛙のめかつ時
あふん日永く夜短ふといふとてい、葛松原閑子鳥
あふや蛙のめかつ時珍碩○年浪草俳諧歳時記あふ
只めかつ時といふとせのハとてい、ハ蛙のめかつ時といふ、
又此題増山井とていふとてい、ハ元禄年間
句といふ題といふとてい、今この季と定りんハ支考
の評の詞も珍碩が句も初夏の物といふとてい、ハ四
月の部に入つて

よ正月の年

吉田清祓十九日紀事正月十九日大祓毎年夜入
吉田ト部家新年の行事を、尙場

所の前ハ所壇とていハ方と拜せ、其後尙場所ハ角
社内に入て宗源神道の行法と傳せ、ハと大祓とて
○一説ハ今日の夜ハ疫神祭ハ幡の疫神祭ハ日ト節分
の夜といふ正月十九日迄ハ此間疫神と封す十九日
て其塚餘寒余寒ハ寒春寒説文餘寒也
と擬す、時珍曰二月莖と生す、葉食ふハ野圃家園ニ分ハ
と用ひ、ハと叢生す、香氣あふ、秋花とむハ野菊
ハ似ころ○ミガハギ、ヨメナ同物あ
るハオギハ似れハ別なり

兼三春物横霞

か部霞の
糸ふ出す
二月吉野の餽配朝日吉水院考物二月
会式とハ正頭と

て當五月、ハ来五月ハ長日不退の行人寺僧ハ花供
と号ハ満堂方と職法と云件の両行者二月朝日本堂へ
出座ハ御供神酒と献ハ奉幣等あふ、本堂の廣庭
わく夥ハ餅とてい、ハ世俗是と吉野の餽といふ
とハ餅配とてい、其外満山の堂社のていハ御供餽
ハ献備あふ、右ハ付て正月下旬三日の間、華供職法の両

頭坊より施行の儀あり、近國の貧人乞ふ夥しく來集る、

雜談抄 摂州平野大念仏寺の本尊一仏十菩薩の画像

ニ供する元朝の餅と、歳首、吉野山藏王の神人奉りて此餅

とて詣りて、叔蔵王權現へ備へ供養式終り、此餅と破砕

多くの来ふより、炊く又餅とあり、今明日本堂より

諸人へ施す是と餅配と云、又吉野山中の僧俗へ不殘

賦るく云、〇と目軸山と号し、寺と金峯山寺

より役行者の開基、本尊へ蔵王權現三昧に

本冊春月嫩艾と来て來るより、食ふ或、麴ふ和りて觀

鈍し、す、一切鬼患氣と治す、大和本草より、と灸治

小用る故と云と云と畧し、と云と云、二月三日、抹上

と云、次小五

月五日と云

三 月 楊花粥 かの部寒食 蓬餌

本朝食鑑 艾餅ハ嫩艾苗と來り、豆と煮、熟し

る、蒸、糯ハ合セ搗り餅と作り、三月

三日必、この餅を用ひ、賀祝とす、吉野の會式

十日、吉水院の寺説く、大和國吉野山子守勝手、の兩

明神の神典、本堂へ渡御、旧記ハ、三尊而社の室前あり、

一切経金修行とあり、中古以來仁王會修行す、法事と

あり、而神典還幸、又云三月花の頃と云、て花会式と古

來より傳ふる、山中行事、日数

おもひ、花会式と云、追々、花見の、

櫻の異名、吉野と才一、

す、ゆゑの名なり、

楊貴妃櫻 奥福寺の僧 玄宗と云ふ

愛せ、故名とす、一説ハ、此花大輪あり、紅色と含み海棠の

似、故ハ海棠の睡と云、故事より名とす、と云、

呼子鳥 此鳥のこと、古今集三鳥の一とあり、諸

説く、或ハ猿のうと云、或ハ山鳥と

云、又ハ山鶴、又ハ鶯、郭公、と云、の鳥、あり、

と、云、年浪草或書云、呼子鳥ハ唐ハ

喚起鳥と云、春の中つゝ鳴鳥より、爰ハ、く鳥のこと

也、くくと鳥の子と呼べ、來る故と云、又云、ハ鳩と

云、又果鳥と云、四月の部郭公の來るさ、啼鳥、

此鳥ハハコと鳴ゆ、呼子鳥と云、〇真淵翁曰、

こ鳥ハ春の暮より夏にかけて啼鳥、此声ハ人と呼ぶ、

く腹ハもろ鷹のく、足ハ鳩より少く高し、又曰、
おほ鳥と云ふこの鳥、今俗のく、鳥と云ふ、
鳥の字音より、
とく誤りなり、
正月 宝船敷
日小至るの夢

を初夢と称す、今俗、
二日の夜ふ宝船と云く、
大黒舞
悲田寺垣外の
類、大黒天乃

姿を撰み、面より頭巾を着く、民間の門を叩ひ
舞ふ、年々嘉祝の詞と云く新作して唄ふ故、此唱哥
と云く大黒舞と云く、江戸より大黒舞と云く、新吉原町小限
と云く、非人のく、狂言物真似と云く、

橘
和漢三才圖會 太知波奈の和名ハ橘類の惣名也、今ハ
ふたもちと云く、
と云く、

草ニ橘と密柑と云く、時珍曰橘、品十有四、月令廣

義 正月初二日、賜橘於群臣、則古今以橘為嘉祝之
果、和名抄 橙似柚而小者也、和名安倍太知波

橙

奈 和漢三才圖會 五月小白花と聞く、凡八年を
登る、実を結ぶ、霜後黄熟す、其辨苦くて微酸
く食ふ、春小至る色濃く、夏く耐る、夏く

後色と変りて青く新舊辨ず、故俗に呼く
代くと名づ、不嗽と云く、以て嘉祝の果と云く、

俵子
名義未詳、按て奥州金花山小迫と海辺
のく、祝語と云く、春耕糸切齒 俵子ハゴマ、小殿原

ハ武家の祝語、田作ハ農家の祝語、俵子ハ商家の祝語、

南海より海鼠と
俗ハ俵子と云く、
田作
小殿原
和漢三才圖會 五万

一名田作、又古
止乃波良と云く、
店卸
商家にて、去年中金銀の出入算
用、又ハ賣買の利不利の高下と

改め、
店卸と云く、
大元師法
延喜玄菜式 凡大元師法、毎年

日於省修之、公事根源 治部省より七ケ日是と行を
蔵人内蔵寮の官人より御衣と給ふ壇所より、

御衣箱ハ緋のつ、是より御所より蔵人
封と付く、是と治部省より御祈といふ、結

願の日ハ御衣と云く、如く返上と云く、
○師の字と云く、左の法と云く、

種物
神代
卷曰

以粟稗麥豆為陸田種子以播

兼三春物玉

為水田種子因定天色君云

抑 玉拍

二月

薪の能

或ハ芝の能

七日より南都興福寺南大門薪の能より元是興福

寺夜中の法会の間寺僧の奴僕春寒ふたへて門前

おひて火を焼其光より俳優より長夜の

戯しきものも其後金春觀世保生金剛四座の業兩

座東武より南都休暇の兩座より勤む今七日二座

交り勤む八日も亦わの如し九日に至る初日の一座衆

徒告より若宮の前より於て藝を施す其日次座門能と

勤む七日之間雨より八十四日臨時より勤む

鷹化為鳩

月令 仲春之

蒲公英

食鑑

俗ハ藤菜と称し或ハ鼓草と称す俱ハ名義未詳○

難於抄 冬ホノ名鼓草と云る名より出づるか

田螺

和漢三才圖會 和名太

種井種浸種

ふせる

紀事 二月土用の中吉日より農氏旧

と作る彼岸の前十日穀と水より彼岸の後十日

み取出し種とわすれ苗代と六七日とて苗

生ず○種井ハ種

大根の花

時珍曰春の末ハ高

と漬る井とりや 芥雅翼野人今歳山と楚

碧色あり 田畑野山焼

とこハ来歳蔵菜敏生

三月 高雄の法華會

安良比花

三月十日紫野

み人おわし集りて高雄の法花会ヤスラニハテヨと云ふこと

とやすしひをふともやすしと 百練抄久壽二年四月迄

日京中児女風流と備へ鼓笛とて紫野の社ハ恭々世ハ

夜須礼と号す勅ありて禁止す 紀事 今日やまハ花

の神事辰討ちより上賀茂南上野村の土民鳥帽子素袍

と着し或ハ異形の装ひとあり各一村の惣堂に集る人

村里のやハ一章堂を造り常ハ僧より守ら

春 た

拾堂と号す。是より先光念寺の北上の御前の社に詣て、各
 異日同音の安楽比花と唱ふ太鼓横笛の節と助くもの
 後大源菴の社下の御前の社に往て、たのく踊とわいふは
 上野村の拾堂に帰る。是より才一の里正の前よりわいて踊平
 て各家よりくくし又上賀茂梅辻、邑本河、三ヶ村の土俗、今
 官に詣てたのく踊と催すこと、上野村の如く、ちて後各
 賀茂に帰る。時、社務及社司の家毎に踊とあす、到る処共
 家の主人肩衣を脱ぎてさふふい、是と期して踊と止む。
 遷頭の微意、故傳へ、春時疫病多く行ふ、今宮
 八疫神に故に踊とわい、く神良と勸め祭ること、或説ふ花
 ぎぎの祭りとく花落と惜み、風雨あきと祈る、故に安
 らい花とまこと、又一説ふ、今日高尾神護寺の注花会動、れ
 八魔障ある故に踊と催し、魔を防ぐ故にや、い花とま
 安んじ花と八法花平安と終ると祈る、此説す、いおも
 むきを、**難談抄**この祭八寂蓮、奥行せ、必く今土人の難
 鳴ふこと、寂蓮の作こと、夫木、高尾山あり、あり、
 つと、い、い花と、**竹秋**、**唐韻藻**竹秋三月也
 蘭秋七月也、**贊寧竹**

譜八月為春、**礼**正月**靈辰**、**唐李嶠**人日
 三月為秋、**詩**七日最靈

辰注、以人為万物、**二月**列見、**公事根源**上卿并
 之靈故謂人日、外記史あり

太政官、六位以下の藝能あること、武部
 兵部の三省、率、上卿、**連翹**

量容儀と見ること、挿頭の花と上卿以下冠、
 大臣ハ藤の花納言ハ櫻の花恭議六位より花、非参

議以下ハ時の花と、**江次第**云、列見、**連翹**
 二月十日、諸司、長上成撰人列見太政官、三省申之

和名抄、和名以多知久、**正月**奏瑞、**ち、都朝賀**
 佐、一名以多知波世、**の条は出ス**

難煮祝、**難談抄**難煮餅ハ大根芋、**蘇民將來**
 喰ふ多種と交へ煮る故、**布打あまひ、松をわけて**

厄神詣の**送窮**、**九日**四時**宝鑑**云、高陽氏の子、衣
 糸子出ス、**の敵まゝと好まぬを喰ふ**正月晦日

春、**れそ**

死す世小塵と作て破衣と巷口拾く貧鬼のまゝ
 又池陽の風俗正月九日といふ窮乏の屋室の塵
 穢と掃除し是と水中に投じると送窮と云五雜俎謝
 肇淪曰俗説八信するは足す竊也窮也皆晦盡の義也
 諸月といふは正月といふものハ其端めと挙る
 ○按る送窮ハこの
 方と晦日掃ちる

兼三春物 素麩海苔

雍州府志云舊

宮内省あり後

二月 園韓西神祭

色青黒し海
 素麩是なり
 禁庭に移す古く春二月冬十一月上丑日と云と祭る
 歳一人祭所ふ就て事と行ふ式西宮北山西抄に詳あり
 相傳ふ延暦年中遷都の時處と他處へ易へんとす神
 託し曰唯この地ありと云ふ皇基と護るべしと云ハ
 其社なり惜いぬ紀事追如云洛陽醒井通り高辻
 上九町小社あり延喜式に所謂園神
 一座韓神一座とも是と云今本荒神と云
 井部若紀事江州大津の人三井寺門
 水の糸出

正月 包

前の人と各野原ありて左右

ふ多列し互ふ大經と争ひ引両方とも太鼓と云
 たるふさとい進む勝方其年福と云と云是と綱引と
 称す土日より十四日の朝に至る
 去ると云この戯まけ所なり

継尾鷹

あ部鳴
鳥狩の

土筆

和漢三才圖會 春月土より
出、状筆の頭のおく

兼三春物

摘草

雜菜摘

通俗志 雜菜磯菜
雜に摘ハ春といふ

角組芦

芦角

○支考曰あのをさむつてハ牛の角の如く組めり

芦錐

○野相公詩碧玉寒芦錐脱囊 新古今

三島江や霜もやむめ芦の葉の

椿

山茶海石摘ハ

角むむとの春をぞふく 通光

和漢三才圖會 其葩厚く大なる艶義と云と牡丹芍薬ニ

亞く惟恨るハ其華むと云甚醜く其落るも亦脆と

の單の瓣赤と云ものと山椿と名て此乃ち本源あり

白紅彩紋と紅或ハ白相半すハ重十瓣の種枝奉せ

ず秋と蒼と生て春花と開く冬開く

ものと早椿と名づく人以此と賞す

列椿

万葉 巨勢山乃列々椿都良々々余見乍思奈許

端乃春野乎ハ哥より作例と云ふ事ハ、フツツと云

木の数本列あり。○唐椿葉狭く長く色淡く

生くる椿と云ふ。○椿、澤々バ葉の紋横細

みく、整状に似たり、其花重瓣大なり。○玉

正紅なる、ツツと云ふ蜀茶と云ふ事

ハ千代の。○莊子大椿と云ふもの、ハ千歳と云ふ春とし

玉椿、ハ千歳と以て秋とす。○後拾遺君が代

むらうしあ、玉椿と云ふ色ハあ、と云ふ事。○二階

こを莊子より大椿と云ふ山茶と云ふ事。○椿

○伊勢、花形のかまう。○落椿、散椿、葉茂

くも昔や。○鼓草、蒲公英。○二月、接木、接穂

ちう椿羽紅。○の一名。○月令廣義、梨と接ふ、春分の前十日と用

、柳と接ふ、春分の後十日と用ふ。○鳥の若葉

天和本草、地錦葉ハ衣の紋に付るつと云ふ似く、冬月葉落

ず、秋ハ紅く、又常のつと云ふハ冬葉落つ、秋ハ紅葉す。○

この雨種、若葉速速あり、冬葉。○燕、同巢、乙鳥、鶯

ハ井ぞら遅く、夏葛々早。○燕、同巢、乙鳥、鶯

於波、天女、和名豆波久良女、俗云豆波久良、又云豆波女、和漢

三才論、金燕ハ玄衣白頸赤黄の顔、春来り秋去る、雁是

と表裡、其飛翔ること甚捷く、直に翻り仰る亦能

飛他鳥のあ、と云ふ事。○故小鷹鶴あつて敵せず。○

時珍曰、泥とつと。○三月、茅花、本艸、白茅、葉矛

屋宇の下、果ふ。○の、故ふことを

茅と云ふ。○油桃、花常の桃より小なり。○莢、折

花を開く。○和名秋李桃、和名都波。○壺董、莢、折

ま、ハ花の墨つもの形、さうゆを云ふ。○壺墨入の意、や

躑躅、千金翼方、單この花と云ふハ、躑躅と云ふ、斃死す

故、あまう、一説ハ羊の性至孝、此花の赤、食

と云ふ、母の乳と思ひ、躑躅、膝を折、飲之、故、あ

躑躅、花御記、面蕪芳裏青打、三月着之。○台記

躑躅、面紫裡紅、岩ツト面紅。○山、時珍曰、高、もの一

裡紫、白ツト面紅裏むる事。○四五尺低、もの一

石榴 又映山紅
白
万葉
細比礼乃路坂山乃白萱

○羊躑躅、韓保昇曰、小樹高二尺、葉ハ桃の葉ニ似て、花黄し。

華遠望如蓮花の如く故名之

浅葱 あさじ
大和本草
 葉ハ大霧島の如ク、枝蔓のごとし

大山の岩上ニあり、
紫の
同上 紫花春咲木の高

の三倍の大サあり、花々々々、葉三角云々、野町日光山中には

洛外山中多一花紫色小輪紫の
瓔珞

つじ
映山紅の花に似て、葉三角の花可愛
つじ

とと璦珞のこころ、故に名づく云々
フド
鄧跼

花と開く單ひと餅もち白く其大なる者二丈に至る
てじ
六

蓮花四種のワレを壇段西宇共ニ書来リ
○西辛
綱目

時珍曰深紅色者即山石榴云

正月

年始狀
子日遊
子日衣

猫の妻戀、猫さうる

二月 涅槃會 涅槃像

二月のころ
仏のワラエ
楞嚴經
涅槃經
清淨
不死不生

之地一切修行者所依歸

春
和

超脱輪廻出離生死之地と云く死と云ふあらず如来
 御年七十九二月十五日大衆示己て頭北西西右
 脇より減りぬ委く大蔵一覽入減品は出づ温槃
 像ふ五十二類天道人道地の三十六禽洪河の鱗魚天地
 の間生を受くるもの皆愁歎の容形を画く也
 是と二月の別仏のころ去一仏かじりすあま

正月 菜摘川神事

七日 神社啓蒙 勝手明神の社
 大和国吉野川ふき祭る所の神一

座受賢受神、云、毎年正月七日此社の神人氏子の男女此川の辺に
 至り若菜とつと勝手御前の神供の備へ祭祀とす故菜
 摘川神 内宴 公事振源内宴とハくくの節会仁壽殿
 事と云、行つて文人と題とる詩を作

七日 正月

俗正月七日と五節句の初として
 七種の菜とくく入遊宴志して
 義とす是と七日正月と云下賤の輩正月七日九日
 赤の日と正月と云くく八窓ふ遊びと云く

薺打

刑楚歳時記正月七日七種の菜と云て薺を作す
 是と食ふ人万病の七種ハ芥薺薺薺薺

考へて見ふ按小事文類聚の歳時記と引て曰正月七日
 多く鬼車鳥渡る家門と槌戸を打灯燭と減りて
 こまを穰ふと和俗七種と打唐土の鳥が日本の土地へ
 渡らぬぞと唱ふ此鬼車と忌む意と云と打ハ鬼
 車鳥の止まらざるやうに穰ふ太平廣記鶴鶴ハ即鶴
 あ人一名姑獲一名夜遊女又ハ鬼車と名で春夏の交
 稍陰晦の遇ハ飛鳴嶺外ハ過ぐを多一人家入
 人の魂氣と鏢大或云常血と滴る 鳴鳥狩 泊山
 血を滴るの家ハ山谷あると云く 朝鷹

鈴こさすハ泊山とハ山野の出て宵小雉子の鳴所と聞
 継尾鷹 置て未明行て鷹の雉子と捕らする
 を泊山とハ鳴鳥狩とも聞をも鳥とも朝鷹とも
 云ハ鈴子指ハ鷹百首拙云是ハ泊山泊狩あまた
 うわける鈴ハ鈴子と云くのと云く鈴の鳴らざる
 やうなり鷹とすく狩て合するハ鳥と云く
 うとハのぞくハ継尾ハ古ハ継尾の鷹と云くあま
 鶴の尾と云く接ハ何の用と云くと云く近世尾羽

損傷一或ハ短小あるもの
他の鷹の尾と以てこれと接

兼三春物 永日

詩国風春

二月 苗代

た部種浸の条見合す一
朝食鑑 三月時とものと民俗

日運 苗代と云、穀種を用て俵子に充て川水に漬す十五六日或
ハ十八九日及び廿日三十五日もやここまの取卸して俵子と
ひき、四五日六七日と経て後、假田の事を時と苗代と云
○苗代と云名ハと種とあるす如の田と云て云代とハ
七十二歩と十代と云やまて、田畝の数五百代十代と云
代も同じと云轉々、春田ニ水と引種時との各目と
ある。水口 本朝食鑑 凡種苗水と得るは枯る故ニ苗
る。○ 祭、代水と引の祭と云○早損水損の事と云
せどとて、苗代の水口ハ幣をい立て祭ると後頼朝目の説
幣串小豆と云 苗代菜更 三種ある、其菜と実と皆
ぬき祭ると云 三種ある、其菜と実と皆
火異あるもの一種春月ハ當りて、苗と種時実熟す大と小
さ束の如く、苗 時珍曰、菰ハ今人白菜と呼二月
代胡頹子と云、菜花 黄花とむと云の如く、四月三月

角と結ぶ 亦芥の如く

和漢三才圖會 菜地は布て生ず形ち
薄公葉の如く、すて微硬く香氣あ

薺花

己実と結ぶ三角と末大く本窄くして三絃の撥の如く小児
其二つと云く相磨きハ音あり、故ニ三線草と名づ、庖厨

本草 冬至の後苗と生 三月 東東の粥 食の余出 東東

三月

ト、三月 細白花を開く 大和本草 夏芽と云を故に云つと云○藤文曰、在京

の花

活法の書ハ三月に生す、恐らくハ誤り、人凡来ハ四月小葉
と生ト、五月葉稍く長ト、葉の間ハ小白花と開く、微青し

梨花

時珍曰、二月白花と開く、雪の如く、六生、棠梨
上ハ小風をきき、実と結ぶと佳あり、梨

時珍曰、棠梨ハ野梨ハ、處々の山林にあり、軒の
其樹梨ハ似て小く、二月白花を開く、妻梨ハ生

と云、○ 苧生の 伊勢国苧生の 奈良 水石集ニ
浦梨、浦梨の名所、奈良

都の八重櫻をとり、ハ當時ハ東園堂の前ハ二上東門
院奥福寺の別當ハ仰せて、かの櫻よりハ堀り、車に

春 たり

入てちやせると大衆名と得る櫻と左右に奉らして
僻事なりと打めり女院とて、（注）て奈良法師ハ心
あきまのと思ひまはつるがき大衆に真小色ふーとて
さへ此櫻を我櫻と名付んとも、伊賀国余野と云庄
をそへ花がきの庄と
ふとみ
名付けてかきとせり
菰耳 蘇頌云
菰耳ハ其葉

青白く白華細莖蔓生す四月中子を生ず時珍曰菰
葉ハ葉蒼耳不似て微長く地菰に似く稍薄く節ハ對
て葉と生し皆細毛あり肥壤ス一株ハ枝を分つて十八
九月小花を開く深黄色之中ハ長さ子云（注）徒然草
めあまると云草あ入りつるをゆまれ人
此草をつくをすむらいつゆとゆん云

夏と待ら三月禮拜講
台記後一条院御
宇万壽二年大宮

權現の託宣ありて叡山大宮の室前にて法花八講と修すこ
より以來毎歲三月二十三日をて行ふことと本禮拜講
と云新禮拜講と云八同月廿四廿五日十禪師の社前にてと
行ふ是又後堀川院元應元年慈鎮和尚の本願をて

正月 結昆布
新年の雜煮ヨるを
むつひとらふと云に訓のち

二月 紫の塵
部殿の
条ふふふ
燕鯉
和漢三才
會大さ尺

春月
三月 麥鵲
本朝食鑑三四月田麦長き時
こまを取るとの呼で麦鵲と云

春草麦の中ふ子と哺まう鵲ハアイフと云ハ
鵲の雌をいふ雌ハ轉る子と哺まう時あると云

正月 裏白
部齒
裏白連哥
雍州
附志

北野社正月四日裏白の連哥あり凡連哥懷紙四枚あり
中古執筆誤て片面と脱しことと記さる是より流例
とありて片面を白紙す故一枚
馬乘始
注釈ハ

謡初
部松
郊杖
江次第上古有出御南強白太
子參上儀近代不行春宮被

欽 卯杖、其木槿、榿三束、木成三束、比々良木三束、牟保己三束、黑木三束、桃木三束、梅木三束、椿三束、
 公事根源 御杖と持統天皇正月の卯日、大学寮の

是と奉るに、日本紀云あり、又仁壽三年正月、小諸衛府祝、

精魅とおまじなふ。是は以て悪鬼に拂ふ。

造物所よりすむを造物より其上の岩の中御生気

の方の歎とほくそく、如杖ふありむ、
雑談抄 今の世は賀

茂く、如杖く、在家より、一尺余の、白く削り

三光院御説

伽羅^{ガロ} 竜^{リウ}の形^{カタル}に作^スまる。物^{モノ}と云^フふ。

年中魚氷上る
月令孟春之月魚

上氷の孟春発端の

水の上多かり、
鶯菜
本草食録 再生して二三寸
あつたのと来て又荒土の所、
あつかひ

是と驚菜と号す、
驚、うゝゝゝゝゝゝ
幾山三月十四日

鳥トリ持モツ當アタリ々々生ナマ々々
土竜打ドコロウチ
此の下、
其事あり貝原

先生の歳時記をも、
 此國とよみ、
 此日薄暮とも、
 明曉に至る

土竜うづまづを打うちく、藁わらと束たばねて、地ちを打うちくをいふ、浪花あなはな

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

此日地上と海岸と繩をくくして曳あくる鉦太鼓を

和漢三才圖會 融峯海峯と畏る串海

平の掛を以て花圍とちの
 りんりん
 墨あつて人づか
 梅
 雀頭書一海田徳と具す
 和名拉 滋和自辛女潜

石類書 林四節と具す

貴あり、梅うめ小こ四し貴きあり、稀まれちを貴たかて、繁ふさを貴たかに、

老を貴く、嫩を貴かず、變をたつとびま

とを貴むず、茶^{チャ}を貴ふ、開くるを貴むず、〇梅、数

おげく計之ず、中華六八度嶺梅多し、名勝の

日本、山洲、日野、梅ヶ畑、鞍馬、高雄、伏見の

林その外諸州を多し、九梅のこゝに范成大梅譜をぞし詳し

飛梅、江梅、紅梅、鶯宿梅、越中梅、腹の梅

めさりの梅、未開紅、罐梅、八重梅、櫻梅

論梅 ○異名 好花木、このすゝめ、花の兄、春

草、自草、香散見草以上まのの字の部

豊後海、大蛇川、白川、重み

紅あり、軒端のきどの海、中危あり、深紅之、紫のごとく、

春
3

作物所^{つくり}す^{つくり}る^{つくり}を造物^{つくりもの}なり、其上^{そのうへ}の岩^{いわ}の中^{なか}の御生^{ごせい}気^きの方^{かた}の歎^{なげ}とほろろく、如杖^{にょじょう}ありむ、**雜談抄**今の世^{このよ}の賀^が

成^{なり}ふ、如杖^{にょじょう}、在家^けやふおる、一尺^{いちせき}余^あの白^{しろ}く削^くる木^き、小^こ日^ひ陰^{かげ}のふつと纏^{まと}ひ、俱利^{くりき}伽羅^{がら}意^いの形^{かたち}、作^{つく}まる物^{もの}と、

一^{いち}のあ^あ年^{ねん}中^{ちゆう} **魚氷**小^こ上^{かみ}る 月^{つき}令^{しやう} 壬^{みづのえ}春^{はる}之^の月^{つき}、魚^{うい}上^{かみ}る 上^{かみ}氷^こ、○孟^{もう}春^{しゆん}発^{はつ}端^{たん}の

の悪^{あく}氣^きと、魚^{うい}泳^{えい}ぎ、**鳶菜** 本^{ほん}朝^{てう}食^{しき}鑑^{かん} 其^{その}生^{せい}、二^に三^{さん}寸^{すん} 出^でて、氷^こ上^{かみ}る、

是^{こゝ}と鶯^う菜^{さい}と号^{ごう}す、ふ、鶯^う **土竜打** 歳^{さい}内^{ない}正^{せい}月^{げつ}十四^{じふ}日^{にち} 先生^{せんせい}の歳^{さい}時^じ記^き、西^{せい}国^{こく}と、此^{この}日^{にち}薄^{はく}暮^ぼる、明^{めい}曉^{きやう}小^こ至^しる

の鳴^{なり}、時^{とき}小^こ當^{たう}る生^{せい}むる、欽^{きん} 此^{この}事^{こと}あ、貝^{かい}原^{げん} 先生^{せんせい}の歳^{さい}時^じ記^き、西^{せい}国^{こく}と、此^{この}日^{にち}薄^{はく}暮^ぼる、明^{めい}曉^{きやう}小^こ至^しる

あてハ此^{この}日^{にち}地上^{ちとう}と海^{かい}嵐^{らん}と繩^{じゆ}あて、**鉦太鼓**と 打^うて拍^{ぱく}す所^{ところ}あり **和漢三才圖會** 鼈^{かめ}、海^{かい}嵐^{らん}を畏^{おそ}ふ、串^{くわい}海^{かい}

嵐^{らん}の挂^{かけ}を以^{もつ}て、花^{はな}園^{えん}とちひ **梅** 和^わ名^な拙^{せつ}梅^{ばい}、和^わ名^な字^じ女^{にょ}、**確類書** 梅^{ばい}四^し德^{とく}と具^ぐす、

初^{はつ}生^{せい}の莖^きハ元^{もと}より、開^{ひら}花^{はな}ハ亨^{かう}た、子^こと結^{むす}ふハ利^りより、成^{なり}熟^{じやく}す、ハ負^おより、梅^{ばい}ハ四^し貴^きあり、稀^{まれ}ちと貴^きて、繁^{かん}と貴^きと

ど、老^{らう}と貴^きと、嫩^{なん}と貴^きと、貴^きと貴^きと、變^{かへ}るとたつと、**肥**と貴^きと、貴^きと貴^きと、茶^{ちや}と貴^きと、開^{ひら}ると貴^きと、**○梅**、数^{かず}

品^{ひん}あげ、計^{けい}ふ、中^{ちゆう}華^{かう}ハ大^{だい}度^ど嶺^{りやう}梅^{ばい}多^{おほく}、名^な勝^{しょう}の 地^ちとす、日^{にち}本^{ほん}あて、山^{やま}州^{しゅう}日^{にち}野^や梅^{ばい}、烟^{えん}、鞍^{あん}馬^ま、高^{かう}雄^{ゆう}、伏^{ふく}見^{けん}の

梅^{ばい}、其^{その}外^{ぐわい}諸^{しよ}州^{しゅう}ハ多^{おほく}、九^く梅^{ばい}の、**○飛梅**、江^{かう}梅^{ばい}、紅^{かう}梅^{ばい}、鶯^う宿^{しゆく}梅^{ばい}、越^{えつ}中^{ちゆう}梅^{ばい}、腹^{はら}の梅^{ばい}

こめ、**○の梅**、未^み開^{かい}紅^{かう}、罐^{かん}梅^{ばい}、八^{はち}重^{じゆう}梅^{ばい}、櫻^{おう}梅^{ばい}、

座論梅、**○異名** 好^{かう}文^{ぶん}木^ぎ、この、花^{はな}の兄^{あに}、春^{はる}

告^こ草^{そう}、白^{はく}草^{そう}、香^{かう}散^{さん}見^{けん}草^{そう}、以上^{いじやう}の、頭^{かぶ}字^じの部^ぶ

白^{はく}く千^{せん}葉^{えふ}、**○豊後梅**、大^{だい}花^{はな}あり、白^{はく}く、八^{はち}重^{じゆう}あり、

春

梅花衣

柳念院御抄 梅重衣濃紅裏紅梅 逍遙院御抄 梅衣面白裡燕芳自十二月至二月

鶯衣、鶯袖

藻塩草 荻枝折 ふふ袖の腋縫く衣の袖と東小袖と云衣の色ふあふ人名

ふ依て春

兼三春物麗

杜詩 逢日江山麗○表麗華麗妍麗おと続く皆

春色の百花咲乱き鳥獸山川

鶯

詩經 出自幽谷 遷喬木 古今集

鶯の谷より出る声あふ春くることと 誰あそびに 千里○

滑山記 正月に至る毎に鳴と春起と云三月に至る鳴止と

春去と云呼て報春鳥と云 和漢三才会 鳴と云ハ尾を

揺り、冬月卿々と云が如く人の舌鼓に似たり春に至る

始て啼り季春止る其声清亮田滑く飛啼きと云

ハ急みて長し法花經と云が如く或ハこけがと云が如く

月日星と 歌よと鳥 鶯と云古今序 花と云くぐひす 水あまむ蛙の声と云けつと云

いけるものいづきや哥と云くぐひける云 哥と云く

鳥と云くぐひ○と云め鳥、人來鳥、短と云鳥、金

衣鳥、春告鳥、うぐひ鳥、以上鶯の異名と云くぐひ

く 鶯の部と云くぐひと見るぐひハ○黄鳥

詩云哥の黄鳥ハ今の鶯と云くぐひと云 説あふある人の云

黄鳥ハ俗ハ朝鮮鶯と云くぐひと云其羽真黄みく鳴の大ナと云

鶯の琴

未詳疑々

鶯笛

徒然草 鶯の作りて吹笛也

鶯

鶯の琴 和漢三才会 其声田滑みく短く鳴時声 小隨て而脚と互に舉て琴と彈手と揺す

單...洛の寺町、誠心院の境内あり、小式部の墳墓

あま...和泉式部の愛せし如の木ありと。○行幸

梅、大花あり、紅あり、千葉、○綸吉梅、梅屋鋪、

行幸梅とおぬ、その平より、

臥竜梅、武江本所、龍戸、清香庵、数十株の梅と

横...我世、梅や、又一株の梅あり、枝條地ふ

名あり、○白雲の竜とつ、や梅花、嵐雪、梅、

山中ふ、梅の咲きて春と、梅、枝、

知る...昏より、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

梅、花、衣、

和本草
雄とていうと云
紅
蜀
舌
本草別録
此

唯をあらうそいふ紅うぐいす
草風と得て

動うごき風かぜあふくくくく自みづから動うごく
二月五日
蘓そ頃ころ端はな經へ

故獨搖草と名づく
二月
五加木春

苗と牛ト並葉ト
老眼
羅山拾稿
この花
敏衆采

青一叢をなす、女排
枝上葉あき如し

老婆多く、齒落てから、齒と葉
三月
也
同
傷

和訓相通、故是と姥櫻、三月、

き、部、曲水
毎、名、祭
木、母、寺、大、念、仏、會、○、武、藏、の、国

の糸子生
十五
日
葛飾郡黒

田川梅柳山隅田院木母寺の縁起を云々往昔吉田少將

唯房卿の男七歳の時父をみれ愁傷のあまり遂に有

為の門ふらんそと願ふ叡山月林寺に登りて修学す

十二歳より野人の爲におどめられ東海の旅みちを

ひく病ううも終ふ貞元元年丙子三月十五日少外

又早世寺忠氏阿闍梨遠く金に無上菩提の作

業を^{いふ}常行念仏を修す^{いふ}それより^{いふ}今に至^{いふ}

大念仏会あり遺語常々會し塚と築き柳を植今日

諸人群
鳥の巢
鶉ハ性醇シ々
淺草ニ竄伏ス

泰く 専く 常居く 常匹く 地く

随々安んず巢をくさ草中お
平生初る
月令

嘗む雀の巢に似く秘あまを
一汁の不
萍始

穀雨之節
為
の
正月
賭弓

氣候也
併也
射正明書
第

射礼の後朝と以て行ふ。
其略云主上射

殿との出で袴はかま射や手て四よ人にん立た具ぐを射やる南みなみをのと

二人射了て後、退出す。次の者歩進む。又次者至る。

と待て真退出路左近ハ射場の北の砦退き右近

弓場の東面北階小部の下より運ぐ、腰太鼓声

三年五月十八日
 治行
 公事
 良原
 是天子村
 湯田

二空二空方方日日如如行行空空事事相相源源長長之之二二集集其其居居

いふもきりきり、ハヤ朋ともち友とものどなり、ナリ左右の近こゝろ衛ゑ左左

兵衛四府の舎人との村侍と云ふ事と云ふ後上

春
の
の

將射手小饗と云ふ是と云ふは射礼ハ賄弓の前十七日小行する正月十三日の

公事根源より又射遺と云ハ射礼の翌日昨日射礼ふ泰と云ふ四府ふ今日射禮と云

下部古事記天照太神伊勢國五十鈴川上にて神代

の人物と云ふをせらるゝ射斗作りゆふと打射と云

残雪 結拾遺春ふしと云ふ風と云ふ山のげと云

雪 一条前関白

野大根 兼文曰西土の小大根 兼三春物 海

苦 説文苦水衣水土 〇青海苔、甘苔、鵜冠菜、

黒海苔、浅草海苔、以上おの頭字の部ふら入る、〇

五すばり、頗る厚く、紫色、〇葛西苔、総易と

主と〇十六島苔、雲易と云、紫菜のろあり、野遊

天水 春部野遊 都入宿とすものゝもと云ふこと今

日も野遊と云ふ 後東極無政頁享武野遊と云ふこと

川狩の名類ある平々の難ハ勿論

長閑 春の日のユフ

と云、二月 荅葱 時珍曰山原平地ふこと

と云、野人ことと食ふ白花と云

実と 軒端の梅 〇部、梅 三月 上奥梁

三才圖会魚梁ハ竹簀を左右ふ立上廣く下狭く

空口へ別小簀と曲く簾の如くあり、底形、繩を編く

底と、魚梁の空口と云ふことの即ち筍へ魚流し隨

と入又簀と云く扉の如くして、魚入ると云ハ順

障り、出ると云ハ逆あり、去るものと云ハ上り梁

ハ若鮎の川水ふさるの物を逐下して、梁は入る取

を云 併出す、正月 元日、元朝

三朝 玉燭宝典正月一日為元日、〇朱子曰元大也

始也、尚書大傳正月一日為歲之朝月

之朝、日之朝、元三 三始、〇師古漢書注元三

故曰三朝 三元 亦三朝同義也、云

春 ねく

又元三者三元之轉稱也。鮑宣傳元日歲之始月之始日之始故曰三始。玉燭宝典元日歲之元時之元月之元也。諸司奏故曰三元元始也。元日郎會

水援國栖奏。滑管雜談この節会へ天子紫宸殿

腹赤奏。小渡御ありて群臣百官小酒とる

宴會ありて宴會と書てトヨアカリとる

大なる節会の名として侍るや十月中辰日の豊

明節会より限るなり其式江次第ホ小詳く

むつたつたのやとこの豊の明の

あるん。日本紀應神天皇十九年冬十月朔

顯昭國栖奏。幸吉野官時國權人來朝之因以

醴酒獻天皇而歌之。延喜式凡諸節会吉野の國

栖御執事獻歌曲と奏す節毎ふ十七人とて定と

國栖十二人笛五人但笛五。夫國栖八人あて甚淳朴毎小

山果をり食ふ亦蝦蟇を煮く上味とす。毛味

と名て其土京より東南の山を隔て吉野の川上小居

峯峻く谷深く道路狹峨故小京小遠くすと

以て來るを希くも以て

赤く土毛と献す其土毛栗苗年魚の

近世吉野より参る絶く公事根源今の國栖の奏

歌をり笛と吹あへ吉野より年の始ふ参り

くずがえ。江次第國栖の歌笛八承明門の外

於て奏之。雜談國栖の歌

節會五節ありて是より作者心得へ但始と以

て正しとす。早。江戸の商家多く

春小許用なり。元日不開戸。元日戸を開ふ一日

廢勢又俗間小家内と掃除せず。元新年の陽氣重

小る美し唐も此事あり。閨部疏る。閨の俗歳首と重

す民間正戸。元日草。福事。書画鶏帖戸。歳時

を開ふ。記正月朔日畫鶏と上ふ帖。其年未と其上小懸け符

を裏ふ。食積。追加の。串柿。和漢三才圖

鬼。部。西陽雜俎柿ふ七絶あり。不毒六

ふ賈。乾。部。金竹の串

春

嘉賓云 今新年嘉祝の物
蓬萊堂 用ひ此草
葺薑 本朝食鑑 薑姑

又蔓菁 春二三月に至り
具足鏡開 鏡六具

莖肥大高く立り 薑と云ふ
ある 具足するの 謂之其供する 如の具足の 餅持ふ刀を

以て截すと思ひ 裁ふ手と云ひて 槌をうつ 是に破り
かゝるを 賞と 鏡開と云ふ 雜菜抄 和俗年の

新年截の字と思ひ故あり 蔵開 始ふ蔵を開て 積

蓄の金銀米錢ふかき 一切の貨財と取出て 用ひ充

て 賣買の事と 調ふ 其年始ふき 吉日と撰て 庫蔵と

し 部 上元 兼三春物 慈姑 鳥草

本朝食鑑 慈姑 於冬 浅水中 小生す 或は 氷に 種三

月苗と生す 青莖 中 稜葉あり 魚尾箭鑑

の如くして 前尖し 後ふ岐 五五月 小白花を 穂と

云ふ 霜の後 葉枯る 根頭と 結ふ 春の初堀り 果と云ふ

同上 鳥草 俗に 不置井と 称する 根は 水田 湖沢の

中 小生す 其苗 三四月 土を生ず 一莖 小枝葉あり 灯心草 小似

たり 肥大あり 二三尺と 刈て 帝を 造る 其根 白鵝秋

後 顆と 結ぶ 大栗の子の如く 晦に 聚毛あり 紫と云ふ

泥の底 小生す 自ら 生ずるもの 黒くして 中食 津多

一 種と 生ずるもの 紫あり 大く 食へば 毛多し

冬 春堀 收り 果と云ふ 半食 煮食 皆佳し 時珍曰 慈姑ハ

葺薑

具足鏡開

蔵開

二月 枸杞

花燈文

傀儡師

兼三春物

慈姑

鳥草

魚尾箭鑑

燈心草

不置井

水田

湖沢

灯心草

小似

紫と云ふ

毛多し

時珍曰

本朝食鑑 薑姑

鏡六具

雜菜抄 和俗年の

始ふ蔵を開て 積

一切の貨財と取出て 用ひ充

其年始ふき 吉日と撰て 庫蔵と

鳥草

魚尾箭鑑

燈心草

不置井

水田

湖沢

灯心草

小似

紫と云ふ

毛多し

時珍曰

慈姑ハ

半食 煮食 皆佳し

本朝食鑑 薑姑

鏡六具

雜菜抄 和俗年の

始ふ蔵を開て 積

一切の貨財と取出て 用ひ充

其年始ふき 吉日と撰て 庫蔵と

鳥草

魚尾箭鑑

燈心草

不置井

水田

湖沢

灯心草

小似

紫と云ふ

毛多し

時珍曰

慈姑ハ

半食 煮食 皆佳し

草の若葉

康文曰
俳諧活

生ト隨テ紐実と結テ形微長し、
東の枝の如し其根と地骨と云
法の書正月の部ニ若草新草初草と

草芳

梁武
纂要

出せし又二月の部ニ草の若葉を稍長と云
春草を弱草
又芳草と云

熊谷櫻
大和本草高尺の過すく花
長く四五尺の過す彼岸

櫻みさきとてハ重の好花とて櫻の先登と花色白として

小紅と帶ふ按ふ源平の合戦ニ熊谷次郎直実根柢一

谷の先登と名に形はすこゝ平家物語に記す

以種余種櫻の魁とて以て是と熊谷櫻と云

三月

草餅

蓬餅部二月初生す莖葉白く晩三月三日婦女

こきと採り蒸し持て糰とす傳て歳事
とす氣御州ハはの部とてつ知の条可見合

勸学會

朗詠注直林寺月輪院にて行ふ天台の大衆法華と誦す紀

典の儒詩聯句と成す東世年中大内記保胤狂言綺語

の罪とも云ふ人として文道先達の学徒を名めて三月九月の十

五日毎に行ひ始めは侍り勸學院ハ三条の北今倉の森その

鞍馬の雲珠櫻

神抄唐鞍の雲珠に似
云々鞍馬の櫻と云

雲入鳥

朗詠
花落

隨風鳥入雲行來ハ雲ちふて云々

汲貼

あ都貼子
の条正ツ

此虫と育ふ始終葉の嫩葉と

九輪草

萩菰本草葦と抽く小
花を園に櫻草の花に似る

暮春

不及

正月

敷入

六の
六日遊びます又敷入と称すりて云々ハ往々云々

と人ハ林敷入りんく遊樂す一説と云んハ敷入とて宿入の

誤り云日洛内外の男女或ハ両親の家にお到り又姻家へ或

ハ寺社へ詣で又山林へ遊び各隨意とす又奴僕ハ我宿所へ歸る

○六の餅とハ大和國の俚語と云敷入と云ハ同ハ泉列きてハ六入

と云大和の民間云ハ旧年嫁しと云女今日親里へ歸ると云必

餅と卷て祝すハ是と十六餅と云十六日の餅の略語と彼是名目

混雜し云六の餅六入の名云

厄神詣

舊民將來○山城
十九日 國領事

郡八幡一の鳥居の内、八幡の御旅所より、年毎の正月十九日、この所へ
 疫神を祭る、諸方の男女参詣す、この故、此所を疫神の社と云ハ
 非、一日の勧請、宿院頓宮のより、預め神数千本と建、疫塚
 表、夜に入て、宮守神主各神を囲、立、凡、宮守の上首を一の行
 吏と云、この次二の行事三の行事と称す、一、火燎を以、今
 ハ燎す、二、火燎と云、三、旧き火燎の、四、立、この神ハ疫を攘
 ふの爲、神人、背灸衆と云、衆詣の、八、年齢支干と云、小、木札、記
 一、捧、所、の、錢、添、疫塚の内、投入、昔、この木札、疫塚共
 火燎す、二、火燎と云、又、疫を攘、十五、日、参詣、十九、日
 時、多、是を疫神祭と云、帰路、矢を買、小、児の、説、ハ
 一の、又、昔、此、所、の、祇園の、社、故、今、と、穢民、将来の、木符と
 賣、二、小、児の、衣領、繫、疫と除、三、中、華、剉、卯の、微
 意、又、山腹の、岩間、出る、水、香、水と称、衆詣の、人
 小、竹筒、盛、勢、家、帰、疫病ある、の、少、く、飲、と
 ハ、愈、凡、厄年、ある、もの、疫神の、社、前、ある、砂、と云、又、疫
 の、下、置、年、過、此、砂を、倍、返、納、故、俗、又、厄神と称、
 ○李吟曰、神代、牛頭、天王、穢民、情、得、多、入、汝、子孫、永、く
 災、難を、免、べ、と、誓、是、穢民、将来、子孫、と、札、を、け、と

この節、厄神、牛頭、天王、
 頭、天王、な、り、
 鑑、梅、
 花、赤、色、と、帯、ふ、
 柳、衣、
 公、御、
 冬、平、

説、面、白、
 山、笑、
 卧、遊、録、春、山、笑、治、う、く、笑、と、夏、山、を、
 蒼、翠、う、く、滴、る、如、秋、山、ハ、明、淨、う、く、

粧、如、冬、山、ハ、慘、淡、
 眠、る、ま、り、
 兼、三、春、物、
 柳、
 春、草、時、珍、曰、揚、枝、
 硬、く、ま、り、揚、起、す、ハ、

故、揚、と、ハ、柳、ハ、枝、弱、く、垂、流、す、故、柳、と、云、蓋、一、類、二
 種、ハ、春、初、柔、黄、と、生、即、ち、黄、葉、花、と、開、春、晚、至、葉、長、

成、の、後、花、中、黒、細、子、と、結、落、落、て、絮、出、白、絨、の、如、風、ハ、因、
 飛、ぶ、子、衣、物、着、ハ、能、虫、と、生、す、池、沼、に、入、即、ち、化、し、浮、萍、

と、云、
 柳、髪、柳、腰、柳、眉、
 柳、の、柳、柳、と、云、
 美、女、の、風、姿、ハ、見、立、て、云、

○青、柳、川、柳、玉、柳、種、柳、箱、や、あ、こ、瘤、柳、
 め、ば、柳、風、見、草、以、上、の、か、ら、字、の、部、こ、り、

入、く、注、せ、り、尋、見、る、
 八、重、霞、
 糸、小、虫、ハ、
 二、月、

○糸、や、あ、こ、注、せ、り、及、子、人、
 山、櫻、
 一、重、櫻、の、二、種、山、野、平、林、ハ、
 自、ら、生、ず、梅、野、梅、と、云、如、
 山、根、草、
 夜、の、
 八、重、梅、
 異、名、

梅の条
三月
柳長曼

酉陽雜俎
唐制三月三日侍臣小
細柳園賜言ハニシト帶身オビミ

蠱毒を免るミこの故に抑鬚とくくくくくく、又一説に陶淵明桃

柳と好^ミ、齡^{いのち}を延^のぶ依^{もつ}て本邦^{ほんこく}をも反傳^{はんでん}へて世俗^{せきこ}上^{うへ}己^{おのれ}ふ柳

挑チカを必カナラし難ナ雞ニを供クト髪カミ
 字ハ七 九部高屋

うとていふをきき嘉代とすう、
注花会の

条ニ
薬市寺良券會
七日より十二日に至る、七ヶ日の法會之

出づ 眞言寺 眞月會
茶師寺 八咫國高市郡 あり天武

九年十月創^{そう}を持統文武の二帝銘^{やへ}て壯觀妙絶

といふ馬琴が野洲の薬師寺と註たる誤なり

いづくのあとの都のきざざうきふ九重ふ白ふゆき伊勢大浦

此哥より八重櫻と云ふは、
徒然草の八重櫻、奈良

の都のそとを、此の
棠梨花 花部、梨花
楊梅

世に多くあり侍るは、
の条に注す。

本朝食鑑樹高サ丈餘葉如瑞香水揚而細厚

深青經冬不凋二月開花三月四月結實

本草 棟葉 八國史及六九齋花譜子其形狀詳之類也 名山吟

新子紀三十一 新子紀三十一

ハ誤り、
酢醱ハコトキニ
古今集
山吹の花色夜明、
雪の白と一

どろろず口ありきく 是山吹の花の色の黄きく 梔子染の如

き故口無しの意おとろけとてふめ又口奇色なるは念とのゆゑ

ぬ色あどとりて 冬の日 僧まのつゝす 山吹との山 又 後拾遺

七重八重花はけを山吹の衣のツルふあきそ山吹衣

事を以て実の無きものとよくいふもの
おもてこすろくばうし

又花山吟云 **排花街說** 面薄打葉裏黃冬冬 金月月 三三 〇

裏山（上）
面蓋裏（紅）着冬多（赤）春の
貢徳（お）曰、你主山名所（お）なり只春の

彌生山

和漢三才圖會

河胡の中より、
為重、
柳鯢、
狀鯢、

以て、白色、淡黒、ろくろく略青色を帯び、性よろこ好く群集し、水上うみづ浮

遊あそぶ性ま蠅ハエと嗜このむ故ゆゑ魚人馬うまの尾鯨しんくの鬣ひげを以もつて蠅ハエの頭くちうを摸もつ

成あし、先砂糖と水みづ上うへううみみふふるとそ、罨いん聚あつる時、蠅あぶの頭と水みづ

投なぐりては釣つりハ或ハ網あみをひくともハ春夏多く出で其大サ二三寸

水中と行くと至て速く故小まゑと名つゝ
柳葉の魚

其柳の葉ハ似たるものぞ、柳鮫と云うなり。

春
中

松むハ松むハ下略めん、夫木 雪馬

ある事ハ下略めん、夫木 雪馬

陳威器田、煙海泥中か生ず、長三二

花 正月 雞旦 三月 眉作

雞旦 正月 雞旦 三月 眉作

七日と人日とふふおね、外記政始

先九日ある、上卿以下位次の公卿ある、

宰相廳、おはく、さきよりさる、

あき事、さる、上卿、おはく、大弁も廳、

のこさる、南の所、勸盃のこさる、

ハ恒例臨時の政とさる、官、正月、

當年の政と行い始むる心、檢非使の廳、

日、あさる、拾琴抄、結政所、在陽明門内、

左衛門、削掛挿、或書、初子の日小松と引て、

府西、削掛挿、百箇け、御方の御

殿ハ東方にかけ、削り花と、年木と、

此遺意、記、今ハ十四日の夕、貴賤と

家毎ハ柳の枝と、懸想文賣、

け、け、門、懸想文賣、

帽子、あさる、錢と、今ハ絶て其事、

春

有故ハ口傳とさる、

蕪頌經、嬰粟、今、人多く、

飾と、紅白二種、微醒、

鶯箭の頭、似、米粒極細、

て地ハ糞、九月子と布、冬と、

お、極めて繁茂、

是若葉、来て、

元已、啟良辰、

三月三日と、

華鬘、艸高サ尺餘、葉石竜、

花を、紅、紅色、房と、

其花、微長、

華鬘

張華上巳篇

姑洗應時月

平長曼

和漢三

才會

を釣る状に似 **五形** 漢名碎米薺、俗云、五形又蓮華
より故る名づ、
其葉皂莢及び槐の若葉に似たり、而々相對し、枝莖地
に布て蔓の如し、節の上莖と抽んで頂花を開く、三
月より四月の末に至るまで盛く、其花淡紫色、との間小
白に処を、状蓮華に似たり、故に名づ、莢と結ぶ三稜、黒色
長さ六七枚、中に細子あり、おのづから撒き生じ易し、
其多き処錦を地敷に如し、人にて野遊の一興なり、
源

平桃 江戸桃 〇三名一種、漢名と金銀桃と云、八重小
けき、花の多き、赤くあり、おのづから生じ易し、
毛桃 万葉けき、毛桃本を、
ふ **正**

月福壽草 元日草 **紀事** 福壽草を器に種て人の
家へ贈る、其名の宜しき、
開故、或ハ元日草、
船小松竹注連と飾り、船霊へ鏡餅神酒と供し、水主とそ
ろく九十段を乗せ、漕戻せし、其外所々あり、

船乗初 標別大坂の
船小松竹注連と飾り、船霊へ鏡餅神酒と供し、水主とそ
ろく九十段を乗せ、漕戻せし、其外所々あり、

船霊祭 船小酒饌を供し、
吹初 笙笛の音、
吹初 吹初を、

舊年 新続古今 春のぬとより雪のふるまで、
方ふ、
初寅詣と同日同所、
用ふとも、此日鞍馬近辺往還の西の山岸、高
く小樓と構へ、その内より縄をうけ、簀をひき、参詣の人
燧石と求めむと、その錢と簀を入ると、引上げ、其錢
の多少に應じて燧石と入きて、再びとせしむ、因て春
おろしと云、其簀と撰ると、鞍馬の地の土生の地下人より、
髪髪と剃ると、その交り動む、世に鞍馬坊主と称す、
石ハこの山の名産あり、〇初寅詣ハ、部よりみへ、
太著 雑談抄 著のな、ハ落馬の振と、將軍義勝、幼
少、治世のとは、元朝規式の著折なり、其年の
秋落馬より失う、御舎弟義政統く、治世の時を、
るやうに取計らひ、太くせし、始る古実ハあらず、
福藁敷 紀事 家庭に藁敷を敷く、
福藁敷と称す、
雑談抄 正月の神を祭る勸請する間、不淨

福藁敷 紀事 家庭に藁敷を敷く、
福藁敷と称す、
雑談抄 正月の神を祭る勸請する間、不淨

福藁敷 紀事 家庭に藁敷を敷く、
福藁敷と称す、
雑談抄 正月の神を祭る勸請する間、不淨

福藁敷 紀事 家庭に藁敷を敷く、
福藁敷と称す、
雑談抄 正月の神を祭る勸請する間、不淨

福藁敷 紀事 家庭に藁敷を敷く、
福藁敷と称す、
雑談抄 正月の神を祭る勸請する間、不淨

福藁敷 紀事 家庭に藁敷を敷く、
福藁敷と称す、
雑談抄 正月の神を祭る勸請する間、不淨

福藁敷 紀事 家庭に藁敷を敷く、
福藁敷と称す、
雑談抄 正月の神を祭る勸請する間、不淨

福藁敷 紀事 家庭に藁敷を敷く、
福藁敷と称す、
雑談抄 正月の神を祭る勸請する間、不淨

福藁敷 紀事 家庭に藁敷を敷く、
福藁敷と称す、
雑談抄 正月の神を祭る勸請する間、不淨

福藁敷 紀事 家庭に藁敷を敷く、
福藁敷と称す、
雑談抄 正月の神を祭る勸請する間、不淨

福藁敷 紀事 家庭に藁敷を敷く、
福藁敷と称す、
雑談抄 正月の神を祭る勸請する間、不淨

と除く心ちづゝ一説は
福沸 紀事云
賀客と送迎の爲ともいふ
福鍋 若水と

汲ぐことと煮る福沸と云ふは用る鍋と福鍋といふ
雑談抄 俗に七日の粥を呼ぶ福沸と云ふは福とハ餅の異

名なり其故古へ福引とて餅と二人して引合こととべ
つゝとや其うハ餅の異名と福生果といふは今朝餅と

粥ハ和とて **ぬく** き部 魅打 福引 宝引
煮熟とていふ

の糸 **路臺** 本朝食鑑 冬十二月宿根花と開く正二
ふ出 月最盛初め地と出る時小蓮の如く其

蒼漸くむく普黄あり外ハ紫華あり土とさること一
二寸ハ小蓮の如く花開ると重くして臺と云ふ俗

ふ路の臺と号す相重る貌を云 **貞享式** 中古の式目ハ
露のさふも露の花とて春ハ用ひれど此名ハ例ハ賞玩ハ

むく消の雪むくむく露のさふハ冬と定むとていふ
露花ハ漢ハ賈島が春雪の詩とる春といふ人も宜あはれど

その名ハさうて俳諧の用あり但ハ露の芽ハ
春ハ一物二用の例とていふ人もあり **兼三春物**

鮎膾 大和本草 膳夫録云 鮎ハ鮎ハ先あるハハハハ 膾
魚の才とす **紀事** 正月ハ三月ハ至る迄専ら近

江の鮎魚とて源五郎卿とて傳へ漁人源五郎始てこ
れとて其大なるものを膾鮎と称す

截て脍とすふ地ハ京近江の人専賞之 **二月一日灸**
紀事 二月二日男女おのゝ灸灸すことと二日やいと云中

華の書ハ八月朔日針灸ありとて誤て二日と
用るハ八月二日もさう同く和俗大人小兒おのゝ灸灸す

是とて二日 **三月** **ふく** **靴** **靴** **冬挑**
やいと云ふ

花單 **普賢象櫻** 横川詩序 普賢堂ハ天下ハ一あり
あり 世傳ハ鎌倉ハ堂あり普賢こ

とて安ふ其地ハ櫻を俗ハ普賢堂と云或ハ普賢象といふ
和訓鼻と花と音同ト花の白くありかつ大あるとの菩薩

の乗るとてその白象の鼻 **藤** 大和本草 花春の末四月
の如くとて兩説あり是あり 咲くハ花の長ハ三又

充つて花瓶ハ花をさすハ酒を加ふハ久しく茶をば不
艸ハ敗酒の中にこれと用ふハ正とて互に相助こと如秋
春

藤波

藻塩草波に似たり藤波

藤枝

若紫ふ十

この花とあり字

藤蔓

玉琴 春をふみふりふりふり

松をどの梢より咲

藤櫓

来の木の瘤 来寄生

と云類、以石集三藤

藤網

藤ふとより合きて經と

三つの藤丸

装束の○青藍曰藤經藤丸藤瘤の類

花のあり形とハまる

2

正月 曆 開

は部、初曆 小松引

去年、今年

雜談抄 貞徳の説、去年今年春、今年と云ふ

棋

大和本草 包橘ハ橘ハ小

昆布

和漢三才圖會

一抹、林と云ふ葉長二三丈、長昆布と云ふ大

抵幅四五寸、長二三尺、海人鎌と用て刈と、松前の産と最

上と専ら嘉祝の物と、和名、小殿原

板 羽子板の条生

江梅 俗、野梅、其好

文木 梅花、○晋の哀帝、書と、四時、随

この花 今ハオとさやこの花と云王仁

御齋會 八日、十四日、追公事根源 是ハ太極殿、八日、十四日、

講せし、御齋會内論義 日ハ御齋會の結願

春 二

詠者講師あまの御前より論義まじり内論義とす
又天長十年正月廿四日延暦寺の僧田證をめて論義
ありとてより人より
や事の起る事い
木の芽
万木の芽立ちあり
説文芽萌芽也
兼三

春物黄鳥

詩經綿鴛黄鳥又云出自幽谷
迂喬木のう部鶯の条止併せり

駒鳥

和漢三才圖會正字未詳其声高滑なり長滑し
ヒシカウカウと云く如く走馬の害と云く如く其頭

毎小左右に振り走馬の形勢に似たり故に駒鳥と名づく
春夏より嘯る大和本草形ハ鶯に似たり大ニ百舌鳥や
と云身ハ冷黒頭のいどの
廻りし紅褐色あり
九霞
か部霞
東風

爾雅東風謂之谷風注谷風平穀養育意也春
晴而風曰光風万葉細注東風越の俗安由乃可足

と云東風痛久吹良之奈吳乃安麻乃
都利須流乎布林擲可久流見由家持
瘤抑

白揚丸葉柳と云その皮を剥バ瘤あり
肌の如し故に名づくま楊枝と云もの也
二月事

始針供養八日○武江の俗二月八日を事納り十二
六質汁月八日と事始と云く竹竿の先小

目筈とつけて家々の軒小生又牛房芋大根赤豆小の六種
を煮汁とて事と六質汁と名づく婦人ハ針の拵
とて集りて淡島の社へ納り一日糸針の業を停む是
を針供養と云其由来いふ詳なり十二月八日と事頭

嘉祝の事をいふと二月八日と事納るハ
近世の誤と云この部事納の条もいふ
水葱摘

本草水旁小生ず葉沢泻ふく小く花青白色蒸く
吟ふ堪ふ大和本草浮蕎草三才圖會其圖小書葉

花沢桔梗水沢小生ず葉厚くく慈姑に似たり
夏秋紫碧花と開く水葵と云沢桔梗と云

紅梅
范成大梅譜紅梅花色杏の
如く色淡紅実扁なり班
寄居虫
如漢

四全文蛤鳥蛤ホの殻の間小寓生ず形小蟹に似たり
白色基石より小なり身柔軟し蓋一寄生木と相

類す長明方丈記
三月小弓引
著聞集
延長五

年四月彈正親王内裡より小弓をもちひたる酒宴果てたゞ
ふるて清涼殿の東の廂より又小弓の勝負をもち今朝軍器
考揚弓雀小弓と類して二物ともふ公家も玩ぶ
御燈

公事根源是八天子の北斗の灯明と奉りて昔北山
小梅の花
灵岩寺ありて高き峯火をいし供せしむるよし

和漢三才図会庭梅正字最生く高き三四尺花を開く形梅は
似て小く白色あり紅色と帯ぶ花黄ふて甚繁く艶美に
花落ちて葉生す狭く長し庭櫻の葉より似て実と結ぶ櫻桃
より少生するも青く熟すと赤く味は酸く甘く

小梅と庭梅
護花鈴
鈴の条に
辛夷
格物論一
名候挑木
同し

筆正二月開花落て実あり夫木よりたえくものとあて
くづの木をせしむるを致くころは為家の十梅曰抑
の葉似て紫の苞紅焰あり又白花のものあり小帯の如
く故小帯とよみ紫のもの木蓮に似たり香氣蓮の如
く蘭に

近く
和漢三才図会糯米ハ小樹最生す高サ
三四尺葉狭く長く薄く縦理を二三月

白花とよみ大サ錢なり煮る糯米のこし故小俗呼と
小米花
小粉團花
同上木の高サ四五尺葉狭く長
棟棠花の葉より似て其花の形

粉團花より似て小く白し其大サ寸半なり小過す一萼
の大サ豆粒なり俗小粉團花と云
高麗菊
老部春菊
金王櫻
一名憂忘櫻と云江戸渋谷八幡の社地を小帖
渋谷金王の裁るものとつひ傳へる

子の
登飼、登棚
の条に
正月
え方
藻塩草
竹の異名に頭昭曰
るくとハ女萎と書くものと

棚
急ぐ摘
芳の外小別なをいとおげり云い名々のうめあぐの
るくえあぐの夷廻
わ部若夷
夷祭
の条に
枝と折る護

腋梅
中花より越中梅のごとしわり
梶原源太景季
枝と折る護

春
元

兼三春物

繪踏

吾山遺稿 肥前長崎五島大村平戸此
地ニ男女限らず繪ふ事是ハ邪宗

と禁せり
多ク二

二月 越中梅

大花やうく白く淡紅と帝
豊後梅に似たり九八重の花

圓宗寺寂勝会

十九日 元亨秋登資治表曰
延久皇帝 二年冬十

二月廿六日圓宗寺成る帝寺小幸して親王法事にてお
落慶の寺仁和寺の南におり莊嚴都下小冠より江次第

四宗寺寂勝会二月十五日今寺跡絶
御室仁和寺の境内に其名ありといふ三月江戸桃

け部源平 江戸櫻 邊櫻葉少一赤一花大輪より
挑の赤み云 莖長く下りたるこの種関東ニ多キ

故小名と 右衛門櫻 江戸四谷拍木村延正寺宗師堂
すといふ の前ゆき昔武田右衛門といふもの此

櫻と愛する當也拍木村あり右衛門が愛せりさうなれ
む後人源氏物語の拍木の右衛門に假借し名づくといふ

化偷草 和漢三才圖會 今多く庭圃に植へ其花と愛
すや爛れぬ葉車前子に似く厚く長し

地小布て生ず三四月莖と抽く花をむく肉紅色或ハ淡黄
或ハ柳色数色あり

其根蝦小似なりて 正月 天狗宴 紀事正
愛宕寺の牛王加持清水坂の西より今日夜入る弦指客

殿におつる南北二行の座におり宴飲其座上におる人
片木といふ立舞ふと天狗酒といふと博供酒盛

其鉢席豪ある故に其音とて天狗酒盛とて宴終る
のふ各堂に登り牛王杖といふ大門扉或ハ床壁を敲る又

法螺と吹太鼓をうつ其間寺僧牛王と貼す是を惡鬼
をうつ謂ふ 雑談抄 天狗酒盛ハ東西座と設く互に賽の

高き人をせし勝 天穿 煎餅と繋 事文類聚 江東の俗
負を争ふといふ 正月廿日を号して天

穿と紅縷を以て煎餅餌と繋
て屋上に置く是と補天穿といふ

て鶉と名る 月令 季春之月田鼠化為鴽 衍義
本州 鶉脚とて短く僅小能行こと長す許し

目極く小く頂毛短く最取やう或ハ竹弓と安て射て取
鷹の飼 夏小正 三月田鼠化為鴽と云八月鴽化為田

鷹の飼 春 夏小正 三月田鼠化為鴽と云八月鴽化為田

あ
正月
縣召除目

年中行事哥合云

諸の外官と宗任せらるる外官は、諸国の司として侍り、田舎の官と宗にありて、公事根源名替、名国替、秩端、更任、仕荷、返上や申文の多くを数と不知なり。この除目あけく可知事、八十年の学ことなるべし、百丈紙も書の多し、**弄花抄**春にあそび召秋へ司召、**白馬**と云替ふものありきとハ北山抄江次才、ちよとハバ節會
七日 **公事根源** 正月七日青馬といふは年中の邪氣正月豊樂殿よりして青馬といふこと、世談問答礼記ハ春と東郊よりして青馬七足を用ひて、又青さハ春の色といふて白さものを青さうていふものと、青馬といふのは、○とまた又うて次すハ江次才其外の書にもと部男踏 あづきくといふ
小豆粥祝ふ
十五日世風記正

と部、男踏とぶ、おんど
 小豆粥あづきかゆ 祝いのちふ
 十五日 世
 風記 正

月十五日小豆粥を煮て天狗の爲に庭中案上にお祭ると則
其粥凝る時東方に向て再拜長跪して服まれば年と終
るやで疫氣なり。○か部のあまのむのとき
粥木粥柱ちどひるゝとて
砥と璣の

つげく、年しよこの枕辞、そと轉しよハあつひの月日と
もひあつむの春をそとア、そと活用がしよ、此あつむと
改むるそとス
雪玉集 あつむそとそとそと

新
年
光
臨
萬
事
興
隆

沫雪ちりゆき
○書監曰、年浪草に今式を挙て云、翁世五条式小
萩日本紀雪之脆弱モロクヨロフ者如水沫故曰沫雪

然雪冬ふふとくきくふとくきくと二見閑居の中、二十番仙ふ、春あせ
 らふ、二十番仙絶ふり可^べ惜^ひあふふ二十五条ハ、翁^{おきな}滅^{めつ}後ハ、支考
 が作る処とて説^ち一理あり、ふく今按ふ、此今式あつる処皆誤こ
 折^もれ五々条とて書ハ享保年中の印本あり、支考の著す
 とてくきくふと早く此年号作者の名と削^くり去て、元禄七
 年甲戌六月芭蕉庵桃青判と云十六字と、巻末ハ補ハ、翁の
 作とてくきく俗とあふむく本あり、むくハ書肆のくきくを
 らん、を支考の作とてくきくハ、巻中の文体も明白とて、云翁滅

菜な、紫むらの帛ひもとの如ごとく、凝こり石上いしの上に生なず、この名の三四種ある、紫
 色いろを以もつて勝まさるゝ、俗よに紫むらの草くさ、武江ぶかう品川しんがわの、
 呼よぶ、神仙菜しんせんさいと云いふ、
 浅草あさくさ海苔かい苔、海辺かいべに採とる、
 青饅あおまん

和漢三才圖會わくわんさんさいとうかい、芥カイの葉は青あおきを醋すふ合あせ、魚膽ぎょたんを和あせ、こゝろ食く
 ふ、俗よに阿乎あふ、
 乃太のふたといふ、
 二月ふたつき 藍時あゐとき
 畦あぜと作つく、種くさね、二三月ふたつきさんがつに至いたる

と苗あゐこ、
 麻時あゐとき、
 蔵器本草ざうきほんそう、麻あし、早春はるはるに種くさね、と春麻はるあし子こ、毒どく
 と生な、
 時珍ししん曰い、八月はちがつ種くさねを下おろす、葉は葱ねぎに似にく、根ね、北きた條じょう、
 胡葱こそう、似にく、其味あじひ葱ねぎの如ごとく、一ひとく臭におひ、
 時珍ししん曰い、虫むしハ翼よくと以もつて鳴なる、
 其声こゑ、虫むし々々々々、故ゆゑに名なづく、

三月みづき 浅葱櫻あさぞうざくら
 櫻ざくらの異名いみなと、蔵くら三さん、
 淡青たんせいみく白色はくしきと、
 あゐ草あゐくさ、
 櫻ざくらの異名いみなと、蔵くら三さん、
 大輪だいりん、
 八重やえ色いろハ

踏青ふみせい、
 都袂みやう飲のむ路ろ青せいの三月みづき三日さんか山野やまのふ
 江州かう粟津あしづ祭まつりハ鳥とり々々川がわの御ご霊れいの祭まつり
 礼れい古こハ三月みづき三日さんかの祭まつりハ、今いま民衆たみしゆ

粟津祭あしづまつり
 十八日じゅうはちにちの人皇にんかう三十四代さんじゅうよんだい推古すいこ天皇てんかうの御ご
 中なかつ進しん中臣なかつなみと云いふ、過あやり、武蔵ぶさう
 主人しゆじんの跡あとと云いふ、中なかつ日ひハ仙せんへ漁り、世よ々々々々、時ときハ推おし
 古帝こてい三十六年さんじゅうろくにん三月みづき十八日じゅうはちにち、件けんの三人さんにん官戸川くわんとがわの沖おき網あみと下くだす、あ
 やさ、そのあひ、月影げつえい、観世音くわんぜおんの灵像れいざう、即すなはち草くさと
 結むすひ、堂どうと云いふ、その灵像れいざうを、今いまの浅草寺せんそうじ観世音くわんぜおん是こゝに、
 そのうち三人さんにんの兄あに才さいを祀まつ、三社さんしや大権現だいこんげんと崇あがひ、今日けふ則すなはち三社さんしや権けん
 現げんの祭まつりハ、先さき祭まつりの前まへ日ひ、三社さんしやの神かみ興きやう三基さんきを本堂ほんどうに移うつ、堂前どうぜん
 へ、俳優はいゆう、あゝ、こゝろと、ひん、形かたちと云いふ、この日ひ氏子うぢこの町まち、遷物せんぶつ木きの
 勢せい揃ぞろへ、翌あした十八日じゅうはちにち祭まつり當日当日ハ町まちの引山ひきやま、そのおと、粧まひ、地ち
 浅草あさくさ見付みづけの外ほかみ来きたと集あつり、次才じさいと定さだり、御ご殿てん前まへより諏訪町すわのまち
 並木町なみきまちを過くぎ、観音くわんおんの境内くわんおんのくわんへ、神興かみきやうの前まへより、切きの、藝ぎを
 施ほす、隨身門ずしんもんを出で、件けんの遷物せんぶつ離子りしハ渡り畢はつ、神興かみきやう三基さんき
 本堂ほんどうに出で、氏子うぢこの町まちと渡御わたりご、浅草あさくさ神門かみかどの外ほかみ至いたる、神
 興きやうと船ふね、浅草川あさくさがわを漕こ上あがり、一ひとの権現こんげんへ上あがり、奉ほうる、今日けふの船
 ハ品川しんがわの西大森村さいだいもりむらの漁人りしうじん祭まつり毎まい年とし出です、是こゝは往古むかし官戸川くわんとがわに在あり、
 漁人りしうじんの後のちハ大森だいもりに移うつる、以もつて、今日けふの、古ふると忘わする、遺い

春はる あ

意へ神輿かみこハるはりしり陸地りくちと本堂ほんだうへ還御かへんぎょと今日淺草雷神
門かどの辺あたりしりし蓑そのと賣うるる杏あんず花はな○和名わな加良毛かろう毛大和本草
此こと淺草せんそうの蓑市そのいち云い唐音かういんと呼よぶふ其花そのはなううるる唐音かういんと呼よぶふ

平重盛の孫六代年長ト云々故に名也
 其木ひくとき時花と見るも長くて切づ
 馬酔木

花
和漢三才圖會山谷ニ生ズ、高きもの二三丈、いきハ一二尺、も
枝葉茂盛もさいす、其葉狭く長く、をうをう鋸のこぎりの如き、齒はを、

淡綠色梗くく枝極ふあまう生ト花芽の半、春小白花
 を開き房と作す子と結ふも亦房をより一子の中細子
 多し、四時濁ち半、相傳ふ馬此葉
 をくくを酔ふ故に名づく、まゝ
 薊
 眉作の花 薊頌
 日二月

苗と生じ、二三寸の時根と併り葉と分るゝ甚美し
四月高き尺餘刺多し心中に花頭を生ず紅藍花の如し
青紫色を北人呼ぶ針草と云ふ多識篇大薊於尔安左
弥み此花婦人の眉拂の形の如し故に眉作の花と云ふ大薊を
鬼の眉あけびの
通草花
木通、桑莖と通草と云ふ鞍馬の木

紫漬ハ通草ノ葉ハ五葉ニ分ル三月紫花を開ク
花の密ニツキルモノ秋田を子をもむモノ云ク

東菊

其葉初生ハ蒲公菜の葉ニ似テ鋸齒あり稍長トテ車前
子の葉の如ク莖を抽んたりそ六七寸小葉五莖の頭ニ
花ニ似テ一莖一花形菊の花ニ似テ色淡碧色黄心あり
單葉ニあり久細瓣重リ咲ケとも單葉の状ニ三四月

關東の曠野の路傍
 鮎あゆ子のこ
 小鮎こあゆ 汲あ簍り
 若鮎わかあゆ
 經あ鮎り八や轉まわ
 雀すずめ爲な錫しやく食く

似る、白皮あり、鱗あり、春生、夏長ト、秋衰へ、冬死す、故ニ年魚ト云、**和漢三才圖會** 三月初、江海の交まじりニ

在く、大サ二寸、甲鱗骨と生ず、潔白、黒眼と云
を呼く、小鮎あなご、若鮎わかあなご、本朝食鑑、鮎あなごと長と云、時

小綱を以てこわをこる。或ハ二夫長繩ふたにともち、繩の上うへ直ちやう。
ととひひく小石塊こいしととろと相曳あひひく小石川こいしかととろ時ハ貼は。

石声五ぞろろと落つ一夫下流み立く扇網と持く二
人の至ろと待つ二夫逆づふちふい相依く結び合する

く、團わだかま様すゝたハ、鮎あな扇あふ網あみ入いる、半はん網あみとと半はん、小こ拘こと持もて
と汲くみ、是こゝと汲くみ鮎あなよう、**紀事**大井川おおいがはよりハ、木柄もくがらと以もつて、鮎あなと

取る、こまこと
汲貼と云ふ

正月 歳旦開

正月吉辰と云ふ
ひく、連舟俳諧

あけく、帝と云ふ、歳旦と云ふ、
歳首賀詞の発句と云、歳旦の句と云ふ

幸木 幸籠

葉盒子○幸木と云、掛る、粥杖の、北国にて幸木

といふ、女の腰と云ふ、又門松の根、立る木と云ふ、

といふ木と云ふ、○葉盒子ハ、盒子の、あて、門松ふゆひ

つけ、供物と云ふ、この内へ備へ、幸籠、この、いひ、

糸燕 春燕と戴く
荆楚歳時記 立春の日、糸と剪り燕

門ふ 箕木牛房
い部開牛 三毬打 左義長、

爆竹、吉書揚、吉書 徒然草 左義長、正月ふ打、吉書

菱の葩をむく、やうと、真吉院、神泉苑、い、

焼、い、法成就の池、い、い、神泉苑の池、い、

和漢三才図会 正月十五日、清涼殿の庭、於、青竹と焼く、い、

吉書と天、上ら、十八日、い、亦竹と飾、摺扇を結付、清涼

殿の庭、於、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

て去る用ゆ

其時ひ辛し

二月 西行忌

十五日

西行法師ハ左金吾藤

原の康清次男、俗名

ハ儀清、鳥羽院の上北面徳大寺家の被管より、弓馬奇道

の達人、保延三年薙髪して大実坊四位と号ス、**隠逸傳**

西行曰、和哥ハ禅定の修行人、吾和哥より多く佛法と云う

と、常ハ仏涅槃の日、花の下に於て死んずを願ふ哥ハ

死んずハ花の白く春死んそのまゝと云ふの

是月のころ、果て建久九年二月十五日卒ス

嵯我の

柱炬

十五日

紀事

二月十五日清涼寺釈迦堂の前ハ大炬兩基

と建、暮ふ及ぶ火を点し、地丁人各炬をめぐり、

弥陀の号と唱へ、節を繋ぎ踊る、是西域より釈迦と云ふ

の遺意と世

座論梅

中花、浅紅千葉、其实枝毎ハ四五顆

ハ、枝短し

長きハ随て揺落すこと、坐し論

中花、浅

櫻梅

中花、浅

紅八重

さうさう

千梅、うがせと

虎

杖さうさう二種ニ

名、其萌やうと云ふは、既に長くと云ふなりと

云、〇の部、虎杖の条と

三月

嵯我大念佛

紀事 九日

見合を、意得がし

ハ十五日

と高貴の家、獻や、或は猿と舞し、鹿の枝と
あそび、是馬搥神といふ鹿の神を祭るなり。

互廣韻 寒凝也。○ハ部の凝。

兼三春物 佐保姫

ハ部の餘寒、ミのハ併するなり。

眠江入楚 春、佐保山の神より事あり、山霞の色、
春と逢ふ神といふ、秋、立田山の神より事あり、紅葉と逢ふ
故、秋と逢ふ神といふ、貞徳曰、佐保姫立田姫といふ、唐ハ
造化神と名づくる、春秋の花と逢ふと造り、神といふと日本ニ
春の造化神といふ、佐保姫と名づかりて、其とき、
神祇といふ、佐保姫と名づかりて、其とき、
姐といふ、客のあはれ、ふと作、衣と手、
体といふ、衣類、
佐保姫の衣
新式 佐保姫の衣衣類
大和本草 壹岐の島海岸小産、其色
櫻海苔 紅白櫻の花に似たり、斤々相属、
是と 春月盛み故、
山椒の皮 本朝食鑑 椒樹の
食ふ 俗、蕪の字と用ひ、
皮外面、粗、
皺あり、色灰黒裏面ハ光り滑り、青白粗皺、

て去る用ひ、
其味ハ辛し、
二月 西行忌 十五日 西行法師ハ左金吾藤
原の康清次男、俗名

儀清、鳥羽院の上北面、徳大寺家の被管、
の達人、保延三年薙髪、大実坊四位と号ス、
西行曰、和哥ハ禅定の修行人、吾和哥、
と、常々仏涅槃の日、花の下に於て死んを願ふ哥、
花のり、春死んを願ふ哥、

是月、果て建久九年二月十五日卒ス、
嵯峨の

杜炬 十五日 紀事 二月十五日清涼寺釈迦堂の前、大炬、
建暮及火を点し、地丁人各炬をめぐり、
除夜の号と唱へ、節を繋ぎ踊る、是西域より釈迦に傳る
の遺意とせ、

座論梅 中花、浅紅千葉、其、枝毎四五顆
長き、随て揺落す、坐し論
如し、櫻梅 中花、浅紅八重、
枝、二種、
名、其萌、
云、ハ部、虎杖の条と
見合ふ、意得、

三月 嵯峨大念佛 十五日 紀事 九日
春

櫻のあふふ所人をも櫻人といふ。ふも又色あざけり入
る。ていふいふふあふふ人。○櫻人、備馬末の呂歌、

櫻田

連哥新式抄 深山櫻のこととて、田のつゆを、一本を
ハ生ぜぬものとて、そのとて、わらわと、**新式秘傳** 櫻田、

何ぞと宗砌さう返事ふする。さう田は、を物とて、わらわへ

○又櫻田、紀伊國の名町とて、

櫻

哥林良材 櫻を木とて、つるつる、松の戸、杉の戸
の如く、一鏡の近辺に櫻の咲くこと、只櫻のまゝ

櫻

櫻持

真代抄 櫻を尋ね求むこと何と
さひも持とて、○年持のさひも、**櫻草**

和漢三才圖會 山谷の中を生ず、即九輪草の一種異種、葉の形相
似、微心、遠く鋸齒あり、甚光沢あり、木して、葉の心白く、

三四月草と抽んで、花を生ず、單の淡紫、或

白花、櫻の花のごとく、最艶美、故名て、**櫻貝** 今櫻貝
と称す

もの、恰もさうの散

櫻

干梅 とて、櫻川の謳人

く、地ふちくさあり、
作ると考ふ、常陸國櫻川霞浦の辺りふ、かく名わ、奥の

あんとおもひ、予先年筑波登山く、彼辺一見せし時、好

あり、是も亦融通念佛の余流、午の時主人堂上於て俳優
を、是諸人の夢とて、無二集、後宇多院
の弘安二年、**早桃** 花華 **櫻** 大和本草 文選沈休文
詩、山櫻、花欲燃、八果水

の名、花朱色、火の燃んとす、王判公詩、中櫻、花石映
松枝、司馬溫公詩、紅櫻、零落杏花開、中華、櫻、
ハ朱花、日本の櫻ハ中華あり、延宝年中長崎より来りし

何清甫より、朝鮮より有と、○初櫻、彼岸櫻、二重櫻、糸
櫻、姥櫻、児櫻、熊谷櫻、類、二月の季、○頭字の部
ふつと入、と見て心得べし、○八重櫻、吾賢象、揚貴妃、

奈良櫻、鞍馬雲珠櫻、虎尾櫻、塩竈、伊勢櫻、江戸櫻、
庭櫻、樺櫻、浅黄櫻、大櫻、類、三月の季、○頭字
の部、ふつと入、注ス、○異名、夢見草、あざざ、わづら草、

吉野草、曙草 園名 類、頭字の部、ふつと入、見ろ、
左近の櫻 南殿の櫻 **紫松** 南殿の櫻 紫宸殿の巽角
後枯失、大徳より改て櫻と、**櫻人** 連哥新式 櫻人

櫻のあり、人をも櫻人といふ、又色をもいふ、入
る、とて、いふ、ふ、あ、う、入、○櫻人、佐馬未の呂歌、
櫻田 連哥新式 深山櫻のこと、田のつゆ、一本、

何ぞと宗助も、返事あり、○又櫻田、紀伊國の名町あり、
○又櫻田、紀伊國の名町あり、
櫻 哥林良材 櫻、木、つ、つ、つ、つ、松の戸、杉の戸

の如く、一、櫻、戸の近辺、櫻の咲く、只、櫻のあり、
櫻狩 真代抄 櫻を尋求、何と、
櫻草 宿あり 宿あり、○草、狩、の、

和漢三才圖會、山谷の中、生ず、即九輪草の二類、異種、葉の形、相
似、微、小、遠、小、鋸齒あり、甚先、沢あり、して、葉の心、白、
三四月、葉と抽んで、花を生、草、の、葉、紫、或、
白花、櫻の花の、最、艶、美、故、名、
櫻貝 今櫻貝 と、称す、

この、蛤、も、さ、の、散、
櫻 干梅 櫻川の謳 櫻川の謳、
く、地、ふ、ろ、く、さ、り、
作、と、考、ふ、常陸國櫻川、霞、の、浦、の、辺、り、ふ、か、く、名、の、奥、の、
あ、ん、と、い、ふ、も、い、予、先、年、筑波、登山、く、彼、辺、一、見、せ、時、好

春

の晦日とも春の果

春の限ももつて



正月 祇園の削掛

貞起

神社啓蒙 祇園社ハ山城國愛宕郡八坂郷ふる祭る所の神三座

午頭天王ハ王子少將井紀事晦日子刻祇園の社神前の町如の

外とくく火と滅すと暗申参詣の人口と悠々と他人の暇疵

と斥てふ假令その声とて其人を知るとも身も恨ま

こと懺悔の儀とて勅異懲惡の微意と見初むるとも執行腰

裏に乘り社司前恥しく執行拜殿に登り神前に向ひて黙坐

うとてちむとてあやう経咒を誦し東西の額の内へ額へ削

掛の木とを有し建むると各六屯是十二月の数を表し是は卯枝

と稱す而同時ふて身を焼く傳へ其烟火西にむ時ハ丹波の國

来正王親熟せず東へむ時ハ近江の國又去つて東へむと而

國の豊凶と云ふ故に西方に居る人ハ高き近江とて東方の

人ハ丹波といふ其烟火と避んと欲する其後社司新井水

と取て削掛の火を以て元朝の供物を調ふ是新年火火と改め

て参詣の諸人も其火と勢なり家へ帰り元朝の忌日に意を

君が春

鳥丸資慶卿の書りつゝある云君よりむく大君
終に故築地のうちをり續つていふをり書りて

事のもの尋ふに、春ては、つゝし、この國より、櫻の
といひて、さる奥あり、春暖とて、以河へ多くのび、い、網と
てするに、則ち浦の名産者とも、要是云云青藍云運
歩色葉**国産**の法、又鼓司、吉野の人名なり、吉野の櫻落
て水にけり、真とあるや、ふ、櫻更とのふと
云々、それバ活法の書に、ふ因て出、
櫻鯛
云々、春三月さるの花に、とて、漁人多く、とて、故に櫻鯛
と云、○ゆゑ春のさるの浦のと、よひあ、め、さ、わ、や、ら、ん、
馬
家
櫻うづみ
千梅とて、正字未詳、鯛の字を用ひ来
俗字とて、この奥然、とて、先江湖ふ多
一、五六より大、とて、人、ま、背、黒、腹、鱗、赤、信、品、証、訪、の
湖水、赤、奥、とて、い、管、根、も、赤、服、とて、其、外、処、も、あり、て、春
花、とて、さ、る、さ、る、取、もの、と
櫻衣
関白、春日、等、春着之、挑花御
説、面白、裏、蒲、荷、添、
又面白、裏、赤、花、云々
長、各、つけ、楊、梅、蘆、菰、とて、和漢、草木、図、会、卷、
三月大根
汪陰懸、赤、蘆、菰、一種、
暮春の時、有、之、形、細、
三月盡
月

櫻鯛

本朝食
鑑奇書

云、春三月ささるの花はもと、誰人多くこゝに、故に櫻朝
 と云、○ゆく春のささるの浦のささるいふ、あつゝふやうらん、
 千梅くさくさく正字未詳、賊の字を用ひ来
 俗字とぞこの奥然く、先江湖ふま

櫻子

正字未詳、賊の字を用ひ来

一、五六寸より大なるものを八寸、背、腰、膝、赤、信、品、誦、訪、の
湖水より赤魚をとり、管根より赤服をとり、其外処よりありて、春
花よりとりたる取ものを、
櫻衣
關白、大目、等春着之、**桃花御**

櫻衣

關天宮等春着之
桃花御

説
面白
堂裏
蒲萄
染

三月大根

暮春之時有之形細

長し、名づけ、楊花蘆花と云、和漢三才全書

三月盡

月

の晦日といふ春の果
春の限はかばかもなつて

470

正月祇園の削掛

不朝
寅越

神社啓蒙 祇園社ハ山城國愛宕郡八坂郷なる祭る所の神三座
午頭天王、王子、少將井、**紀事** 晦日子刻、祇園の社神前の口如の
外よりく火を熾せし、暗中参詣の人口と惑ふ、他人の職が
と斥けり、假令その声も其人を知らざるも、**年々** 恨ま
るゝ懺悔の儀あり、勸善懲惡の微意、凡初むるゝ執行膳
裏に乘り、社司前肥、執行拜殿に登り、神前に向ひ、默坐
するも、あやうくある、經咒を誦み、東西の櫛の肉を預け、削
掛の木を左右に建ち、各六屯、是十二月の數を表し、是は卯枝
と稱す、同時に是を焚く、傳へ、其烟西方に、時ハ丹波の國
來江、王親熟せず、東へ行く時ハ、近江の國又あつ、是ふとて、西
國の豊凶を占ふ故に、西方に居る人、高聲に、近江、近江、東方の
人、丹波、丹波、其烟氣と避んと欲す、其後社司、新井水
と汲み、削掛の火を以て、元朝の供物を調ふ、是新年水火と改め、
参詣の諸人も、又其火と勢、家へ帰り、元朝の美事に驚る
こと
烏丸資慶卿の書するもの云、君より、むむ、大君
移り、故築地のうちを、續け、人を得、君ありて

君
春

鳥丸資慶卿の書より云ふ君はたゞハナハナ老
終る故築地のうちをて續つて人をも老あて

誰かきえし... 御慶 年の始の祝詞の長松の
親の名を來し御慶の野城

着衣始 李吟曰衣と着初る祝
越打 玉打

萬葉集 神龜四年正月、教王太子及諸皇子等、集於春日野而作打
越之樂、福中抄十節錄云、黃帝蚩尤之頭、是越也、今

の越杖、是越例を以て、漢土年の始、件のこゝ用ひ、國中
凶事あり、初て日本國その例を學び、越打をこゝに、醒翁

青華集 正月男重のときあふ越杖ハと打越の要風あり、
打越ハ馬上武事にあふ、今昔集云、和漢にこゝの來る

越久し、又越杖と云ハ推の形、杖ハ玉といふハ片
木と平ふけ、玉のこゝろ作り、その打やハ其間九十間

或ハ十二三間をへとも、其半地上ふきこゝろ、男兒
双方あふけ、玉と地上あけあふきと一方より推きて

ちとむきとめえき、限のすぢり、玉のめづり載る
と投る、この勝ハ打とむきとの負ハ或ハ打とむきの

ちとむき、玉とこゝろせき、あふきの方の勝ハ打とむきの負と
ちとむき、是と越杖のちとむき

も京師ハ玉打とて其あふき、あふきと昔のこゝろ越
の推ハちとむき、竹杖箒のちとむき、玉とちとむきのこゝろ

同上、ちとむきの名ハ古き書ハし、見あふき、近き昔造り始
ちとむきのあふき、越杖と同物とす、ちとむき、元來別物

本草啓蒙云、碌碌ハ田器、形瓜の如く、六棱あり、兩頭ハ
索あり、土上をひきて地面を平うす、具ハ三才四会、按時

考ハ四圖を載す、本邦正月兒戯のちとむきハこの形ハ象ハ
今この説あり、按ハ正月男兒あふきとをてあふきハ

年の始ハ農業のまねひとせ、農事とすむ意あり、
古画と云ふ、ちとむき紐をきく地上を引いと多く画けり、

是田畑の地面を平うす、後ハあふき、今ハ年始の祝いの
おと、このおと、何の所用もあき、このおと、越杖

あふき、共ハあふきとことハ骨董集
古書揚 長の条出
行幸梅 論吉梅、大花紅、千
御忌 廿五日、洛の
兼ハ二名一物、東山華頂
山智恩院大管寺、淨土宗惣本山、正月十八日より廿五日に至て、
一七日晝夜別行法事と修ス、廿五日と以て正日とす、是法然上人

の忌日、故に御忌と云。○京俗、御忌詣と遊覽のありて、
非當なり。十月東福寺の岡山忌、終として非當納す。

三春物 雉子

華蟲、野雞、漢の呂后の節を雉と云。月令、仲冬

雉始雊、孟冬入大水、雉始雊、和漢三才圖會、雉、雉、頂、

雙、角、毛、頭、頸、胸、腹、翠、黑、色、光、有、頰、眼、紅、

背、青、く、失、背、翻、彩、色、腰、小、長、緑、の、毛、有、尾、長、

く、文、来、有、翅、短、く、蒼、黑、斑、く、腥、掌、雉、似、く、勁、

雌、ハ、黄、赤、黑、斑、く、文、暗、く、尾、短、く、金、衣、鳥、鶯、の、異、名、

野、恒、似、この、雉、を、愛、さ、る、切、

明、皇、禁、苑、中、に、於、く、黄、鳥、と、呼、て、鶯、と、云、

金、衣、公、子、と、云、故、に、金、衣、鳥、の、名、有、

法、華、經、と、云、

如、故、に、名、有、

ハ、金、衣、と、用、ひ、春、に、至、く、木、地、の、ま、ち、仕、替、さ、茶、人、曰、春、に、

陽、氣、マ、く、マ、の、内、より、灰、と、吹、上、マ、の、ま、ち、見、え、

依、く、木、地、の、ま、ち、と、用、ふ、是、茶、道、の、古、來、

他、説、は、見、え、と、説、く、

二、月、行、基、参、

二、日、○、播、州、河、辺、郡、昆、陽、村、崑、崙、山、昆、陽、寺、ハ、十、五、代、聖、武、帝、

天、平、五、年、草、創、開、山、行、基、と、云、茶、師、の、像、と、作、り、て、安、置、す、天、

正、年、回、禱、す、今、僅、小、宇、と、構、一、本、尊、及、ハ、岡、山、の、像、と、云、ハ、町、

東、に、池、有、昆、陽、の、池、と、云、池、中、の、鮪、一、眼、池、の、魚、と、祭、り、行、波、

明、神、と、号、す、二、月、二、日、里、民、参、詣、す、是、に、行、基、参、り、と、云、○、行、基、ハ、

姓、ハ、高、志、氏、泉、茹、大、鳥、郡、の、人、百、濟、國、王、の、胤、天、智、七、年、小、生、

十、五、歳、ハ、

祇、園、御、八、講、

八、日、○、今、絶、く、以、後、ハ、元、御、八、講、ハ、

義、經、を、加、へ、三、十、日、三、十、口、の、式、ハ、八、講、壇、と、云、兩、壇、相、對、と、

飾、之、講、師、問、者、と、定、り、右、座、ハ、佛、名、を、云、付、小、唱、ハ、左、座、ハ、法、

花、ハ、寒、の、大、意、と、論、ず、別、に、論、題、を、設、け、論、義、を、其、外、如、

陀、呬、散、花、の、法、式、最、重、く、天、台、一、宗、ハ、修、行、勿、論、或、ハ、林、泉、

庭、の、御、八、講、ハ、奥、福、寺、東、大、寺、延、暦、寺、園、城、寺、四、箇、大、寺、の、碩、

徳、と、召、さ、る、ハ、行、基、菩、薩、の、御、哥、法、花、經、を、云、ふ、こ、ハ、

春

こ

薪、こ、茶、摘、水、汲、つ、へ、こ、此、哥、を、云、付、小、唱、ハ、こ、

も、有、り、提、婆、品、ハ、採、薪、及、菓、蔬、隨、時、恭、敬、與、の、例、と、云、薪、の、

行、道、と、云、天、子、自、ら、御、行、道、ま、り、く、薪、采、箆、水、桶、寺、六、位、

威人三人役之捧物行香木の枝を悉く記し、祇園御八講
定く台宗別院の時勅会を行はせり、あや、今も社内、慈慧
大師の像を安置北五日菅家長者記吉
く遺跡分明く、**吉祥院八講**
祥院、菅家氏寺、天神

の祖父清公建立、東寺の西南に在り、加賀國富墓の庄、古より
主あり、荒廢の地、宣言し、請ふ神領を施入せしめ、水く
法花八講の料所とす、**公事根源**二月廿五日、天満大自在天
神の夢ありしより、御日、夢のつげき、天仁二年より吉祥
院あり、八講あり、菅家の**北野御忌日**
とも、春より是を行ふ、北五日北米種の
御供神社敬業

北野社、八山城國葛野郡あり、**紀事**今夜、西京御供田を預る
の家、大小の御供を北野の社に献ず、官司老以相迎へ、び立て、
幣殿より神前の階下に至り、手毎ふきと傳ふ、官司の一老と
巫女の文子とあり、是と取く神前御供、是と手供とあり、
又轉供と云、或ハ菜種の御供と称す、供物の上ハ菜花と挿む、
故あり、或ハ歳あり、菜花と関ふ、梅と挿む、
永子御讀經
江次第頭書春秋二季、百僧と南殿に請ふ、
大般若經を讀む、其内御前僧北口と定む、

御殿に於て仁王經を讀み、納言參議各一人、南殿に着て
事を行ふ、自餘ハ御殿に候す、貞觀御時、毎季、是と行ふ、
元慶の天皇踐祚之後、二季、修之、**公事根源**二月八月、大般若
若經と百とあり、講せり、四日のこと、行茶とて僧
茶とあり、天平元年四月八日、**菊若葉**
もあら、行茶ハヒキヤとありて、
布て細苗を生ず、是ハ宿根より生ずること、又種子を
立春より下ス、二月、驚蟄の節、種を始り、芽と生、二候と經て

葉始て、**三月經供養**
二日〇、掃部四天王寺、太子堂
の北隅あり、本尊如意輪觀
音、三月二日、經供養と修ス、太子夢殿の經供養、是ハ寺説
云、今日未の下剋、聖靈院の白洲あり、經供養、室琴
を室殿の西に、御影奉り、衆僧諸役人、看坐、寺僧惣
礼、面向、次ハ舞樂あり、其外

曲水宴
流觴、巴字盃
羽觴を飛す
二月十五日あり、
荆楚歲時記三月三日、四民水消、お並び出、流觴、曲水の
飲をあら、**公事根源**む、王卿あり、春より、御前あり、
詩と作り、講せり、御溝水、お盃を、て、文人

以下こととのむし、康保の御記のせりきり、又雄略天皇元年三月上巳日、後苑ふりゆき、いめ、水のごま、あき、さき、みずと、日本紀にきき、埃囊抄曲水の地、勢ハ巴の字に似たり、この会、周の世の前より始り、久く絶え、魏文帝又與、高平といふ、善惡連連ふ、臣下の才と試み、羽觴ハ鸚鵡盃とて用ふ、海中の貝ハ鸚鵡の形に似たり、侍る、是と取、脊と穿破して用ふ、此盃より水は、祇園の一

切經會

十五日 拾芥抄三月十五日祇園一切經會、云く、ぬき、あき、あき、神供所ハ只徑行堂の名侍りて、供物を調ず、これら其遺意なり、

金鳳花

一名毛茛、又鬼の田舎子、○時珍曰、山人麝

截、葉と采、按、寸口を貼ス、一夜あき、泡より、火燎の如く、呼、天灸自灸とす、春苗と生ズ、高きもの尺余、一枝三葉、葉ニ三尖及び三缺、五、五、五月小黄花とむ、五、出、甚光艶、実と結ぶ、形、綾んとする、春桑椹の如く、失り、大和本草、石竜芮に似く、毛、光り、花、黄、み

金盞花

時珍曰、金盞州一名長春花、金盞ハ其

河骨の花に似り、毒草、千葉の、美、可愛、花の形、長春と久、耐、夏実と結ぶ、葉の内、宛も尺、瓊曲の数枝、蟠、状、似、周憲王曰、金盞兒、花苗高、四五寸、葉初生、莖葉、似、厚、狭、莖と抱、生、莖柔、脆、莖頭、花と開、大、指、の、如、金黃色、状、盞子の如、

菊栽替

月令廣義、菊花、穀雨の時、根と堀、起、壯嫩と、割、揀、根あるもの、草

種、充、白、あ、の、亦種、活、但、其根、上、浮、起、白、翳、層、去、と、要、乾、潤、土、を、以、種、葉、実、雨、中、分、種、べ、温、泥、と、振、ふ、け、と、花、茂、早、分、と、と、霧島、紅白紫、数種を

正月標

和漢三才圖會、藥華、本、俗、標、作、枕、草

子、い、の、固、の、具、と、つ、の、埃囊抄、杜の字

ハユリハ、世俗正月ニ用之、○此木ハ、新葉生、の、後、葉落、つ、故、議、兼、名、弓、始、甲陽軍鑑、弓、始、正月七日、又和名親子草とす、

是よりて豹尾の頭と踏みて、黄幡の尾と

射へ、**陰陽曆** 黄幡の方よりめき吉、**湯殿始** **雑**

和俗 歳の始に沐浴、**抽棋** **和漢三才図会** 抽棋ハ抽の属

す、湯殿始といふ、**雪解** **雪消** 陽春の氣おあひさ

この外、突の状も袖、**氷解** 旧年の雪の消るを

子似く最大なり、**貞宣式** 解ると春と消ると冬と、分るは泥を

とまへ、ハ冬の内より雪の消ぬハあはれ、大々春氣催

さして、冬の氣の去りて、天地の理より云ふとあはれ、只打

雪消雪解といふ時、春といふ其取のありてハ冬と定む

既古式ハ解ると消ると春といふも、同じく解る

消るの詞といふつゝ、**月令** 辛春之日、東風解

凍風俗通 積氷と凌といふ氷壯あると凍といふ氷流るを漸と

といふ、氷解ると洋といふ、**月令廣義** 正月中、雨水中、氣雪散と為

氷也、**雪の絶間、雪の平** **御今** 雪のいふ

得へる、**雪** 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

雪、**雪消** 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

残雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

雪消 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

雪消 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

雪消 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

雪消 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

雪消 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

雪消 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

雪消 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

雪消 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

雪消 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

雪消 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

雪消 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

雪消 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

雪消 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

雪消 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

雪消 雪のいふ、**雪消** 雪のいふ

湯殿始

抽棋

雪解

貞宣式

月令

月令

月令

月令

月令

月令

月令

月令

月令

月令

月令

月令

月令

月令

月令

湯島天神の砥餅

見院餅と砥石の如く四角なり、神供とし、後氏子の

家にお配る、世俗湯島の砥餅と称ス、或云、戸餅と

經會 九日今十五日迄、**訓讀會** 上立賣米雀の西ある、元天台宗あり

紀事 この寺に藤原の秀衡建うしとろの堂、其二年の教經、幼年

の砌手習せしと云、寮より一説、秀衡の堂、教經の室、つゝ、

ある、処より、多う、廢類す、近世てとと再興す、と一説、

間の中納言光隆卿の家士、岸高拾、千本之地、大報恩寺と建

春ゆ

あつて此寺の普賢像の櫻より、信、普賢堂の櫻より、閻魔堂の前より、九千本釈迦堂念仏より、文永年中如輪上人と始て寺とて、実ハ恵心僧都の高弟定覚上人の所より、是釈迦堂念仏の祖、音乱名号大念仏より、一旦中絶し、二百五十年の事と徒然草にも見ゆ、以法會九日、十五日、東山智積院の僧徒を以てし、訓讀会と遺教と訓読とを以て、教ハ釈迦涅槃より入り、前ハ弟子の爲に遺戒より経、故に遺教経、雪の果、九毎年三葉の時及び多く、雪降る、故に世侶、雪の終涅槃より是なり、

三月 榆柳の火、か都寒食の余り出入、

油花のト

國経 洛陽上巳の日、婦女薺の花を以て油点し祝して、水の上へ洒ぐ若竜鳳

花卉の状をあらうとて、

夢見草

櫻の異名、蔵王、植むとくたぐりや、夢見

草あすともあらぬ、

櫻桃花

花蒙ハ蘭通志云、櫻桃の木大なるものハ、春

花ハ形止渴に似、小白花紅暈最繁密、枝は満つ其葉四尖より、振葉の如く、順狭小し細き齒及び小毛あり、

実とむさふ一枝數十顆、大り脆、櫻桃の如く、夏月熟し、珊瑚に類す、鮮堂に愛する、採て食ふ供ふ、

行春

春の過行て暮春云、○行春ハ和哥の浦より追ひ付たり、世花

め

兼三春物目刺

和漢三才圖會 竹串と以て、贈残魚の目と貫と相聯、

めづり

曝し乾く、麩に作る、勢州菓名で専ら製之、

三月めかり

抑 早春芽のまゝ出んとする、抑ハ犬子柳と、めり、抑と云人あまじ別種とあり、

み

正月供御藥

薬子 屠蘇 白散 度嶮散

○元日、三ヶ日、元旦に供え、天皇清涼殿の東廂に土御あり、御齒固の御膳と供ふ、次ハ一献と供ふ、御酒と煖め御薬と入る屠蘇之前、分る薬子に嘗しむ、帝に奉る、次ハ二献と供ふ、則ち白散に事終る、三献を供ふ、此度度嶮散に、御酒へ奉る、其儀式、江次房ホも、○薬子とハ御生氣の歳ちの童女の、嫁とる者と求めて、三朝、

春 め み

三朝 日金出

三物の連歌、三物の俳諧、三物賣

紀事云
羽連哥

俳諧のく席とむく、九京師あつて連歌の長是と花の下
と号ス又宗匠と云毎年今朝其一家中其事と玩ぶ及び子
其宗匠家集り各連哥を乞ふ其才一勺と発勺といひ
才二勺と脇と称す才三勺と作るを榮とす、近く此三勺と
三ッ物と称す今朝をを作る隨く割刺氏梓子鏝めて
市中で賣る、近世俳諧も亦然り、高き、連哥俳諧の三ッ物
と呼く街衢
と往來す、
水祝
旧冬新の妻とむく男、水と
祝す、朋友相催し酒肴を携

其家に至りて、水を祝ひあひ
箕面の富
七日今夜諸
人、指扇箕

面山の兵天に競ひ来り、堂上富とて、先天女の前、大
横三箇と置、才一才二才三と称す、その櫃の上、小孔を穿、
今夕寺僧数千枚の本札と積む、参詣の人寺僧とて已
が名と札の上記す、穴より櫃の内へ入、或ハ一枚或ハ三枚
其意あらず、各三の櫃に納り、大に運轉し、後寺僧長き
鐘を以て大に突く、突くも、突くも、ハとて、富と得ること

御薪

十五日公事振源 是八百官悉く、薪を奉
其数ハ延

三保祭

十五日延喜式神名帳 駿
河国廬原郡御穂神社

書式云々、御薪ト
書て、ろもろと云ひ

云、慶長年中より有度郡に属ス、羽車磯田の社、本社と云
る、南へ六丁余外濱の海岸あり、此社祠古へ數十町へ
と、海中三四丁なるの島ありしと、往年狂瀉衝突
し、漸く汀渚と没し、社地と退く、今此地と

羽衣の旧跡と云ふ附会之事、風土記に、羽車磯田の社も
御穂大明神の離宮あり、今に至り毎年祭祀の時、本社
の神鉾を神幸し、羽車の社より神祭より、神供ふと献ス、
○羽衣のこと、往昔この島へ天女天降し、故に羽車と云ふこと、

神主の家の傳ひあり、志々、羽衣の旧跡ハ、今の社地あり、
さうして、明らる、例祭正月十五日、十四日、十六日、参詣
の人昔より馬と云ふ、多く、牽来る、十四日、簡粥の

神事、十五日神前、於て天下太平の祈禱あり、十六日古来ハ
神輿神幸し、湯立あり、大永二年細川彈正忠孝範の
矢火より、神殿諸宇神器悉く焼失す、今ハ神供神酒の

祭祀のしほ、**水入菜**

洛の近郊畦の間水と貯へて滋養する。水入菜と号す。莖葉甚

香く味美、**未開紅**

梅の一種、色紅く、八重、花大く、つぼみたる時、紅く

故名、**兼三春物 水ぬるむ**

春陽をむく、水、三

葉芥、二月苗と生じ、一本莖生じ、莖梢に三葉と附く、今江戸の市中、鬻ぐもの、自然に生ずる処、非ず

も人の作り設る故、**二月 水間祭**、上午日、泉邸府志、水間寺縁起云、

中冬の頃よりあり、竜谷山水間寺ハ、聖武帝の勅願に依り、行基僧正、天平年

中、開闢せられたる、本尊正觀音、行基四十二歳、ふして、こきと

作る、二月初の午日と云ふ、会日とす、相傳ふ、此日歩むを運ぶ

もの、四十二歳の厄難を消除し、且福壽を得ると、**水取**、當日衆諸の人土産、草薺を求むる、

ふ部、二月堂、**水口祭**、ふ部、苗代、**三月 己日 拔**、林、韓

行の条に生つ、外傳、三月桃花水之時、鄭國之俗、三月上巳、於溱洧兩水之上

執蘭招魂、續魄、祓除不祥、則計源起周年也、魏文、

王、己日の祓、八周の世、起り魏の世より三日と用ゐる、○本

邦、やと早くあることを、す部、**御酒古草**、蔵王のやと

大の御後の条併せらるる、**代草**、桃の異名、西王母の園に、三千年に一度花咲く、桃の

春のあいみ、**水尾祭**、九日、神社啓蒙、水尾神社、丹波國東

清和天皇、**難於抄**、帝の御国忌の日と用ひす、三月九日、祭、

○祭式未詳あり、御国忌、元慶四年十二月四日あり、

生念仏、十四日、北四日迄、**雍州府志**、浄光院、壬生を、故、

春、み

お至く念仏あり、其間上人俳優とす、
世々生 在言は是衆人の雖と
こころんが爲く、是の融通念仏の金流あり、
難於抄

この俳優を用る、仮面ハ、
士生祭
通俗志 士生念仏の
定朝ハ作、二面ハ、
並記せしむる

別ふ祭あり、鎮守
御影供
北一日○弘法大師の御影供
祭ハ五月十三日あり、
あ、永和二年三月廿一日入

定、今に至迄、此日真言宗の寺院、大師の像を安置
御影供ハ修ス、就中御室東寺ハ詰るもの多シ
葉

荷竹
和漢三才圖會 蓋の莖葉及竹ハ似く、葉嫩
時、莖ハ亦嫩ハ、俗ハ茗荷竹と称ス、
水落

花
時珍曰、芙蓉三月葉と生シ、水ハ貼テ、荷葉より大ニ皺紋
親の如ク、盛頰ハ、
其莖長サ丈余ハ至ル、中ハ孔あり、絲ハ、蠟者皮と剥テ食ハ、

五六月紫花と生テ、花開ク日ハ向テ、苞と結テ、外ハ青キ刺
あり、蠟刺及ビ衆縁の如ク、花苞頭ハ、雞喙蟬喙の如ク、
多識篇 水沢の中ハ生テ、俗ハ雞頭盤ト云、或ハ鬼蓮ト云、此の五

六月花と開ク、
和名抄 芙蓉 和名三豆布木
○新式等ハ三月ハ、ス據あり考ム

し 正月

四方拜
元日寅の一刻ハ、天皇清涼殿の東廂ハ於テ
天地四方と拜シ、
臣下ハ私ノ庭

拜ス、
公事根源 属星と唱ヘ、天地四方ハ陵ヲ拜シ、
年災とト拂ハ、宝祚
是ハ元日の節会ハ中務省

を、折テ、
諸司奏
七曜の御曆と奉テ、宮内省

永操腹赤の御贄と奉テ、其儀ハ、江次ホホの諸書あり、
是元日の節会ハ中務省、陰陽寮と率あり、

七曜御曆
奉テ、
公事根源 七曜の御曆ハ、日月火水
木金土の七曜を、
千門淑氣新と詩

作ス、
試筆 試毫
吉書 羅山文集 我朝
の氣を、
書初 年甫ハ字と写

す、
試筆 試毫
試毫、或ハ試春と称ス、皆然、
椒 柏酒 椒酒

拍ハ、
仙菓ハ、風土記 元日長幼ハ、衣冠と正シ、次と以
拜賀椒酒と進ミ、桃湯及ビ拍果酒を飲む、
○椒觴 椒盃 椒

春 し

歲時記 商人ある清湖と過る清

如願

湖君を見ゆ君問所須有人教こ

酒と飲の器也

但如願を乞へば君許之果しく一碑を得る如願ハ即

其名を商求る所あり悲能くく致す後正旦ハ如願

晚く起るより商人多く撻つ走く糞壤の中に入り

見えず今人正旦細繩を以て偶人と繋ぎ糞掃の中へ投

今如願と云五雜俎 閩中の俗糞土と除ふ初五日に至る

輦み野地に至る石を取返す室と得るると云則古人

如願と喚ぶ春盤 生菜 齊人月令 立春日生菜を食

の意と云 戴春燕 新迎の意と云立春日

春餅生菜と以て相 饋送る春盤と云 西京雜記 高祖宮中正月立春池邊ふ出く監濯く蓬

枝 餅を食ひ以て故邪を去る五雜俎 謝肇淛曰今人

三月上巳といひく正 注蓮の内 内余也 菰菜

月の上辰をもちんべ 穂長 本草其根一本あり衆技をも貫く故ハ鳳尾と

裏白 名づく根と貫衆と云 和漢三才圖會 菰ハ菰矢ハ菰

脊み似く葉柔く薄く面青く背白く四時枯す以て元

且嘉祝の物飾る一説ニ菰ハまゝい苺ハまゝ苺ハ長延お

るの故齡のまじり七日と云 東方朔占書 一日と雞と

延る義と云 人日 二日と狗と三日を豕と四日と羊

と五日と牛と六日と馬と 真言院御修法

七日を人といハ日を殺す 宿直人 〇八日十四日迄被行之後七日之御修法是之帝王編年

記 永和元年始く真言院と宮中へ置鎮護國家五穀豐饒

の爲毎年一七日と限り修法せむ 公事根源 こと金剛界

ありバ 明年胎藏界年々ふまゝく修法せむ 拾芥抄

真言院ハ八省の北あり 〇宿直人 徒然草 後七日の阿闍

梨武者とあつむることいつとやぬき人ふあひあふる宿

直人といふこととあふる共とあつむることとあふるぬ

漢語抄 晝動る直といハ夜教るを宿と云合せり

止乃伊 叙位 五日 公事根源 天智天皇十四年正月ハ諸王

と云 諸臣ハ爵位と云ふことと云ハ叙位と云ハ

六日と侍りしと天徳五年より五日ヲ始て叙儀あり是ハ諸臣

春 し

の年勞と奏し、位
十四日年越
越と称し相祝ふ

上元日
花燈の夕〇正月十五日と上元といひ七月十五日を
中元といひ十月十五日と下元と云、〇花燈の夕とハ

唐の世、上元の夜、燈燭と列名游觀する云、五雜俎
天下の上元、燈燭の盛であること、閩中ふまゝなるものなり

子頭の神事
十六日〇伊勢國、渡会郡、山田郷ふ祭ると云
七社、或ハ八社、牛頭の社中島、大社一の、藤の社木町

太神宮、今村の社高柳、坂の社坂の、苗の社高倉山の、箕曲の社其、是
御山内、今村の社町、以上八社、一社、各の獅子頭と合せてハあり、

七社、瀬木の社吹上、以上八社、一社、各の獅子頭と合せてハあり、
以內一頭、虚空より降る云々、残り七ツハ、常政長官と云神職

の作し、祭の日、ハケ野の町と氏子、竟の如く長き獅子と出、
松明と云、舞へ、土人傳、云、人皇百五代後柏原院、永正の末

飢饉疫癘多かりしを、獅子頭と作り、山田上の在家より、次
き下町の町へ追やりしを、其頭と、町この疫神を祝祭りて、

産神と崇む、毎年正月月中旬、社より取出して、鼓吹し、
舞あり、氏子の家々、くちをのとして、鏡餅松明、或ハ十二

灯と出、十五日終夜廻りて、十六日、小田橋の上より、刀と

持て、惡神と切排ふ体と云、即座に獅子頭と舞衣あり、
押つて其社へ納め入る、十五日より十七日までと云る人

下崩
月令是月也、天氣下降、地氣
上崩、天地和同、草木萌動、
春、鶯轉

は、部、万春樂、白魚
春魚、鯨、殘魚、王餘魚、銀魚、和漢三
の金小出す、才、俗云白魚、江海の交を生ず、立春の

初、出入と賞す、二三月、腹小あ、味稍劣なり、生、
青色と帶、水と離る、白く、煮る、白く、潔白あり、下畧

兼三春物、ち、玉姫
秘藏抄霞
隨書、割、鎌が父
蜺と嗜む、呼ぶ

扁螺と云、文字集畧、蜺貝、蛤、
似て小、黒色、字又蜺、作、
本、草、一名、垂、絲、柳

云、天の雨、あ、を、す、種、う、づ、を、と、知、る、氣、起、り、て、以、て、應、ず、
又霜雪を負て、濁き、及、び、木、の、聖、なる、もの、故、字、聖、子、
从、ふ、又、雨、師、と、名、く、或、ハ、貝、雨、と、得、る、と、云、ハ、垂、と、一、絲、の、如、

く、幹、弱、く、枝、を、と、持、む、生、と、易、く、赤、皮、細、葉、絲、の、如、
品川海苔、の、部、海、苔、
白藻、の、石、上、生、ず、叢、生、て、枝、葉

春
し

あつ状ち抑眼の如し、鬚長きもの
尺余、白色に醋を以て浸して食ふ

二月 常樂會

十五

拾芥抄 二月十五日、南都興福寺常樂會、紀事 今、東金堂

間浮担金の釈迦像あり、その扉面は涅槃像を相傳ふ、金

聖に画く所なり、今日其扉を開く、涅槃經、常樂我淨四德

波羅蜜、○涅槃會、常樂會同くこと、持明四天王寺にて

涅槃會と 積塔

十六日 紀事 二月十六日盲人檢校以下
衆分お至る迄、各京高倉綾の小路

清聚庵ふあり、光孝天皇の皇子、雨夜の御子の為、積塔
會と修す、宿忌の頭人大檢校經管と設く、座上は守替神の画
像を置く、衆盲を導き拜し、其後大瓶の酒をくみ盲人六派
の中は四人と云々、平家と説く、守替神は日吉一社の中、十
社と取り祭之、俗、守替神と誤り、病神と称す、以画幅、常ニ
檢校の宅に安置す、其人死すは次の檢校おと奪す、盲
人琵琶を彈す、故に、妙音母才天と崇む、盲人平家を
説く、こゝろ生仏あり、中 器相傳ふ、雨夜の皇子盲
り、故に、衆盲と惣と云々、明日、皇子の忌日、これお
り、衆盲、心經を誦し、琵琶を彈して、宿忌を修す、○

十梅曰、雨夜の皇子薨して後、諸の座頭墓
毎年石を積り、弔ひ祀り、遺風あり

聖靈會

止言、持明東生郡四天王寺聖靈會と、聖德太子の闍闍を、
聖靈院と、六時堂ふり、その会式、紀事 二月廿二日太子像

并舍利堂の兩邊に移し、六時堂に安置し、舍利二舍
利の十二坊の僧徒と合せ、堂前の舞臺に於て大法事あり、

寺中は一龍と、舍利といひ、二と二の舍利と云、是舍利の預る
やうく、當寺、年の法會の中、この會と云く、一と一、ハト云

時宗踊念仏

彼岸の五条の西御影堂より、こゝろ修す、遍
上人才二世應阿、自作の弥陀の像を本尊とし、

毎年二季の彼岸中、こゝろ念仏を中世以來尼と傳へ、寺中にお
崩れ製して、これと四方に傳ふ、世御影堂崩と稱す、是、寺の新舊

社日

高書 社日、土地主神也、按、今立春の後、五の戌日と春社と
立春の後、五の戌日と秋社と、社と主る神と句芒と云

月令 二月之節、擇元日、命民社、郡、县、曰社、稷と祭

ると云、春事興るが故に祀り、農祥と祈る、元日と、春分の
前後の近き成日

社翁雨

提要録 社公社母田水と食大
故社日雨あり、これと社翁雨水

治龍草酒

石林詩話世天社日酒

鹿角酒

鹿角

解仲冬

衡波傳鹿生三年其角

秋堅く冬脱入春角解

大止

蛇蛇

三月上巳

俗事

一貫上六指初三月初九日

巳と建と除日

陽季月十除之辰無大無小

於水陽○所謂上巳の秋除の辰

胃索ゆき

高木上懸け

明皇呼て半仙戯

以て輕趨と習ふ

白酒

本朝食鑑

俗三月三日節物

來て蛤蜊と拾ふ

五日節事

一説半頭天皇

覺大師唐より帰朝

順の峯入

雍州府志

の峯へし

落す水の色も桃隣

石楠花

本草石間陽

堊桃

赤白二種八重

日月挑

沙部源平
挑の条に出

沉丁花

和漢三才圖會瑞香俗云沉丁花按瑞香疑

く、^レ此山^ノ樊^ノ類^ニ、^レふ云^ニ沉^ニ丁^ノ花^ノ、^レ花^ヲと開^ク、高^ニ

その四五尺枝幹皮を剥き、葉ハ齒を切り、梔子葉及び揚梅の

葉の如し、春花と著く、丁香の如く、紫色、既ニ開く時

四出外、淡紫、内白、十余朵、攢簇、あつままり、其香烈、きく、そげて、おん沉香。

丁香相兼ふりある如し故ニ俗子ふし沉し丁香と云、五雜俎ござそ相傳あひつたふ庐山りやうざん

の一比丘、岩下、ひたね昼寐、いさ異香を聞、さか覚くと身をも尋、

此花と得る故に睡香と名く、後好事のものに以て祥香とす、改めて

瑞香 去冬入冬
高麗菊 和漢三才圖會俗云高麗菊春菊春

とす、
春菊
花と関く菊に似たり故に名く同蒿

食之脆義之然おもひより百菊ひゃくきくの開ひらくくさる時之故

花と賞しく蔬とすずくび蒔く後おのづか秋ふと生ズ六七月

月令孟夏之月、序妃齋戒親

新桑摘ササキ東郷躬桑禁婦女勸蠶事ササキ

東嶽山清水堂

其樹葉 くまうくま、秋色櫻 のうら井のうら

一名大般若櫻ととと、小畑町菓子屋の娘秋おちあきと云ふもの、

三歳の時花見ふ来ふ、井のまゝの掬ちがひ酒の酔秋色

春
し

かゝるいふやうに此名を秋色ハ秋ガ俳名
其角の門人あり、此の人の脛をせり



急部ハ
供也



正月 氷掇

延喜式宮内省式抄氷掇の奏主水司奏之此司ハ
宮内省属ス氷掇トハ氷室の氷の厚薄ヲ決

瓦石を以て其掇とて奏之公事根源 水の多きハ聖代の
驗ハ氷のぬるハ凶年とて侍まハ氷の御祈とて大法秘法と行

節会ニあつても御見合

閑豆

閑牛房

箕木牛房

紀事 水煮の大豆是とて豆とて閑牛房煮すハ生の牛

房ハ箕木の如くこきと盛る仍て箕木牛房とて又むこき牛

房ハ雨種しハ土器ハ

人と帳子貼す

荆楚歲時記
人日綵と剪カ

遺ハ新年旧を改め新しとてふまてハ意ハ取る云々
頭髻ハ戴ハ又或は相

彈初

琴三絃鼓弓の類ハ彈ト云
年ハ始ハ其云々と試ト云々

むめ始

俳諧歳
時記云

年山紀聞云資兼王日記明應十年云諸社之遙拜之後三献
有之次省經次御コワ次虎目始海人藻草
中御門朝方の子息
忠明院僧正宣中作

公家御膳飯者強飯也執柄家等如此強飯全ハ分畧儀也但

人ハ依好惡用之強飯時飯湯也而近代強飯之時ハ云々

云々ハ召不叶理也為章句和名抄ハ編糲和名比女或説

云非米粥而非粥之義也とありてその次ハ別ハ粥と云ハ和名

之由加由薄糜也とありハ編糲ハむすハ粥とありハ替

むめりハ粥とありハ編糲を食ハむめり云々

の諸説むめ始の事ハハと解ハ足る

毘沙門功德經

元日

難談抄古老傳ハ往古ハ元朝寅の時ハ天神入禁裡日花門の外ハ

赤くハ毘沙門經の文ハ訓読ハ唱ハ祝の義とせハ故ハ此音の

黨類とて唱文師と称ス又元日毎ハ風ハ候す故風の者ハ

号ス風の字音志久世誤ハ名ハ風と宿ハ音近ハ故ハ

民家トハ元朝未明ハ門ハ来ハ毘沙門經ハ

訓読ハ中古迄侍リハ當世絶ハ沙汰也

常陸帯の

神事

十日神社敬蒙鹿島の神社常陸國鹿島郡ハ在ハ宮記

云武甕槌神ハ〇年中祭礼ハ十五度ハ中ハ常陸帯の

祭あり其日男女の名ト布帯ハ書記ハ神前ハ置社人ハ

取授ハ相見ハ婚姻と定ム正月十日の祭是ハ奥浅抄云々

陸奥の神祇
あかし、意あかし、
救岡の御齋
十五日 神社啓蒙 救岡社ハ
河内国河内郡在、社記云

祭所の神座、一殿天子星命、方二殿鶉鷄草菅不合尊、

三殿大國主神、第四殿天照太神、又若宮一座、天兒皇命の子。

押雲命之正月十五日ト由祭當日神供所おむけ小豆粥あづきかと煮

竈の上ニ寸竹管を掛け百穀を納署し蒸氣の強弱よりて

年教言_出と_有之當社永の神事_ハ、_ハ神主水蓮氏の外杜

其釜の上五十四束の竹を五寸づゝ小切て、管と

一、釣置、十五日早朝、其膳と神供と、五穀成産の祝詞

あ久五十四品の種物と、一管毎に書付く、釜中の粥に浸し、そ

一、管と割く管中の隙の多少によりて、
土麦の色どりを

耕作の吉凶を卜ひ、森詰の諸人に告知す。

と部三徳打
兼三春物
人來鳥
鶯と云々

古今詩話

梅の花見ふとも来つゝうぐふとの
雲雀 ハナトリ
三才論会 三才論會
告天子 イハバ

[illegible]

海上艸草の中多く有之黎明討ふ遇天晴則日飛旦

底雀似之大、頭背黛色黑斑子也、鮮明子也、五、四天子梅葉本盡金大

眼の傍頷白く胸腹灰色脛脚細く長くして距あり雲雀

膏ぢり 瘦やせと云、諺に、瘦やせと云、
あか鳥 雲雀の巢を秘藏

望雲雀小譬より是にそれより
[抄] 春の野に柳ふ

鳥を食ふ。霞の
鹿尾菜
本草東南の海中石匠の間ニ生ず

甲子物語
大日鐵線の如
和名 比須木毛

干鰯 ヒラメ 乾鰯魚也

白きものと上り、黄と帶るものと次と、廿二く、角カと好む

との常嗜と云、多く食ふ時、其力倍すと、
多識篇 黃顙魚 如名
名 黄顙魚

三月
彼岸
時正
竜樹菩薩天正驗記
欲界六天中大夜拏

允率の中 大城あり、名て中陽院（中陽院）と云ふ中

首羅天尊七上首、八神集大梵天王、大藏神、乃至玉女、道

春
乙

祖神等の人中天上の冥官冥衆集会し、一切の善惡と注す、
 天尊降ると八神の教勅し、三卷の帛帳を持し、三復八校して
 天尊に献ず、天尊覽了て善と證さるゝ爲る空印と指し、惡帳
 と證さるゝ爲る火傳印と指す、処中善と證さるゝ爲る人、非空非
 傳の印を指す、彼八神へ帝釈、閻王、天大將軍、天一行役、司命司祿、
 俱生神、問彼天尊何の由ある、三月と以て天より降り、正天
 地の神を召や、答曰、阿迦尼吒天へ、自在尊の所居、宮殿の前、高樹
 あり、天生樹と名く、形は須呂の如し、春華とひく、七日きて散る、
 七葉七色、青黄赤白黑紫翠を、秋葉と結ぶ、七日きて落し、葉七
 色上の如し、花の開くとき、中陽院に移り、落葉と見て本宮へ
 還る、空を如く、法を道理然らしむ、所を彼岸功徳成就經、疾く仏
 道の成ぜ、八堂あり、三月八月七日晝夜同時ありて、一切の諸仏三
 世の諸尊、及び無數の億菩薩、說法し、衆生を授けて衆とす、
 金剛疏生死、此岸より、涅槃へ彼岸より、煩惱の中流よりとす、
 卽般若の一心三觀より、生死の彼岸へ、煩惱の中流より、涅槃の
 彼岸へ到る、
 五門和尚筆記 ○時正、彼岸の中日と云、中、八年
 中の晝夜少くも長短あり、比良八講
 北四日〇八講の式、祇園
 の御八講の來日記より、

犯事 江島比良大明神社、古、今日比叡山の夜徒、法花八講と修す
 今に至る比良の八講と稱す、此日湖上多く風烈、故に船急事多
 らむ、
 引鶴、引鴨 老翁湖上、引ハ帰る、雀鴨のうゑ、
 出さず、
 引鶴、引鴨 冬より春まで多く集り居て、春ハ引
 びて、
 統猿義 引鳥の中より交る、田螺取、支取、この引鳥

ともあり、意、半時庵其外より、
 部、引残る雀とあり、
 合さく考へる、
 一重櫻 一重桜ハ、春分の後花となり、
 彼岸桜ハ、十日より遅く、又ハ重

櫻先より十日より、
 二重と以て、本々、故ふ、櫻との、
 彼岸櫻 小白草、春分の後、彼岸より
 開き、余の花より先、
 三月 雛遊

雛祭 雛飾 犯事 三月三日良辰の兒女、紙偶人と製し、是を
 立雛、雛と称し、玩之、このハ元、贖物の義あり、
 及ぶ、
 〇古ハ女兒の遊び、三月より、
 源氏物語

贖物の人形より、
 姫挑 堀川次郎百首 春霞をうかぶ、
 道のの、
 花

絳桃

○俳挑八重みく深紅ちまものゝ天和赤草拾
府志云、挑花千葉みく大ニ紅ちまものゝで、俳挑

大和本草
松江

比良祭

十五日○江別比良村の祭、神興二基、山三十禪
師、飛梅天神の両社、十禪師八、南比良村の鎮守、天

北比良村の鎮守と、兩神の社一処を、村は南北十余町とへびつくと
南小松村の鎮守へ、比良、北小松村の鎮守へ十禪師天神を合せし、兩
神三社の神典三基、同月同日祭之と、比良祭と称へ、
人麿忌

人
誓
忌

十八日○吉、官家御影供と修ス、今おいて、和哥と好む人多くこの
日哥会と修ス、南都御本寺の塔と、或ハ、和州初瀬の近処より、
る哥塚、是人丸の墳墓と、洛西鳴滝の妙光寺、人丸堂あり、本像
ハ傳ヘ、俊頼の作る処と、又播磨明石と、人丸の御影供と修ス、
右大倉谷社あり、人丸終焉の地ハ、石見國に、神初ハ高角の
山上より、世ニ高津と称ス、この祭礼中絶々々、御影供の義
邪、元帝の御宇、及、勅々々、絶々々と興一
魔々々と舉々、徒一位を授けり、と云々、
引残る

引殘

鶴

二月の部引雀の処ニ記ヌ如ク二月お引ユル
雀ハ三月より引のころたるをリヤル

正月

餅鏡

は部、漸固
の条も出ず

兼三春物百千鳥

八雲御抄

萬葉集
 我門之撰實名利喫百十
 鳥千鳥者雖來君曾不來座
 古今
 百十鳥さつて春とつてふ
 和漢三才金海温代雲

海雲

俗ニ海雲の二字と用ふ状

乱縁の如く色青く黒く、柔滑^{なめ}り、長数尺、石上ニ生じ、水上ニ浮ぶ。
 是と云々云々滑り得^えり、鮑^{あひだのし}空貝を用て云々云々。阿
 易^イ鳴^イ戸^イ、泉州岸和田、及び對洲の産、肥太^イく
 佳^イき、鹽^イ醋^イみ和^イりて食ふ。

二月

鯉花煎

諸子魚

ろくろを、湖水の小魚に、長さ三寸と限らず、鱗ふたありて、美魚に、其味脂多し、湖水佳品の内、江西、坂

本ハモロコ川と云々此魚を冬ノ故ふ名とす大和本草ニ云明ホモロコ
コアリ油身魚と云と記ヤリアラハ其鱗龍の毛に似ク鮎魚と
ワケ大サ七八寸其味甚佳品と云是モロコトハ大ニ異シ大和本
草の説ナク又モロコハ黄鰐魚あるべしと云ハ是もナク

黄鯛魚ハミナシ江州の俗ワカミ大魚との七八寸是る湖水ニ
 甚多一モロハ三寸ニミズバ大小あり又柳ミナシ一種は活法
 の書却葉魚と出せしもの是其ミナシ形モロコミナシまたミナシ
 春黒く腹は黒筋あり又柳の葉の如し九此の湖水ニミナシ
 て早春子ミナシ他魚ナシミナシ勝れもナシ依て
 衆子此魚ナシ他魚ナシミナシ江湖の産魚ニ

三月挑

の酒

蘇頌赤經太清本草水云酒挑花と漬くミナシ飲む
 百病と除く顔色と益す千金方三月三日挑花一斗一升とと
 御酒古草御酒

井花水三升、麴六升、米六斗、ミナシミナシ
 好く炊く酒ミナシミナシ飲むミナシ

み部 桃花

事類賦其花或ハ仙と成て毒と益ミナシ或ハ鬼ミナシ
 注ミナシ邪と祛ハミナシ或ハ后妃の徳ミナシ或ハ嬖寵の華ミナシ

和漢三才圖會或書云伊特諾尊桃子三箇と採て大勢
 と撃つ悪卒皆去依て挑樹と樹ミナシ名ミナシ援成神富命と云

絳挑、緋挑、碧挑、金銀挑、源平挑、江戸挑、早挑、冬挑、一歳
 挑、毛挑、細挑、西王母挑、日月挑、三千世草、春の種葉異名ホ

各頭字の部
 木蓮花

木蓮花

天和本草 国俗紫きと木蓮花と云
 花の色思く白きと白木蓮と云白花と

西陽雜俎橘葉木蓮花葉ハ辛夷に似て
 花ハ蓮花に似たり冬蒼き三月ミナシミナシ

正月

井花水

部若水 千壽万歳 紀事大和国窪田等
 尾の西村千壽万歳

西座あり太夫所司の庭ミナシ来て鼓舞ス窪田等尾の西村ミナシ上南
 都西南ミナシ相去ミナシ三里あり此内西流あり則窪田等尾是ミナシ

窪田太夫等尾太夫左部 煎餅と繫 部天穿 節振
 右部ミナシ准ミナシこれと称ス 余ミナシ

舞 節小袖

女節 紀事京師の俗元日ハ晦日ミナシ至るミナシ親
 朝節 戚朋友互ニ酒食と設け饗應ス是ミナシ

節ミナシと云節供の下器ミナシ節小袖 生米 部春盤
 准ミナシ知ヘミナシ朝夕ハ饗應の時刻と云 余ミナシ

兼三春物 芥

本朝食鑑 源順曰水芥ニ水英水旱及ハ
 赤白の二種ミナシ水芥ハ水中生ミナシ根多ク單芥

ハ平地ミナシ生ミナシ根少ハ赤芥ハ味惡クミナシ用ハミナシ白芥ハ味敦ホ
 ミナシ常用ス又ハ波沢田川ミナシ多クミナシ或ハ水田水圃ミナシミナシと云
 養ミナシミナシ四時ミナシミナシ其莖葉錢ミナシ中ミナシ其根細ク
 長ク肥ミナシミナシハ素麴の如シ柔ホ脆ク其氣ホ芬芳愛ス

李泌傳二月朔日民間

二月生子と献す

白花と開く、の種と盛り、相問ひ遺る、号して生子と献す、問里宣春酒を醸し、句芒神と祭り、豊年と祈る、百官農書と進み、以て奉り、上巳と九日と三令節とす、
釋奠 上丁日、公事根源、是八年の二、度二月と八月とふき、
純果地、文武天皇

太室元年二月丁巳始て秋奠を行ふ、
礼記玉制、菜と釈と幣と奠

左傳、年廻、の影と祀る、上卿ハ必納言、是章博士、孝短、礼記、毛詩、尚書、論語、周易、
浅間祭、
名目のも存て、
浅間祭、
祭祀、朝菜と撰り、八十三度あり、今ハ

名目のも存て、
浅間祭、
祭祀、朝菜と撰り、八十三度あり、今ハ
名目のも存て、
浅間祭、
祭祀、朝菜と撰り、八十三度あり、今ハ
名目のも存て、
浅間祭、
祭祀、朝菜と撰り、八十三度あり、今ハ

其並葉貫、
三月青精飯、
食の奈

西王母、
挑の一植、
泉涌

寺開山忌、
洛の東山、
俊祐字ハ不可棄、肥の後、
阿妹往く

原氏、
祥児とす、
四月八宋、
嘉祿元年、
嘉祿三年、
高宗永隆三年、
觀堂、
智恩院中、
百万遍、
南、
堂前、

善通寺忌、
唐、
終南山、

千本念仏、
朱蓮通の北、
の限舟里の

堂前、
普賢像、
期とす、
寺僧、
折て、
諸司

代^{だい}献^{けん}で、則^{すなは}米^{こめ}三^{さん}石^し五^ご斗^とと^とふ、以^も之^を七^{しち}日^{にち}念^{ねん}仏^{ぶつ}の料^{りょう}と^と一^{いつ}説^{せつ}、此^こ法^{ぽう}事^じ
ハ元^{げん}刑^{けい}人^{にん}の爲^{ため}と^と修^{しゆ}ス故^{ゆゑ}ニ諸^{しよ}司^し代^{だい}より施^せ米^{こめ}を^を是^{こゝ}追^お薦^{せん}の爲^{ため}
こゝより、開^{かい}基^き定^{てい}覺^{かく}上^{じやう}人^{にん}鐘^{しゆ}の銘^{めい}頭^{とう}然^{ぜん}、定^{てい}覺^{かく}のこゝハ遺^い教^{きやう}
徑^{けい}の条^{じょう}に、此^こ処^こと千^{せん}本^{ぽん}と^とこゝハ筐^{かう}の窟^{くつ}の日^{にち}藏^{ざう}上^{じやう}人^{にん}冥^{めい}に^に至^{いた}る約^{やく}
すゝことと、其^そ爲^{ため}ニ千^{せん}本^{ぽん}の卒^そ都^と婆^ばと舟^{しゆ}里^り山^{さん}
立^たて供^く養^{やう}と修^{しゆ}す、此^こ処^こ舟^{しゆ}里^りニつゝ依^よて名^なハ
仙^{せん}室^{しつ}菰^こ 千 梅

今州花肆ふあるもの、花ハ黄アリ、豆の花の如ハ、葉
 ハ野蕨に似てヤリ、本草菜蔬に載る、苜蓿に似る、但
 ちやハ滑菜の類なり、
 夏秋花をひらくともとの異、
 正月 住吉の御弓
 日

紀事追加 正月十二日佳吉の御弓、其式社人正鵠に准へ、尺三寸の
的と主く、立合をせと射、勝負と論ずるあらず、神事とし、
今日叅詣の諸人竹馬と昆布と買て土産く、
又坂の魚、屋煎餅とも、名物あり、各これと買ふ、
鈴子さ

す
た部、鳴鳥
狩の糸、
兼三春物
洲蛤
指西陸吉の洲、
多し、漁者よりて売

と捨て、其肉と并な盛もりて市いちをうる。醋すを和あへて是こを脰しとす。
故ゆゑ三洲さんしゅう蛤か共醋蛤すゐかとも云く、枳し嘉か大坂おおいさかの主人専せんら正月賞しょうして食く之。

すゝは
大和木艸 春月先花と生ず、草の如く、嫩き時味辛く、佳蔬とす。
別ニ莖葉と生ず、萩菜と名く、杉の似たり、漢名ワサビと評あり、人
すゝのすゝと
一説ニ春の野の焼く跡に生ず、墨黒の畧と云ふ、又
すゝのすゝと
一説ニ春の野の焼く跡に生ず、墨黒の畧と云ふ、又
すゝのすゝと
一説ニ春の野の焼く跡に生ず、墨黒の畧と云ふ、又

の子^こ
 は、部^ぶ、孕^こ雀^{せき}
 の糸^{いと}を出す
 三月^{さんげつ}
 須^す廣^{ひろ}の御^ご稜^{りやう}
 源^{げん}氏^し物^{ぶつ}語^ご須^す六^{ろく}卷^{くわん}やう^{よう}ん

已の日、云々大^レ海^ノ原へ来^ルる^ニて、云々物ハ多^ク也。
○是ハ源氏、湏^レ六^ノ左^ノ辻の時、三月の朔日、已の日也。浦辺に舟中人形
と立^スる^ニ、拔^クの具と有^リ、拔除^ス。
しるふあれば、酒^ノの拔^クとす。
李花
葉五出、白色。和漢草木

会形も桃に似て、味酸とす。
 帯ぶ、故に酸桃と称す。
 藕粉の花
 宗奭曰、春紫花とむく、甚
 細碎、共に採るなり。花葩て

葉少の時珍曰、海島ニ蘼枋國有、其地此木を産ス故ニ名づ、和漢
三才圖會、倭ニ蘼枋の木あり、樹皮濃灰より白色、葉薄く光あり、但し
葉莖長し、三月花あり、淡紫、横（横手）生ず、大に麥粒（麦粒）なり、莢（莢）と結ぶ
藤の子に似て、小く中細く、子も春子と種をば生ず、然るも

物 春風

灸の点ゆめよと寒 春の草 いろいろの
春の風 許六 名もむつじ

や春の 春の海 松蔭や旭見ふや 春の川 花
散

草荷会、 春の海 不卜、 春の月 山の端とちりり

てううめる体、雪さえて水 春の月 白あり春の月

まゝうし休まじむべし、 春の月 白あり春の月

魯 春の水 あり春の水舟泉 春の野 春の野

町、 春の水 あり春の水舟泉 春の野 春の野

ハむしうの敷 春の日 春の日の念佛のる 春の

あやせ 沾徳、 春の日 春の日の念佛のる 春の

夜 春の夜ふ誰り初 春の雪 春の雪 文考、

瀬の堂竈 曾良、 春の雪 春の雪 文考、

春の山 月令博物筌 春ハ草木もさう 春の

えて山の景色面白き事あり、 春の

暮 蚊ひらふふはらまぬ 二月 初虹 月令章句

夜をて春の暮重五、 夫 芸湯和

せむ 婚姻序を失ふ即此氣を生じ、虹わらう、青赤

の色あり、常小陰雲に依て日衝は見ゆる雲あるま

春 追ははとちりを

國の生ずるハ紫荆花ハ、シムロウ條色と染るものハ、蕪材ハ此の如く生ずるものと似るが、俳諧ハナニ董ナニ蕪菜曰董菜ハ野に生ズ人の種タネハ
 処々多く紫荆花ふらん、
 董ナニ蕪菜ハ野に生ズ人の種タネハ
 処々多く紫荆花ふらん、
 董ナニ蕪菜ハ野に生ズ人の種タネハ

紫之 **和名抄** 菫菜 和名 湏美礼 スミ 天和本艸 京都にて相撲取と

云、筑紫の馬と云、小児其花鑑あり、
と西花相交へ

け、引く、戯とす、相撲の形に似て、却て相撲取と云、草八別

多。若水曰：紫花地丁，别号董冬菜。故中国俗，董菜与丁。

此と誤り
 称ス董菜
 八別之云

○壺董、つ部子注せり、

追加
は正月
初鳥
初鳥三羽
馬明
初

初そらとら
千五百番哥合
今朝よりハ雪ゆきげの雲うみのお
とをとてみどりふりける春はるの初はつ空そら通具とく〇

初空や鳥とのせよ
牛の鞍、嵐雲、
初風
壺栗
の嶋の空せ掛 塔山、
花

の春 そふ
花の咲春とふ義あり○誰人の薦
著ていふは花の春 芭蕉
兼三春

物ものの春風はるかぜ
 春の風 許六
 春の草はるぐさ
 名もむつこ

や春の
草荷兮、
春の海
松蔭や旭見ふや
く春の海不卜、
春の川
花散

そろうめる体、雪きえて水
まゝうし体をよむべし、
春の月 つき 山の端とちりり
あり春の月

魯 ろ
春の水 はるのすい
あり春の水舟泉 うつくしうねうき
春の野 はるのの
春の野 はるのの
やまか

ハむゝろの敷しき
春もちの日
ひ春の日の念佛にぶつ
さ野寺のうらでら尚白
春もちの

夜よ 春はるの夜ふ誰り初はつ
春はるの雪ゆき
春はるの雪ゆき 文考、
春はるの雪ゆき 文考、

春の山 はるのやま
月令博物荃 月令博物荃 春ハ草木りこり
えて山の景色面白き事あり、
春の はる

暮る 蚊あひとうふはらうきめ
夜よえで春はるの暮ゆふ重かさ五
二月 初はつ虹に
夫そ去き易やす和わ 月つき令しやう章しやう句く

せむ婚姻序を失ふ即此氣を生む虹ありて青赤
の色あり常小陰雲に依て日衝に見え雲あまふ

春 追はほはあり

見^みま^まと^と輒^つ日^ひと相^あ互^ひふ^ふこ^こ

ほ 正月 千蕪 干

日西^{ひし}と以^もて東方^{とうほう}ふ見^みつ^つふ

と 正月 年立

大根 冬の末の部、新千蕪、新千大根の条は注しより

年の再びくり来^き 年の花^{はな} 花富士はは

め^める^る姿^{すがた} **ち** 正月 千々の春

格物論 龍春分^{りゅうしゅんぶん} ち^ち 千々^{ちぢ}の春^{はる} 虚栗^{こり} 雀^{すずめ}さも

千々の春^{ちぢのはる} **り** 二月 龍登天

格物論 龍春分^{りゅうしゅんぶん} ち^ち 千々^{ちぢ}の春^{はる} 虚栗^{こり} 雀^{すずめ}さも

其角^{そのかく} **を** 正月 鬼打木

月令博物筌大^{げつれいぶつたつだい} 賀玉^{かぎ}の木^{のき}ともいふ

分^{ぶん}ふ^ふく^く **を** 正月 鬼打木

月令博物筌大^{げつれいぶつたつだい} 賀玉^{かぎ}の木^{のき}ともいふ

門松^{かどまつ}のうげの木^{のき}、年木^{としぎ}とて、正月始^{はじ}ふ疵^{きず}あき木^きとて、

未^みは葉^はどのう^う、門^{かど}はよせう^{せう}けておく^{おく}あり、鬼打^{おにうち}拂^{はら}ふ未^み

とふ^とふ^ふとあて^{あて}、ふ^ふ陰^{かげ} 兼三春物 朧夜

月夜^{げつや}とて

い^い、朧^{ろう}夜^やとむり^りい^いふ^ふあ^あり^りい^いく^く、青藍^{せいらん}按^{あん}む^むふ^ふ和^わ

奇^き者^{しや}流^{りゅう}の説^{せつ}い^いふ^ふど^ど、俳諧^{はいかい}う^うて^てハ^ハ子^こ細^こあ^ある^るべ^べく^く、既^いふ^ふ作^{さく}

例多^{れいおほ}一^{いつ} 曠野^{くわうや} 辛寄^{しんき}の松^{のまつ}ハ花^{はな}より朧^{ろう}あ^あく^く芭蕉^{ばしやう}

兼三 朧夜^{ろうや} 月夜^{げつや}とて

正月 かみ草

大内^{だいうち}あて^{あて}餅^{もち}の上^{のうへ}あ^あく^く大根^{だいこん}とい

早^{はや}き^きく^くみ^み草^{くさ}やう^{やう}て^て **か** 花

初百合^{はつひやく} 昔^{むかし}

遺稿^{いこう} 其形^{そのかたち}も花^{はな}も百合^{ひやく}ふ似^にて花^{はな}紫^{むらさ}あり、葉^はハ車前^{しやぜん}草^{くさ}ふ

似^にたり正月^{しんげつ}頃^{ころ}花^{はな}さ^さく^くゆ^ゆ多^{おほ}ふ初^{はつ}百合^{ひやく}ともい^いふ花^{はな}の時^{とき}葉^は

あ^あく^く因^よて焼^や百合^{ひやく}ともい^いふ万^{まん}葉^{はつ}及び^{及び}新撰^{しんせん}六帖^{りくてふ}

兼三

春物 風光

初学記^{しゅがくき} 春晴^{はるはる}日出^{ひで}て風^{かぜ}吹^ふと光^{ひかり}風^{かぜ}と

ふ^ふこ^こ **三月** 嗅茶

利茶^{りちや} 鹿文^{ろくぶん}云^い利茶^{りちや}嗅^か茶^{ちや}とハ俱^{とも}

味^{あじ}の善^よ悪^{わる}と辨^わふ^ふるとい^いふ、茶^{ちや}人^{にん}の所^{しよ}謂^ゐ茶^{ちや}香^{かう}眼^{がん}と称^{なづ}さる

類^{るい}の如^{ごと}し、九^く茶^{ちや}表^へ裏^{うら}一^{いつ}の如^{ごと}きと純^{じゆん}香^{かう}とい^いふ生^{なま}う^うと熟^{じやく}

あら^{あら}ど^ど、清^{せい}香^{かう}とい^いふ火^ひ候^{こう}均^{くん}停^{てい}る^ると蘭^{らん}香^{かう}とい^いふ

而^{しか}前^{まへ}純^{じゆん}具^ぐと真^ま香^{かう}とい^いふ更^{さら}ふ合^あ香^{かう}、浮^う香^{かう}間^{かん}香^{かう}漏^{ろう}香^{かう}此^こ

春 追加^{ちゅうか}よた^{よた}れ^れつ^つな^なむ^むく

皆不正の
よ正月 四方の春 よめ とも とも とも
氣云云、
春の気色の具

た正月玉打 きこの部 結方の
二月 余見るを、

種芋 種芋や花の盛りと
三月 鷹の巢 和

三才面会 鷹窟ふ生むる者ハ好て眠了木ふ巢
ふ者ハ常ハ立變ふ人家ふ育る者と巢鷹といふ **れ**

正月礼者 玉海集 春さち人ハつ
つ正月

鶴の庵丁 十七日 紀事 舞樂のまど始らざる前大
隅高橋隔年ふ交る事と勤む舞

樂畢て後霍高盛等の献わり群臣まてこま
と賜ふ云、舞御覽の条つらそーとつー **あ**

二月茄子植 夏のおの部
む二月 萍の

若葉 夏の追加 葎茂る
く正月 食つみ

青藍云今の俗誤つと蓬菜羹と食つとつと故ふ

俳諧者流もま同物と心得る者多しむり食つ

と唱へハ今の重詰のさひあて賀客饗應の具あれ

バ連句あはれらむ食類の差合と縁べし食つとつ

はつあらむ夫婦の嵐雪食つとや山居の味とお

わえ初柳居食つと蓬菜同物あらぬ徴ハ炭俵集

春の部 蓬菜ふさるむや伊勢の初より芭蕉云と

巻頭 蓬菜ふさるむや伊勢の初より芭蕉云と

て此句より飾り松箱の海老今朝の春ふといふ句

五章つらむ後ふ食つとや木曾の句ひの檜物松

水云同物あらんハ蓬菜食つと並出はさことか

隔てゝあてゑるべし但し木曾の句

ひの檜物とハ其器といふあてべし **や正月宿**

の春 遠近集 より年小留守と
二月 敷茶高

春 追くやま

大和本草 林中ふ多く生ずる葉ハ葎の葉及び

紅色節毎ふ葉三つつきく節毎葉の上ふ一處ふ十餘

花あつまり開く花の色淡紫小兒花と吸ふ二月

花ひ
三月 柳太刀

昔藍云此詞諸抄不載せど、
四季部類桃の節句雖柳

太刀云義未詳、但し諸抄の例より、桃の節句、
雖柳髪と次序とべきと、柳髪と省き、此詞小替

より、按むる小諸抄不載、柳髪やの部と省き、更

小柳太刀と出まへき道理あり、全、柳髪の書誤

誤とあるべし、さへ省くべきと、爰す賢して辨

まね、人の惑ひを解ん、例の老婆心を、
正月 窓の春 萬歳

禁裡へ来ると千壽万歳といふ、その部注を、一

条院の御宇、大江の定基三河守に任じ、其民小佛教

傳來の因縁と教へて舞まひ、
町汁 十日汁 紀吏

此三河万歳の始なりと、
洛下の旧俗、今朝毎ふづうら膳食と會所あひま、

此月頭人汁と設まつ、これと汁會と称なづ、喫くし畢は、

法令と讀よて教ふ町中の男女、
舞御覽 十七日

此式と守る、五月九月同然云、

紀事清涼殿東の小庭に舞樂あり、
松菜 菰荒本

鶴の庖丁此時に追加の部の部々、

一名盛蓬水傍下湿の地生、莖落葉似て亦線楞

あり、葉蓬以て肥壯、蓬葉比づれば、亦稀疎莖葉の間

は青子と結び、極めて細小、畧、苗葉と採り、煉き、熱く、水

に浸し、鹹味と入、淘洗し、油鹽を調へ、此詞四季部

類み、
二月 路のちうとあ 落の姑

えり、
天子集 三月 蒲

みて臺の立るといふふくし、
道織

中よりと落のちうといふふくし、

なうのふくし、
秋の部

菊花 正月 ころもぎ祝

青藍云増山の井、若菜、条ふ云、昔ハ若菜と上の子の

日ふ内藏寮並ふ内膳司より禁中奉せるあり、或ハ

十二種供するともありしより、公事根源不侍り、今て

在家七日ふ福くと、こゝろを祝ひ侍り、云、今ハ

在家といふとて、文意とめて按む、四季部類公事

の部ふ糝七種のあつもの奉るといふ注し、誤

此事公事根源及び後水尾院年中行事亦おもむきむ
且又糝ともうり、當字遣ふらど、祝ひの詞をそへて可ま
らんうゑあひ草やハ七日のこまうけと出せし、和訓栞にあら
き、倭名抄録とて、又糝ともうり、字書に糝ハ以米和
糝也といひ、練糝といひ、粉菜強難るの義、米粉とりく
菜羹と和さるるあり云、こまうけといひ、今の菜粥の事、
花より雨や具

三月 小櫻

花よりす色密に咲て、咲鐘の小櫻成と云、
物此花の色ふらとどるあり、○小櫻の

正月 毬

手まり奇年

足親 重寛、
そいふ小幼女の遊び、蓋
毬打ふあらうるありとて、

二月 出替

秋の部後
の出替の

正月 三ケ日

玉海集書初の真行
草や三ケ日 重寛、

里居

穀入と里居ともいふ、三の句は里居うね、或も
里居をもとて用ゐる人、為小作例とあけく

爰に贅も、類柑子、星合と中
の七日の里居うね 切悠、

二月 佐保姫鷹

日くむと云ふは、春神の氣を受くること、
とて云、一説、小鷹鳥の雛といふ、云、天子集、さう姫の鷹

三月 きき茶

追加の
部、嗅茶

正月 遊行札切

十六日 遊行上
人年中

諸人化益のため、一扁上人熊野権現より請らる、遊行
代々相傳六字名号の印を、正月十一日小押さへ、とて、
それと札切といふや、東都浅草日輪寺より問へり
小札切と称する事ありといへり、此詞四季部類小出

正月 御代の春

題黄金目、ハミモ一万
枚と御代の春 其角

正月 檠

草小あつちのふわらば、木の切株、
草小あつちのふわらば、木の切株、

の去年の古根のふら、蓬今ハ春、いひとて、ふら、是
蓬のふらとて、然れハ草木とも小檠の名目あり、

三月 緋櫻

小輪より莖長く、赤き、赤し
新撰六帖 夕つゝ日うつろふ雲やほろ

らん高根ふ立ちい
さくらの花光俊



正月 掩門戸

紀事京
俗元日

より三日ふ至りて民間門を
掩ふ心は福神を出るゝ為に



二月 西瓜蒔

注し
不及



増補歳時記禁草春之部終

